長野市の埋蔵文化財第70集

HACHIMAN-DEN-OKI SITE

八幡田沖遺跡

— 稲葉南俣住宅地造成事業地点 —

1995年3月

長野市教育委員会

序

平成５年３月、「高速道路」長野自動車道･上信越自動車道の開通は長野市にとって高速交通網社会の到来を感じさせる出来事でありました。また1998年の長野冬季オリンピック開催に向けて、関連施設建設や従来停滞していた道路整備等にともなう工事も着々と進み、長野市の景観も大きく変わりつつあります。しかしながら生活の向上を求める陰に地中に埋もれている貴重な歴史、埋蔵文化財がこれら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております八幡田沖遺跡は、裾花川が形成した扇状地上に立地している、広大な面積を有する裾花川扇状地遺跡群に属しております。従来この地区には埋蔵文化財の存在はあまり知られていませんでしたが、オリンピック関連事業にともなう芹田東沖遺跡の発掘調査を契機に、埋蔵文化財の包蔵については注意を要する地域となりました。本遺跡も試掘調査により発見された古墳時代を中心とする集落遺跡です。開発事業の性格上、今回の調査範囲は比較的狭いものでしたが貴重な遺構・遺物が出土しています。ここに長野市の埋蔵文化財第70集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました建設省ならびに長野市土地開発公社の皆様、発掘調査の実施に際し多大なご尽力を賜った地元南俣区の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成７年３月

長野市教育委員会教育長　滝澤忠男

例　言

1　本書は、稲葉南俣住宅地造成事業にともない、平成５年度に発掘調査、平成６年度に整理調査を実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業は、委託者長野市土地開発公社理事長　山岸　勲と受託者長野市長　塚田　佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査地籍は、長野県長野市大字稲葉2419番地３他であり、開発事業面積19,700㎡のうち埋蔵文化財の保護対象面積は道路建設部分（幅６ｍ・総延長350ｍ）3,900㎡である。

4　本遺跡は、上記開発事業に先立ち平成５年８月18日に実施した試掘をともなう確認調査によって発見された遺跡である。遺跡名称は字名を採用して「八幡田沖遺跡」とし、周知の埋蔵文化財包蔵地（長野市Ｂ－015）として登録した。

5　現場における発掘調査は、飯島が担当し、中殿が補助した。整理調査は飯島が統括し、各調査員、作業員が下記のとおり作業を分担した。

整理作業	遺物実測	前島　卓・中殿章子・鳥羽徳子・多羅沢美恵子・飯島哲也
	トレース	青木善子・飯島哲也
	写真撮影	飯島哲也

6　本書の編集は矢口が行い、執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を飯島、Ⅲ・Ⅳ章を矢口が担当した。

7　発掘調査の実施に際し、長野市土地開発公社ならびに地元南俣区の方々には埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき絶大なご協力を賜った。また保護協議、現場および整理作業において下記の方々・機関より有益なご指導・ご助言をいただいた。深甚なる謝意を表し明記するものである。

長野市土地開発公社　土地管理課管理係主査　寺島義文

長野市芹田地区南俣区長　宮下邦男

青木一男、臼居直之、小林秀夫、土屋　積、寺島孝典、廣田和穂、前島　卓（敬称略）

9　調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。なお、出土遺物の注記記号は、「ＨＤＯ」と表記してある。

凡　例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物について、その基本的資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は下記のとおりである。

1　調査区の概要については、第Ⅲ章第１節において概述した。また検出した遺構と出土遺物の詳細については、第Ⅲ章において時代別・遺構別に記述し、遺構の測量図と写真、遺物の実測図と写真を挿入した。

2　本調査において確認した遺構・遺物の一部については、その資料化の義務を果たせなかったため、本書に掲載していない。しかしできうるかぎり追認できるよう、基礎データはそのまま保管してある。

3　地図等に記載した方位は真北、また実測図等に掲載した方位は、すべて座標北を表している。調査区における座標北からの真北方向角は約10′ 32″ であり、また磁北は真北より西へ約６° 40’ の偏差がある。

4　遺構の測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138° 30′ 00″ 、北緯36° 00′ 00″ ）の座標値と、日本水準原点の標高を基準とし、㈲写真測図研究所の開発したコーディック・システムを援用するため同所に委託した。現場にて１／20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１／80の縮尺で掲載している。ただし遺物出土状況等の詳細図に関してはこの限りではないため、縮尺を明示してある。

5　遺構断面図における数値は、標高（371ｍ＋数値㎝）を表す。

6　検出した遺構の略記号については、奈良国立文化財研究所作成の記号をもとに本遺跡に対応させている。
ＳＡ…竪穴住居址、ＳＢ…掘立柱建物址、ＳＤ…溝址・河川址、ＳＫ…土坑、ＳＰ…小穴、
ＳＸ…性格不明遺構、Ｔｒ…トレンチ

7　遺物に関しては原寸にて実測図を作成した。本書では基本的に遺物実測図１／４に統一してあるが、遺物の種類によってはこの限りではないため縮尺を明示してある。

8　遺物図のうち土器類断面が白抜きのものは弥生土器・土師器を、黒塗りのものは須恵器を表す。

9　挿入した遺構・遺物写真の縮尺は任意である。

10　住居址等の遺構実測図や土器の遺物実測図において、焼土・炭化物等の範囲や土器の種類、黒色処理・赤色塗彩等の区別は網掛けによって下記のとおり表記した。

焼土　炭化物　赤色塗彩　黒色処理

目　次

序文、例言、凡例、目次

第Ⅰ章　調査経過……1
　第1節　調査に至る経過……1
　　1　開発事業の概要……1　　2　埋蔵文化財保護協議……2
　第2節　発掘調査日誌抄……2
　第3節　調査体制……4

第Ⅱ章　八幡田沖遺跡周辺の環境……5
　第1節　調査地の位置と地形……5
　第2節　調査地周辺の発掘調査歴……6

第Ⅲ章　調査成果……11
　第1節　調査方法と基本層序……11
　　1　調査区の設定……11　　2　試掘調査時の基本土層……11
　　3　遺構の分布……12
　第2節　奈良～平安時代の遺構と遺物……14
　第3節　古墳時代後期の遺構と遺物……21
　第4節　古墳時代前・中期の遺構と遺物……39
　第5節　弥生時代の遺構と遺物……47

　　遺物観察表……48

第Ⅳ章　結　　語……53

　　遺物写真……54

報告書抄録・奥付

挿　図　目　次

１図　調査地付近の字境図 ･････････････････ 5
２図　八幡田沖遺跡位置図 ･････････････････ 7
３図　八幡田沖遺跡周辺遺跡分布図 ････････ 8
４図　試掘調査位置図 ･･････････････････････ 11
５図　試掘調査基本土層柱状図 ･･････････････ 12
６図　遺構分布図 ･･････････････････････････ 13
７図　１号住居址実測図 ････････････････････ 14
８図　１号住居址出土土器実測図 ････････････ 15
９図　２号住居址出土遺物実測図 ････････････ 16
１０図　２号住居址実測図 ･･････････････････ 16
１１図　７号住居址出土土器実測図 ･･････････ 17
１２図　７号住居址実測図 ･･････････････････ 17
１３図　12 号住居址実測図･･････････････････ 18
１４図　19 号住居址実測図･･････････････････ 18
１５図　12 号住居址出土土器実測図･･････････ 19
１６図　23 号住居址実測図･･････････････････ 20
１７図　23 号住居址出土土器実測図･･････････ 20
１８図　27 号住居址実測図･･････････････････ 20
１９図　27 号住居址出土土器実測図･･････････ 20
２０図　３号住居址実測図 ･･････････････････ 21
２１図　３号住居址出土遺物実測図 ･･････････ 22
２２図　４号住居址出土土器実測図 ･･････････ 23
２３図　４号住居址実測図 ･･････････････････ 23
２４図　６号住居址実測図 ･･････････････････ 24
２５図　６号住居址完掘実測図 ･･････････････ 25
２６図　６号住居址出土遺物実測図 ･･････････ 26
２７図　９号住居址実測図 ･･････････････････ 26
２８図　９号住居址出土土器実測図 ･･････････ 27
２９図　10 号住居址実測図･･････････････････ 27
３０図　11 号住居址出土土器実測図･･････････ 28
３１図　11 号住居址実測図･･････････････････ 29
３２図　13 号住居址出土土器実測図･･････････ 29
３３図　13 号住居址実測図･･････････････････ 29
３４図　16 号住居址出土土器実測図･･････････ 30
３５図　16 号住居址出土土器実測図･･････････ 30
３６図　18 号住居址実測図･･････････････････ 31
３７図　18 号住居址出土遺物実測図･･････････ 32
３８図　20 号住居址実測図･･････････････････ 32
３９図　20 号住居址出土土器実測図･･････････ 32
４０図　22 号住居址実測図･･････････････････ 33
４１図　22 号住居址完掘実測図･･････････････ 34
４２図　22 号住居址出土土器実測図･･････････ 35
４３図　24 号住居址実測図･･････････････････ 36
４４図　26 号住居址実測図･･････････････････ 37
４５図　１号掘立柱建物址実測図 ････････････ 37
４６図　２号掘立柱建物址出土遺物実測図････ 37
４７図　１号掘立柱建物址出土土器実測図････ 37
４８図　２号掘立柱建物址実測図 ････････････ 38
４９図　５号住居址実測図 ･･････････････････ 39
５０図　５号住居址出土土器実測図 ･･････････ 39
５１図　８号住居址実測図 ･･････････････････ 40
５２図　８号住居址出土遺物実測図 ･･････････ 41
５３図　14 号住居址実測図･･････････････････ 42
５４図　14 号住居址完掘実測図･･････････････ 42
５５図　14 号住居址出土土器実測図(１)･･････ 43
５６図　14 号住居址出土土器実測図(２)･･････ 44
５７図　15 号住居址実測図･･････････････････ 45
５８図　17 号住居址実測図･･････････････････ 46
５９図　25 号住居址実測図･･････････････････ 46
６０図　25 号住居址出土土器実測図･･････････ 47
６１図　６号溝址出土土器実測図 ････････････ 47

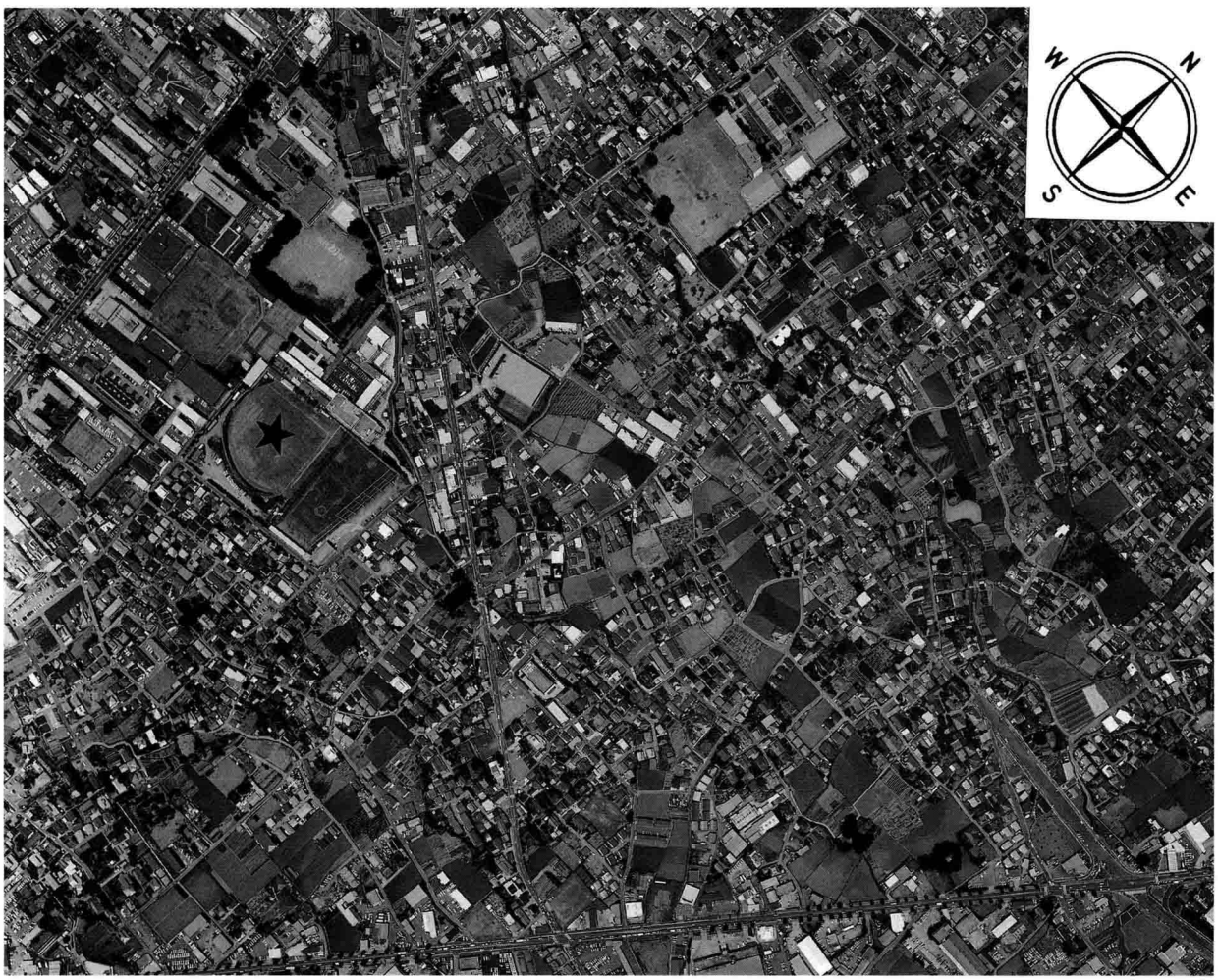
第Ⅰ章　調査経過

第１節　調査に至る経過

１　開発事業の概要

調査地となった長野市芹田南俣区は、ＪＲ信越本線長野駅東口から約1.5km、徒歩約15分間という恵まれた交通環境にある。交通量の激しい通称東（あづま）通り添いには信越郵政局などの官公署や事業所･工場等が建ち並んでいるものの、一歩奥へ足を踏み入れると閑静な住宅域が展開する土地利用がなされている。

ＪＲ長野駅周辺で昭和42年度から施行されてきた長野駅周辺第一土地区画整理事業（面積10.7ha）も平成５年度に完了した。ひきつづきＪＲ長野駅東口の栗田区を中心に計画された長野駅周辺第二土地区画整理事業（面積58.2ha）が平成５年度に都市計画決定され、およそ平成20年度までの予定で開始された。この事業の目的は、①北陸新幹線長野駅の表玄関にふさわしい都市基盤の整備を行い、新しい都心地区としての環境を整備し健全な市街地の造成を図る。②住居系の一部を商業系にし、土地の高度利用を図る。③駅前広場・街路・公園等の整備を行い、都市機能の増進と住居環境の改善を図る。という３つの大きな基本柱である。建物移転数は1200戸以上が予定される、都市基盤整備を兼ねた大規模な土地区画整理事業である。この区画整理事業によって生じる家屋移



Ⅰ－１　調査地周辺の航空写真（平成２年６月撮影、㈱ジャステック）

転などの代替地として、本発掘調査の起因事業となる稲葉南俣住宅地造成事業が長野市土地開発公社によって計画された。信越郵政局の東側に当たる、長野市大字稲葉（南俣）2419番地３他の長野商業高校グラウンド跡地に、宅地68区画･総事業面積19,700㎡の宅地造成事業である。宅地のほか６ｍ道路総延長650ｍを新設、公園や調整池なども築造される計画である。なお、東南隅の一部には22ｍ幅の都市計画道路が計画されている。

2　埋蔵文化財保護協議

従来調査地周辺は裾花川の氾濫源であり、最近まで遺跡のないところとして認識されてきたため、「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内ではなかった。しかし、オリンピック関連事業にともなう芹田東沖遺跡の発掘調査を契機に、「裾花川扇状地遺跡群」として埋蔵文化財の存在には注意を要する地域となった。こうした中で稲葉南俣住宅地造成事業地として当該地が選定される運びとなった。事業主体者である長野市土地開発公社理事長の依頼により、事前に埋蔵文化財の有無を確認するため平成５年８月18日試掘をともなう埋蔵文化財確認調査を実施した。その結果、良好な遺物包含層と竪穴住居跡と思われる遺構を確認し、埋蔵文化財への影響が懸念される道路部分約3,900㎡について記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することとなった。

平成５年10月27日付５長土第233号にて、文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が長野市土地開発公社理事長から提出される。同日付５埋第205号にて長野県教育委員会教育長あてに進達し、平成６年３月15日付５教文第５－269号にて県教委より発掘調査実施の指導を受けた。平成５年10月27日付で委託者から発掘調査の依頼を受け、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を平成５年11月２日付で締結した。現場における発掘調査は、平成５年11月８日から平成６年２月21日（中断期間：平成５年12月28日～平成６年２月１日）までの70日間実施した。発掘調査が晩秋から冬季にかけてとなることから整理作業および報告書の刊行は平成６年度事業として行うことにした。

Ⅰ－２　重機による表土剥ぎ（A区）

Ⅰ－３　各遺構の掘り下げ（B区）

第２節　発掘調査日誌抄

1993（平成５）年

11月８日(月)	晴天	重機による表土剥ぎ作業開始
11月10日(水)	曇天	器材搬入　作業員によるＢ区壁面精査
11月11日(水)	小雨	Ｂ区遺構面検出作業
11月12日(金)	晴天	ＳＡ１・３・４・６掘り下げ開始
11月15日(月)	晴天	雨水処理　調査継続
11月17日(水)	晴天	ＳＡ６等写真撮影
11月18日(木)	晴天	ＳＢ１・２確認・掘り下げ
11月19日(金)	晴天	Ａ・Ｅ区壁面精査　ＳＡ５等掘り下げ
11月22日(月)	晴天	Ｃ区壁面精査と遺構面検出
11月25日(木)	晴天	Ｂ区精査　全体写真撮影
11月26日(金)	晴天	第１回コーディックシステム（ＣＳ）測量　ＳＡ14（焼失住居）等掘り下げ
12月１日(水)	晴天	ＳＡ14検出状況写真撮影

12月３日㈮	曇天	Ｅ区遺構面検出、側溝Ｔｒ掘り下げ
12月６日㈪	晴天	Ｃ・Ｅ区遺構面検出作業
12月８日㈬	曇天	Ｆ区遺構面検出作業　ＳＡ等掘り下げ
12月10日㈮	曇天	ＳＡ16炭化材検出状況写真撮影
		第２回ＣＳ測量
		地元南俣区老人会の現場見学会
12月13日㈪	晴天	ＳＡ等掘り下げ
12月17日㈮	曇天	ふたたびＣ区遺構検出作業
12月21日㈫	晴天	第３回ＣＳ測量
12月22日㈬	小雪	ＣＳ測量図結線　ＳＡ等写真撮影
12月24日㈮	晴天	ＳＡ22遺物取り上げ
12月27日㈪	晴天	第１期現場作業終了
1994（平成６）年		
２月２日㈬	晴天	調査区南半部分重機掘削開始
２月８日㈫	晴天	Ｄ～Ｇ区遺構面検出作業
２月９日㈬	晴天	ＳＡ等掘り下げ作業
２月10日㈬	降雪	ＳＡ等写真撮影
２月15日㈫	晴天	雪かき作業　ＳＤ等掘り下げ
２月18日㈮	晴天	第４回ＣＳ測量
		器材撤収、現場作業完了

Ｉ－４　住居址の掘り下げ（Ｂ区）

Ｉ－５　積雪除去後の遺構検出（Ｄ区）

Ｉ－６　発掘調査参加者

第３節　調査体制

長野市における埋蔵文化財の保護措置については、史跡等の整備事業にかかわる学術調査を長野市教育委員会社会教育課が担当し、各種開発行為にともなう緊急調査は埋蔵文化財センターが担当している。本発掘調査は、長野市土地開発公社理事長山岸　勲と長野市長塚田　佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づき、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）の直轄事業として実施した。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	滝澤忠男
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	荒井和雄
		主幹兼所長補佐	鈴木貞男（Ｈ６）
		所長補佐	山中武徳
		所長補佐	矢口忠良

庶務係　（係長　山中武徳）
　事務員　青木厚子
　臨時職員　塚田容子（Ｈ６）

調査係　（係長　矢口忠良）
　主査　青木和明
　主事　千野　浩
　主事　飯島哲也（調査主任）
　主事　風間栄一（Ｈ６～）
　主事　小林和子（Ｈ６～）
　専門主事　羽場卓雄（～Ｈ５）
　専門主事　太田重成
　専門主事　清水　武
　専門員　中殿章子（調査員）
　専門員　横山かよ子（～Ｈ５）
　専門員　笠井敦子
　専門員　山田美弥子
　専門員　寺島孝典
　専門員　西澤眞弓
　専門員　田中由美子（Ｈ６～）
　専門員　田村直也（Ｈ６）

調査員　矢口栄子、青木善子

発掘作業員　金子ゆき、川浦秀子、北村幸子、神頭幸雄、佐々木慶子、佐藤ひで子、定塚初太郎、成田孜子、新津三千子、西尾千枝、三九二富子、宮沢武男、宮沢久子、宮島静美、美谷島昇、宮原千治、宮原孝子、峯村孝一、向山純子、山崎洋子、山室やすい、吉沢トシ子、脇坂智子

整理作業員　池田見紀、岡沢治子、小泉ひろ美、徳成奈於子、西尾千枝、向山純子、武藤信子池田寛子、多羅沢美恵子、鳥羽徳子

測量委託　有限会社写真測図研究所　代表取締役　杉本幸治

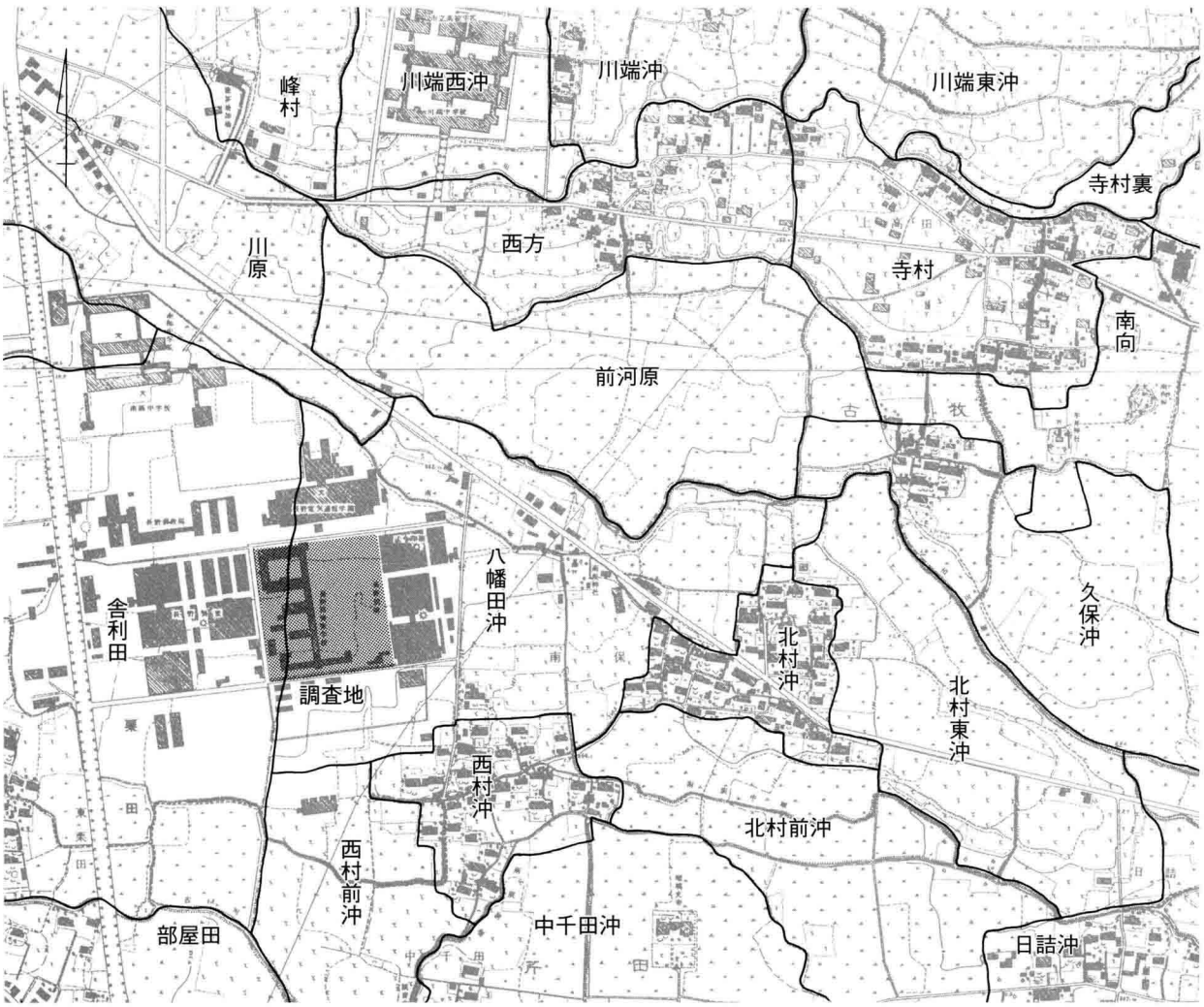
重機等賃借　北信土建株式会社　代表取締役　野澤柳一郎

第Ⅱ章　八幡田沖遺跡周辺の環境

第１節　調査地の位置と地形

長野県の県庁所在地である長野市は県の北部にあり、総面積404.35㎢、人口約36万人の地方中核都市である。地形および地質的には、中央部の長野盆地平野部にあたる通称善光寺平と、西側の西部山地（通称西山）、東側の東部山地（河東山地）に大別されている。東部山地を形成する新第三系は西部山地よりも古く、その年代は約1000万～200万年前と推定されている。中央部の善光寺平は長野市を中心に南西から北東の長軸をもつ狭長な盆地で、長さ約40㎞・最大幅約10㎞・標高330～360mである。第四紀中ごろに形成された内陸盆地で、周辺山地から流入する中小河川の扇状地堆積物や千曲川・犀川の氾濫原堆積物によって成り立っている。

ミズバショウの群生地として有名な奥裾花渓谷を源流とする裾花川は、長野市街地に入り流路を急激に南に変え、犀川と直交するように合流する。これは慶長年間（1600年頃）に、松代藩城代家老の花井吉成・吉雄父子により新規開削の河川改修がなされたもので、それ以前は長野市街地を東南方向に流れていた。現在の北八幡川・南八幡川・古川・計渇川・宮川の各流路は旧裾花川河道跡の微低地帯に導かれており、調査地付近の字境図（２



１図　調査地付近の字境図（１：8,000、地形図は大正15年測量・昭和27年修正）

図）にも、川原・前河原などの古字名から、七瀬から連続する旧裾花川の河道だったことが推測される。

裾花川扇状地は旭山北麓の里島付近を扇頂部として、北は善光寺下～平林～北尾張部辺りで浅川扇状地との複合扇状地を形成する。南は若里～川合新田辺りで犀川氾濫原と接しながら東の千曲川氾濫原に向かって、100分の１程度の勾配で東南方向になだらかに傾斜している。扇頂部にあたる市街地西部では、裾花川に沿って数段の河岸段丘が形成されている。最高段丘には左岸に往生寺地籍、右岸に平柴地籍が立地し、第２段丘には新諏訪町地籍が立地し、第３段丘には長野商業高等学校、第４段丘には長野県議員会館などが建てられている。扇央部から扇端部にかけては、比高差２～４ｍ程度の低い崖が扇状地の傾斜方向に長く続いている。これらはかつて裾花川が扇状地面を刻んで流れた痕跡と考えられ、こうした地形から「長野」の名の起こりとする説もある。調査地付近でも字西方と前河原、南向と久保沖の境は比高差１～２ｍ程度の浸食段丘が明瞭である〔第２図〕。高田の名のとおり同一微高地上となる西方・寺村・南向には、それぞれ西方遺跡・寺村遺跡・南向塚古墳が立地し、古代からの土地利用がなされていた。扇状地南縁の若里にも犀川の側方浸食段丘が続いている。

このような地形のため芹田地区はたびたび水害に見舞われている。1742（寛保２）年８月の、いわゆる「戌の満水」では裾花川の各所が押し切られ、南俣･千田村は田畑が残らず水没し土砂で埋まった。1865（慶応元）年にも大雨によって千曲川・犀川・裾花川の堤が決壊している。1891（明治24）年７月18日には大雨のために裾花川の堤防が岡田付近で決壊し、久保沖の田んぼが一面水没したという。1902（明治35）年７月15日にも、豪雨のため裾花川の水量が約３ｍの高水位におよんで堤防を乗り越え、芹田一帯が浸水した。1949（昭和24）年９月23日には夜来降り続いた豪雨により九反付近で堤防が２箇所決壊し、一瞬にして芹田を中心とする2100戸以上が流失・浸水し、死者・行方不明者は８人という被害を受けた。これ以降、裾花川は県庁付近から犀川に合流するまで河川改修が進み連続堤防となり、大規模な水害は発生していない。

今回の発掘調査地点は長野市芹田地区南俣に所在し、旧裾花川の河道と考えられる前河原に隣接する八幡田沖にあたる。島状に形成された微高地上と考えられ、試掘調査による発見を契機に字名を冠して「八幡田沖遺跡」と命名した。

参考文献　長野市誌編さん委員会　1997『長野市誌』第１巻　自然編　長野市

第２節　調査地周辺の発掘調査歴

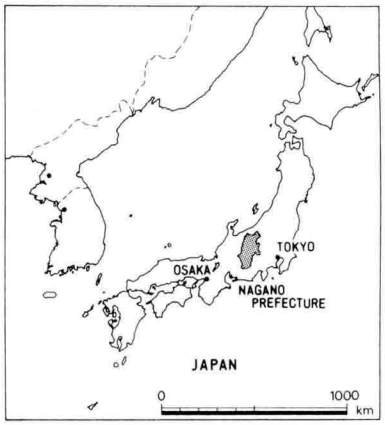
八幡田沖遺跡の属する裾花川扇状地遺跡群は、市街地中心部に近いこともあり早くから住宅地あるいは商業地として機能していた。また、扇状地上の厚い堆積物に覆われ地表面での遺物散布状態や微地形の観察による遺跡範囲の推定が困難な地域であった。近年の市街地再開発事業などの土木工事にともない遺跡の新発見も含めてようやく遺跡範囲の推定が可能な状況となってきた。

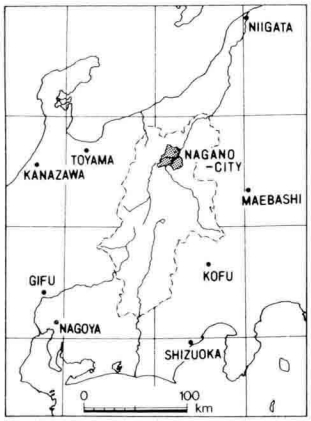
２　八幡田沖遺跡(2)　－信越郵政研修所地点－

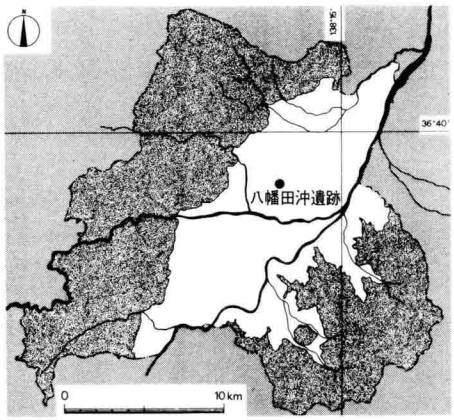
信越郵政局研修所庁舎新築工事に先立ち、平成６年度に発掘調査を実施した。発掘調査面積190㎡の範囲に、奈良～平安時代前半の掘立柱建物址１棟、溝址２条、土坑１基が検出されている。

３　西方遺跡(1)　－県道インター線地点－

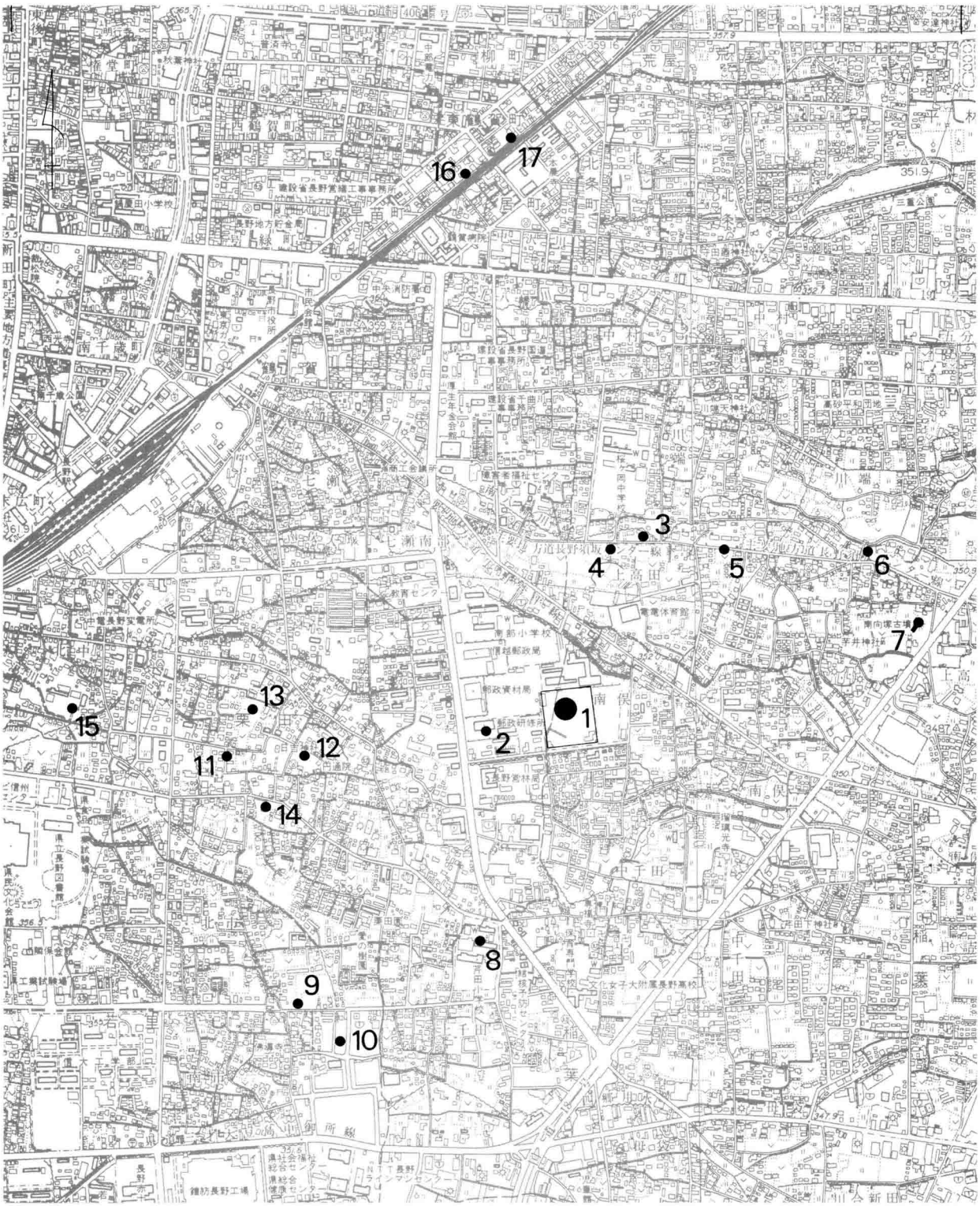
国補街路事業（主要地方道栗田屋島線高田）にともない、平成６年度から発掘調査を実施している。古墳時代前期の竪穴住居址３軒、古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居址３軒・溝址７条、平安時代の竪穴住居址３軒・土坑３基・溝址２条などが検出されている。古墳時代前期の竪穴住居址は大型で床面から多量の土器が出土し、古墳時代後期の竪穴住居址からは滑石製の勾玉１個が出土している。南向塚古墳とは連続する微高地上にあり、時







2図　八幡田沖遺跡位置図（1：25,000）



1	八幡田沖遺跡(1)	2	八幡田沖遺跡(2)	3	西方遺跡(1)	4	西方遺跡(2)
5	中沢城館跡	6	寺村遺跡	7	南向塚古墳	8	芹田小学校遺跡
9	芹田東沖遺跡(1)	10	芹田東沖遺跡(2)	11	東番場遺跡	12	栗田城跡
13	栗田城跡(2)	14	栗田城跡(3)	15	御所遺跡	16・17	浅川扇状地遺跡群

3図　八幡田沖遺跡周辺遺跡分布図（1：15,000）

期的にも関連性がうかがえる。

4　西方遺跡(2)　―上高田第一土地区画整理事業地点―

市施工の長野市上高田第一土地区画整理事業にともない、平成８・10・11年度に発掘調査を実施した。検出した遺構は古墳時代後期の竪穴住居址１軒、奈良時代の住居址１軒、平安時代後期の竪穴住居址７軒のほか、溝址・土坑・小穴などである。近代以降と思われるカクランが著しく、またきわめて狭長な調査区が多いため、全容が判明した遺構はほとんどない。試掘調査では緑色凝灰岩製管玉１個が出土している。

5　中沢城館跡

近年の造成・開発によって現状地形からは遺構の痕跡を見ることはできないが、古い地形図には堀跡や土塁が明瞭に表現されている〔１図〕。堀の内部は南北約55m、東西約40mの方形館で、南辺は旧裾花川の河道に面している。国補街路事業にともなう西方遺跡(1)発掘調査の際、試掘トレンチを設定し、堀と考えられる深さ約２mの溝址を検出したが、東側の溝肩部のみで後世の攪乱が著しく対辺は確認されていない。

6　寺村遺跡

民間事業所建設工事に先立って約400㎡が発掘調査され、平安時代の竪穴住居址６軒などが確認された。10世紀中頃から11世紀前半まで連続する集落遺跡と考えられる。

7　南向塚古墳

別名王塚・直塚山・ながめ塚などとよばれ、長野市誌編さん事業の一環として墳丘測量調査が実施された。墳丘の形は切頭円錐形の円丘に小規模な前方部が南西につく前方後円墳とされているが，帆立貝形古墳や造出付円墳の可能性も否定できない。規模は全長46m・後円部の直径33m・後円部の高さ4.8m・前方部の長さ13m・幅８mを測る。段築・葺石・埴輪等の外部施設は認められず、内部施設もいっさい不明である。1910（明治43）年頃に後円部の東北斜面からメノウ製勾玉１個が表面採集されている。また、古墳を描いたものとしては県下最古となる1759（宝暦９）年に描かれた絵図面が個人宅より1979（昭和54）年に発見されている。長野盆地平野部に立地する唯一の前方後円墳であり、1969（昭和44）年に市史跡に指定された。

8　芹田小学校遺跡

1986（昭和61）年に、校舎増改築にともなって発掘調査が実施され、平安時代後半の竪穴住居址２軒・溝址２条などが確認された。竪穴住居址は共に一辺が８m代と６m代であり、比較的大型に属すものである。古代芹田郷との関係が推測されている。

9　芹田東沖遺跡(1)　－栗田安茂里線地点－

都市計画道路栗田安茂里線建設事業にともない、平成４年度に1,300㎡が発掘調査された。平安時代と思われる柱穴をともなう水田遺構と平安時代～中世の溝址４条が確認された。

10　芹田東沖遺跡(2)　－文化コンベンション地点－

長野市文化コンベンション施設等建設事業にともない、平成５年度に5,200㎡、平成６年度には3,400㎡、平成７年度に1,200㎡が発掘調査された。地表下約２mまでに２層の遺物包含層があり、下層からは縄文～弥生時代の土器片が出土している。上層は奈良～平安時代の遺構面であり竪穴住居址44軒・掘立柱建物址13棟以上のほか溝址１条や土坑・小穴が多数確認されている。特筆すべき出土遺物として「市寸」と墨書された須恵器坏があげられる。現在も地名として残る若里の北市・南市はもと市村であり、寸の文字に村を当てることが可能であれば水内郡芹田郷との関連や後代の市村庄成立の背景として注視されている。

11　東番場遺跡

1987（昭和62）年に、民間宅地造成工事に先立って256㎡が発掘調査された。古墳時代前期の土坑１基、古墳時

代後期の竪穴住居址２軒と土坑４基、奈良時代の土坑４基、時期不明の竪穴住居址２軒・土坑９基などが確認された。栗田城（堀之内城）との関係をうかがわせる志野焼の小皿が出土している。

12　栗田城跡　－グランドハイツ地点－

1990（平成２）年に、「グランドハイツ東公園」建設工事に先立って800㎡が発掘調査された。栗田城内郭部と推定される位置に、80基におよぶ土坑と柱穴群、それらにともなう400点以上の中世遺物が確認された。出土遺物の主な時期は14世紀代から15世紀前半であり、文献史料における栗田氏関係の記述との整合性がうかがえる。

13　栗田城跡(2)　－上條器械店建築地点－

1993（平成５）年に、北陸新幹線建設事業にともなう代替地としての上條器械店新築工事に先立ち、約500㎡が発掘調査された。栗田城の外郭部と推定される位置であり、溝址３条と多数の土坑と柱穴群が検出されている。なかでも溝址から出土した古瀬戸天目茶碗はほぼ完形の優品である。

14　栗田城跡(3)　－土木事業代替地地点－

1994（平成６）年に、長野県土地開発公社の委託により土木事業代替地先行取得事業にともなって約300㎡が発掘調査された。栗田城の外郭部と推定される位置であり、上層は15世紀末から16世紀前半、下層は14世紀代という２面の遺構面を検出した。上層面では土坑４基・溝址２条と若干の柱穴群、下層面では竪穴状遺構１基・土坑７基・溝址２条が検出されている。

15　御所遺跡　－鉄道学園跡地地点－

長野駅周辺第二土地区画整理事業にともない、平成６年度に2,100㎡、平成７年度に1,100㎡が発掘調査された。調査地は中世信濃守護小笠原氏の館跡と推定されている場所であり、検出した遺構面２面のうち、上層面では中世館周辺部の居住域を示唆する柱穴群や溝址・土坑が検出され、館跡に関連すると考えられる大溝も確認されている。下層面では古墳時代後期の竪穴住居址60軒・溝址10条、奈良～平安時代の竪穴住居址14軒・溝址６条などである。特筆すべき出土遺物として古墳時代の金箔板や玉類、皇朝十二銭の富寿神寶がある。

16・17　浅川扇状地遺跡群　－北陸新幹線地点－

平成５年度から長野市北部においても本格的に着手された北陸新幹線の建設工事は、浅川扇状地遺跡群の扇端部を横断する形で貫き、これにともなう発掘調査は㈶長野県埋蔵文化財センターで実施している。これによれば、ほぼ全域にわたって埋蔵文化財の包蔵を確認することができ、Ｗ２区（早苗町、16）調査区からは弥生時代中期後半の竪穴住居址８軒・溝址31条・土坑50基、古墳時代前期の竪穴住居址23軒・掘立柱建物址１棟・土壙墓３基・溝址17条、土坑66基などが検出されている。またＷ３区（東鶴賀町、17）からは竪穴住居址18軒（弥生時代中期後半３軒・弥生時代後期１軒・古墳時代前期５軒・古墳時代後期３軒・時期不明６軒）、時期不明の掘立柱建物址５棟・柵址１条・溝址17条、土坑79基などが検出されている。

参考文献　長野市教育委員会　1987『芹田小学校遺跡』長野市の埋蔵文化財第21集

長野市教育委員会　1988『東番場遺跡』長野市の埋蔵文化財第26集

長野市教育委員会　1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第38集

長野市教育委員会　1994『栗田城跡(2)（東番場遺跡）』長野市の埋蔵文化財第61集

長野市教育委員会　1995『栗田城跡(3)』長野市の埋蔵文化財第68集

長野市教育委員会　1997『裾花川扇状地遺跡群　寺村遺跡』長野市の埋蔵文化財第86集

飯島哲也・風間栄一　1998「長野市南向塚古墳墳丘測量調査報告」『市誌研究ながの』第５号

㈶長野県埋蔵文化財センター　1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書５　－長野市内その２－

第Ⅲ章　調査成果

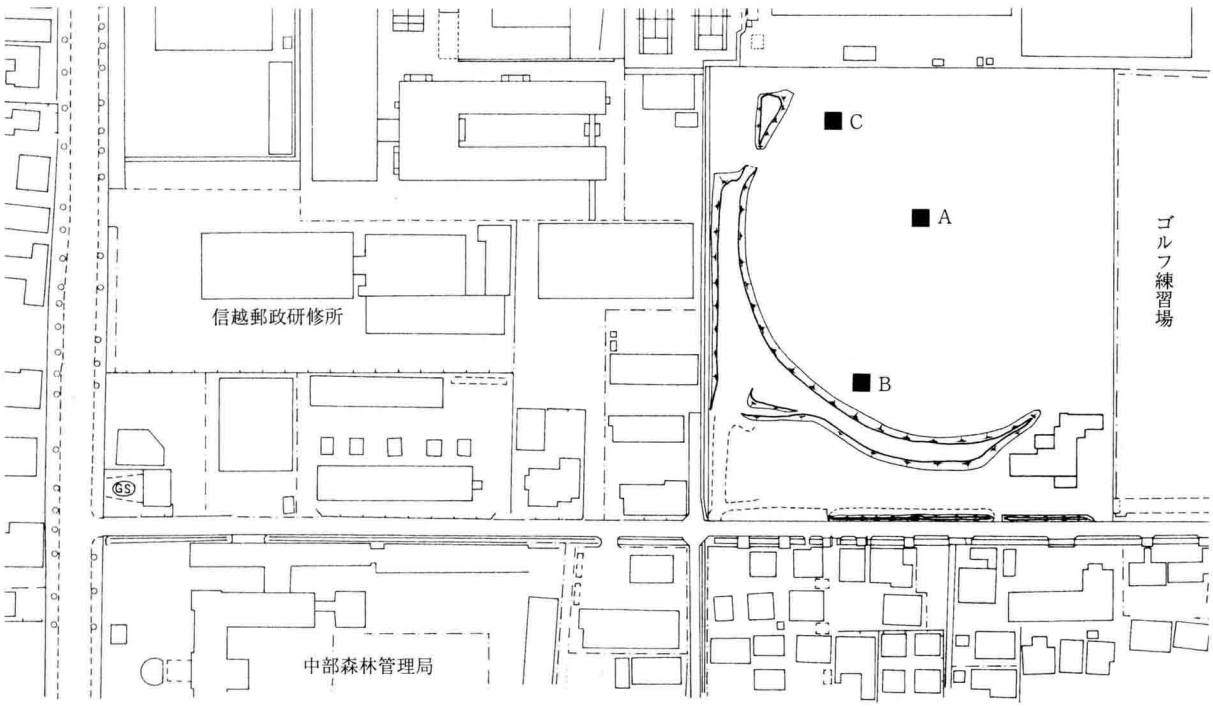
第１節　調査の方法と概要

１　調査区の設定（６図）

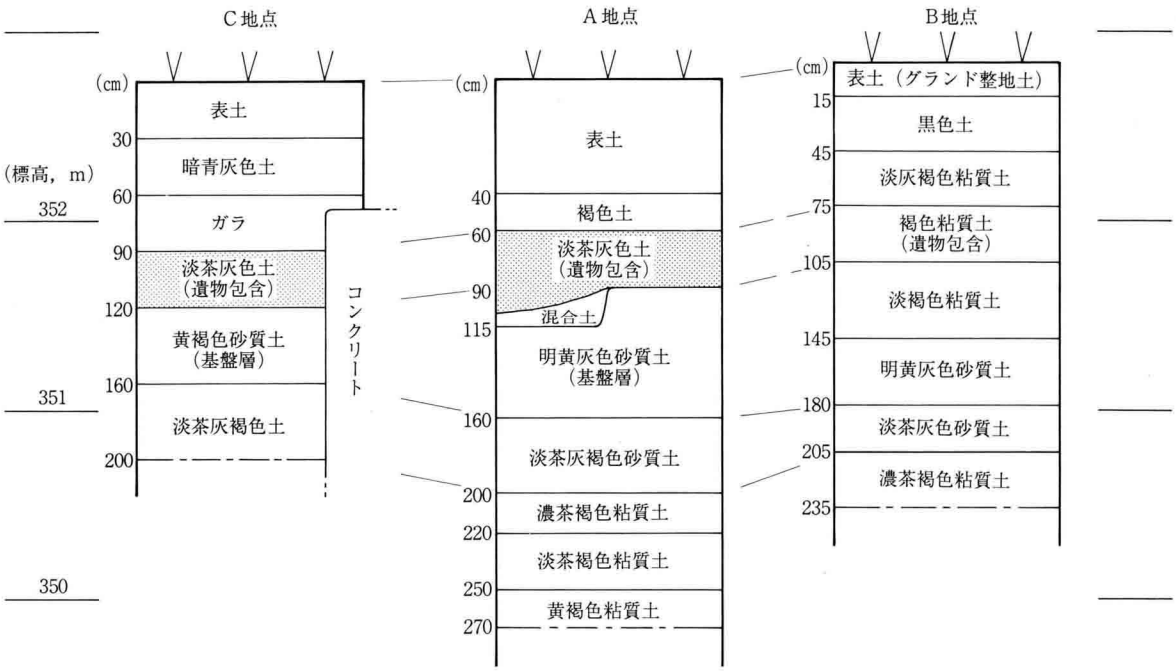
調査地となる「稲葉南俣住宅地造成事業」予定地総事業面積19,700㎡のうち主体となる68区画の宅地部分については、埋蔵文化財包蔵状況との調整の結果、記録保存は実施せず現状保存とした。総延長650ｍの６ｍ道路部分約3,900㎡については、永久構築物であることから埋蔵文化財保護対象とした。道路敷きに限定されたためトレンチ的調査になり、調査の進行上東西路線を北からＡ区～Ｄ区、南北路線をＥ区・Ｆ区、進入路部をＧ区と呼称する。起因工事工程との調整からＡ区から調査をはじめ、一部に併行しながらＢ区１次面そしてＢ区２次面へと移行した。地表面から遺構検出面までは法面バケットを装着した大型重機により徐々に掘削し、以後は作業員により遺構の検出・掘り下げを行い、調査員が記録作業に従事した。

２　試掘調査時の基本土層（４・５図）

試掘調査は事業地内の任意の地点に３か所の試掘坑を設定し重機により掘削した。各試掘坑にて検出した基本土層は砂質土層と粘質土層に大別される。第１層はグランド造成時の盛土である。Ａ地点の第３層淡茶灰色土層には炭化物・土器片が含まれており、遺物包含層と考えられる。また、その下層である明黄灰色砂質土層を掘り込んだ住居址と思われる遺構が確認された。さらに下層は砂質と粘質の互層となり、埋蔵文化財は確認されない。Ｂ地点では遺物包含層が検出されなかったが、Ｃ地点では一部旧建物基礎によって破壊を受けているものの遺物包含層が残っており、事業予定地の北側に埋蔵文化財を包蔵する可能性が高い。



４図　試掘調査位置図（１：2,500）



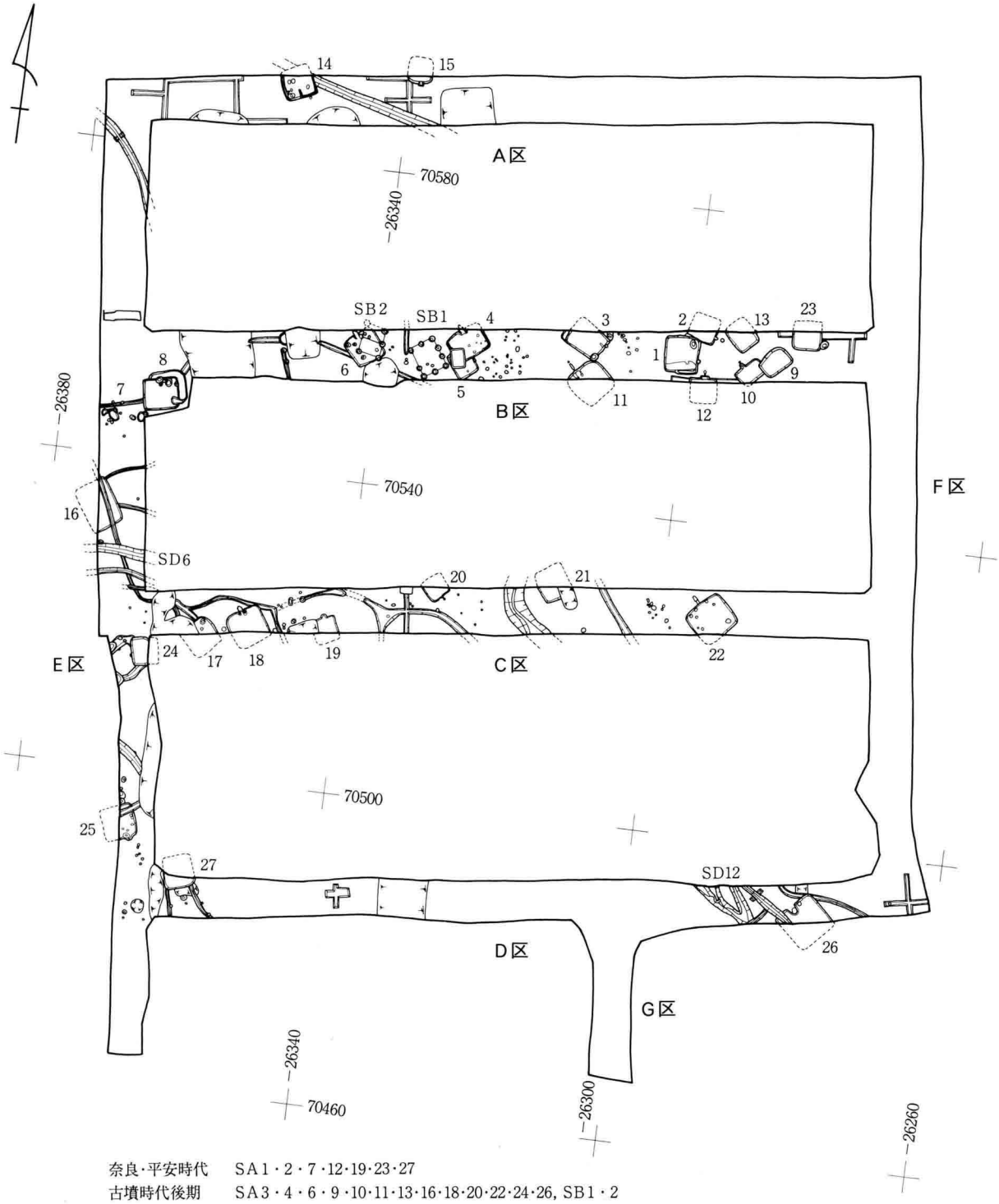
5図　試掘調査基本土層柱状図

3　遺構の分布（6図）

住居址等の居住遺構はB区とC区に集中して確認されるのに対し、F区では遺構が認められなく、他区では散在的な在り方を示している。時期別に分布状態を瞥見するに、奈良・平安時代ではB区とC区に認められるものの密集化しない。古墳時代後期では遺構数が増加し、A区・F区を除き各区に展開するようになり、集落の中心をB区周辺に求められる。前・中期では調査地の北側に点在する傾向にある。弥生時代ではA区とE区に溝が各1条検出されたが、居住遺構は確認されない。

Ⅲ－1　B区遺構の分布（西より）

Ⅲ－2　B区遺構の分布（東より）



奈良・平安時代　SA1・2・7・12・19・23・27
古墳時代後期　SA3・4・6・9・10・11・13・16・18・20・22・24・26, SB1・2
古墳時代中・前期　SA5・8・14・15・17・25
弥生時代後期　SD6

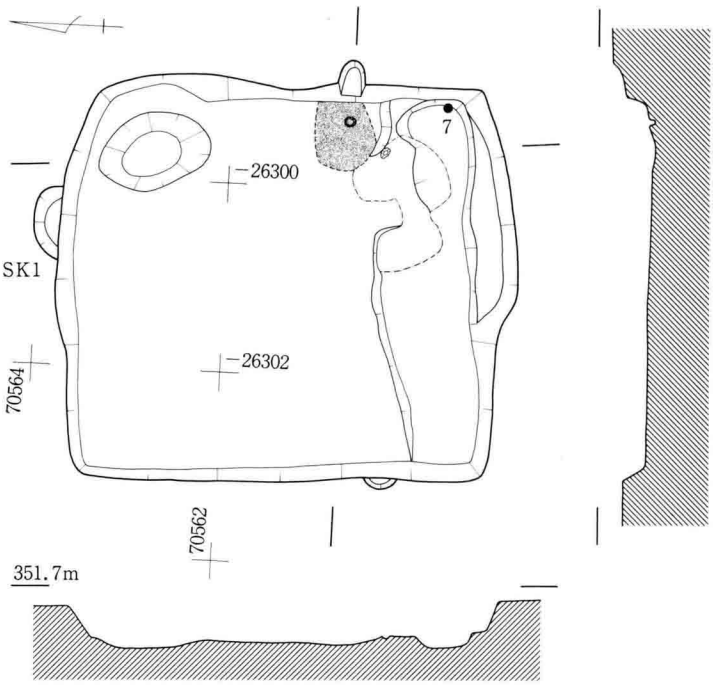
6図　遺構分布図（1：800）

第２節　奈良・平安時代の遺構と遺物

１号住居址

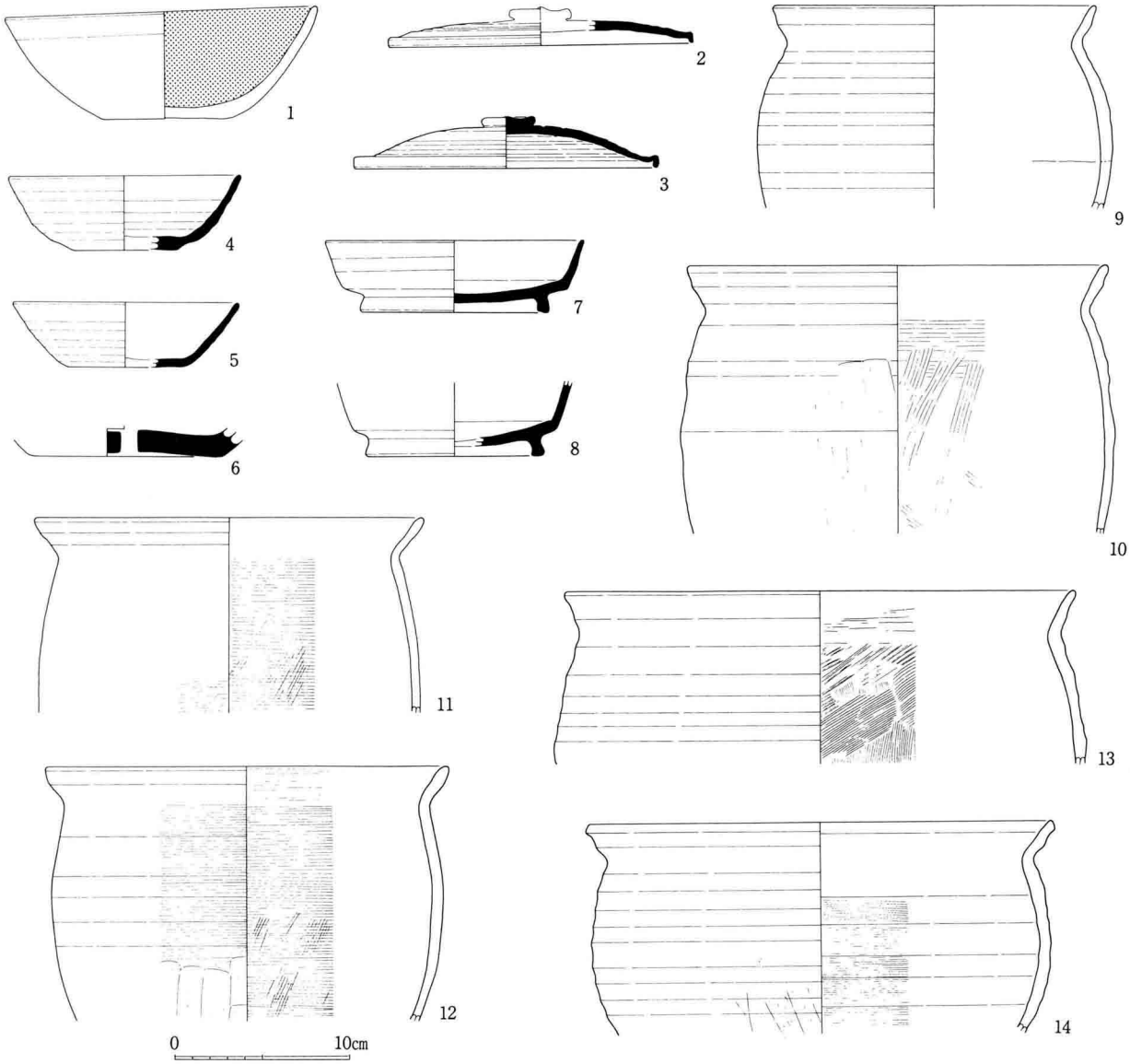
遺構（７図）　Ｂ区に位置し、該期の２号住居址･１号土坑と重複関係にある。これらとの前後関係は不明である。形態は長方形を呈し、主軸4.2m・東西軸4.8m・深さ35cmの規模である。主軸方向はほぼ東西を指す。カマドは東壁中央より南側に構築されており、両袖形態のものであるが調査では火床と支脚石埋設小穴および煙道を検出したにすぎない。火床は鍋底状に５cm程窪み、焼土を残すものの焼土塊化していない。煙道は壁外に35cm程突出する。床面は若干の凹凸がみられるものの堅緻である。東壁に沿って最大幅1.1m･深さ12cm程の溝状の掘り込みが認められたが性格は不明である。ただし、この遺構にカマドから排出されたとみられる炭化物の散布が確認されることから、住居機能を有していた時期には存在していたものと思われる。ちなみに１号土坑は円形を呈し、直径0.7m･深さ15cmの規模になるものと推定する。

遺物（８図）　須恵器高台坏（７）を除き破片出土である。甕・鉢はカマドおよびその周辺から出土している。器種には黒色土器坏（１）、須恵器蓋（２・３）・坏（４～６）・高台坏（７・８）、土師器甕（９～13）・鉢（14）がある。これらの土器類はすべてロクロ調整を基調としている。坏類はロクロからの切離しを糸切りによって行っているが、高台坏にはさらに回転ヘラケズリが施され丸味を帯びる。１の内面はヘラミガキ後黒色処理される。６の底部には焼成後円孔が穿たれ、周囲を打ち欠いていることから紡錘車に転用している可能性



７図　１号住居址実測図

Ⅲ－３　１号住居址



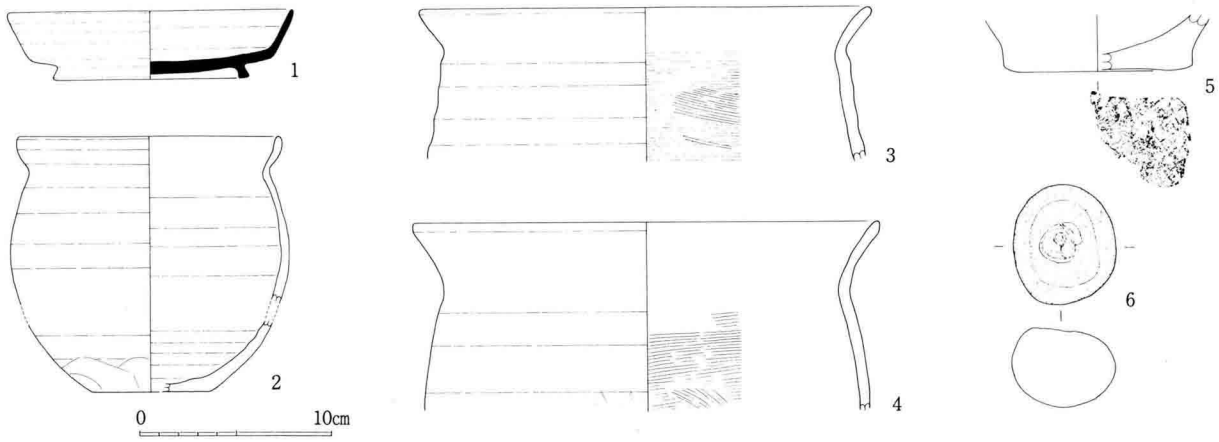
8図　1号住居址出土土器実測図

がある。甕における特徴は共にロクロ調整である他に、最大径が体部中位にあり、この部位以下にタテヘラケズリが施される点にある。

2号住居址

遺構（10図）　1号住居址と南壁で重複関係にあり、これよりも深く掘り込んでいる。調査では南壁の両隅部付近のみを検出したにすぎず、遺構の大部分は調査区域外にある。形態は方形あるいは長方形と推定され、主軸3.4m・深さ45cmの規模になる。主軸方向はN104°Eを指し、東壁南寄りにカマドを構築している。カマドは破壊され火床焼土と40cm程壁外に延びる煙道が残存したにすぎない。床面は平坦で軟弱である。

遺物（9図）　出土量は少なく、土器類はすべて破片出土である。器種には須恵器高台坏（1）、土師器甕（2～5）および安山岩自然石利用の凹石（6）がある。高台坏は丸味の帯びた底部から体部が鈍い稜線をもって屈曲し、皿状形態になる。底部外面の調整は手持ちヘラケズリによる。甕はロクロ調整によるが、4の体部中位にヘラケズリ痕があり、3・4の内面にはカキメがみられる。5の底部外面には木葉痕が認められ、古墳時代後期に所属する可能性がある。



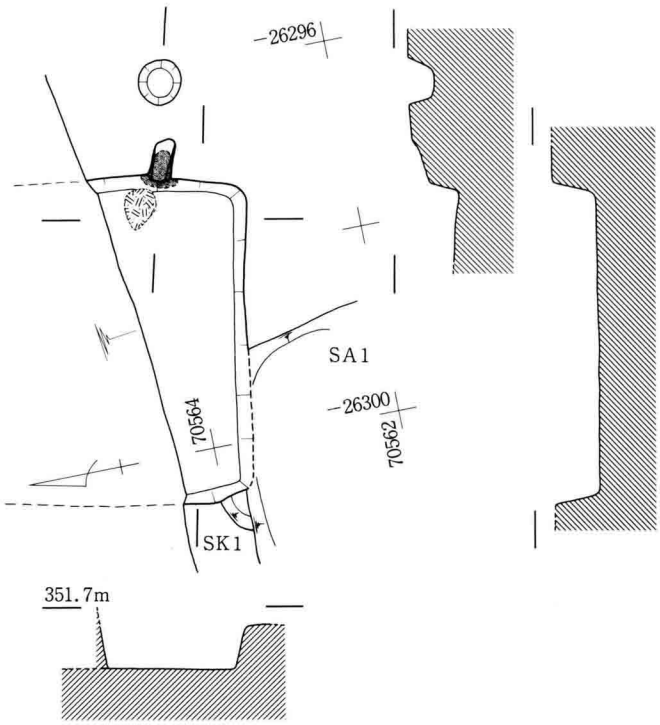
9図　2号住居址出土遺物実測図

Ⅲ－4　2号住居址

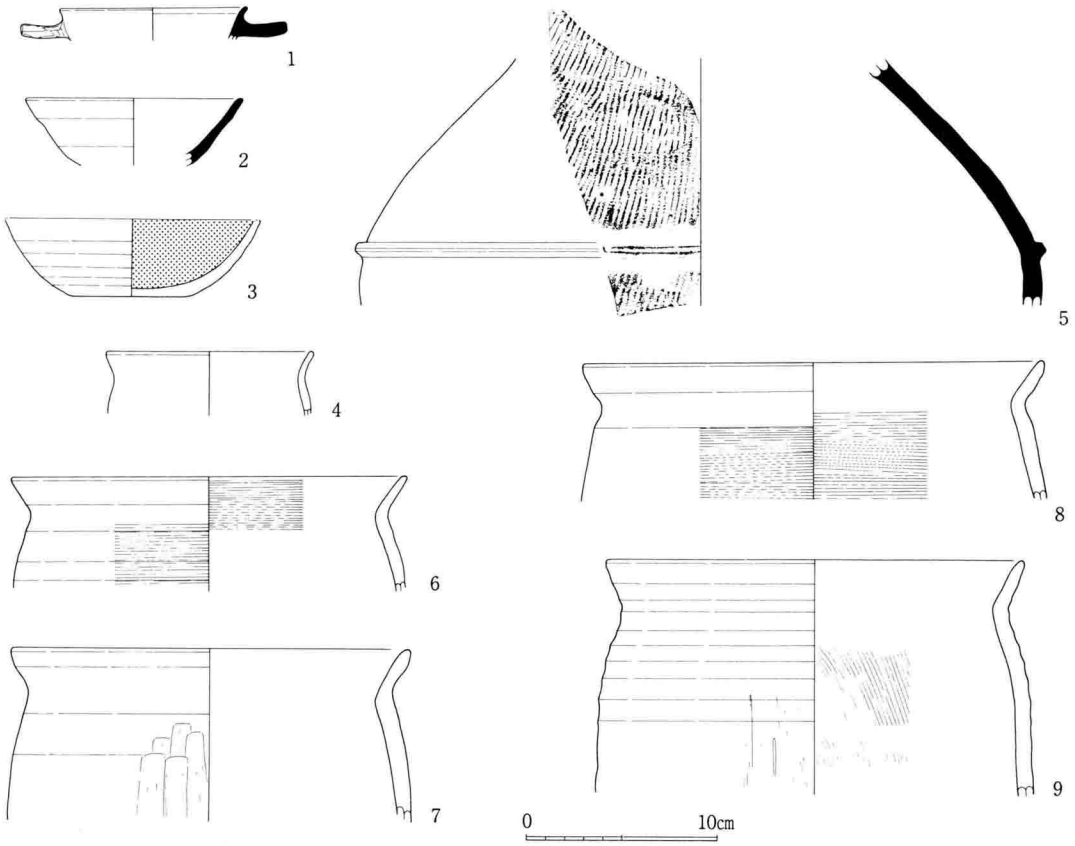
7号住居址

遺構（12図）　B区とE区の交接部に位置し、古墳時代前期の8号住居址と重複関係にある。形態は長方形を呈し、南北4.4m・東西4.0m・西壁の深さ20cmの規模である。長軸方向はN77°Eになる。カマドの痕跡を示す焼土等は確認されなかったが、北壁の不整形土坑が後世の掘り込みとすればこの位置にカマド構築されていた可能性が高い。床面は平坦で軟弱であり、東方向に傾斜している。

遺物（11図）　出土量は少なく、すべて破片出土である。器種には須恵器把手付坏（1）・坏（2）・四耳壺（5）、黒色土器坏（3）、土師器甕（4・6～9）がある。把手付坏の把手は棒状で左右一対接着される。四耳壺の隆帯に貼付される耳部は欠損している。甕の調整等は前



10図　2号住居址実測図

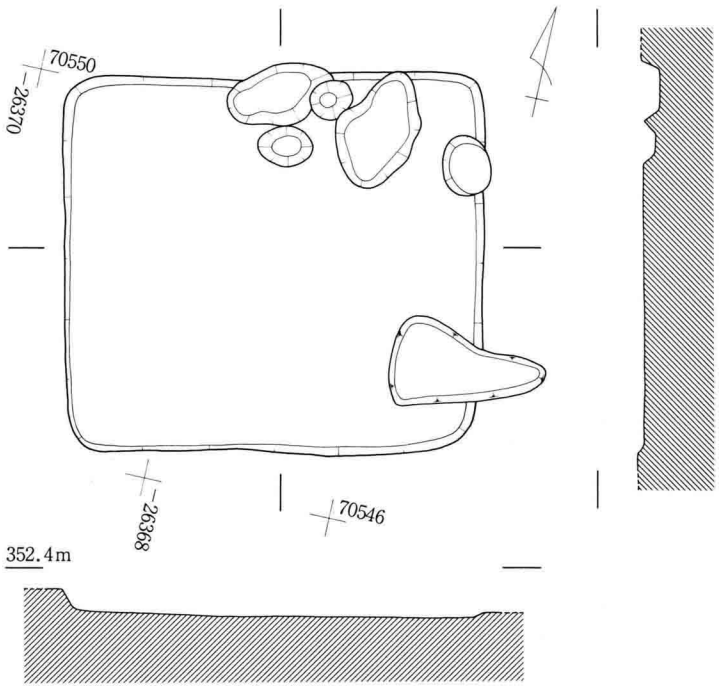


11図　7号住居址出土土器実測図

記した遺構出土のものと同様である。

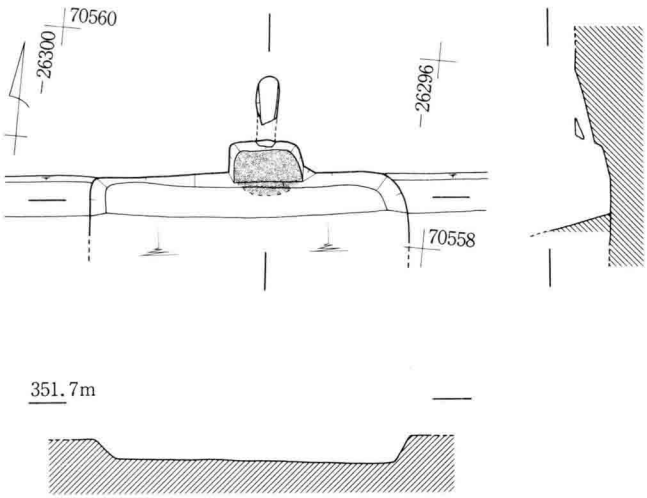
12号住居址

遺構(13図)　B区の東側遺構群の一つで1号住居址に近接する。調査では北壁沿いの一部を検出したにすぎなく、遺構の大部分は調査区域外にある。形態は方形を呈するものと思われ、東西3.2m・深さ32cmを測る規模になる。主軸方向はN10°Wを指す。カマドは北壁中央に設けられ、床面と若干の段差を有する突出型のカマドである。焚き口内法70cm・突出長40cm程の規模で残存長65cmの煙道が穿たれている。火床は焼土塊化していない。

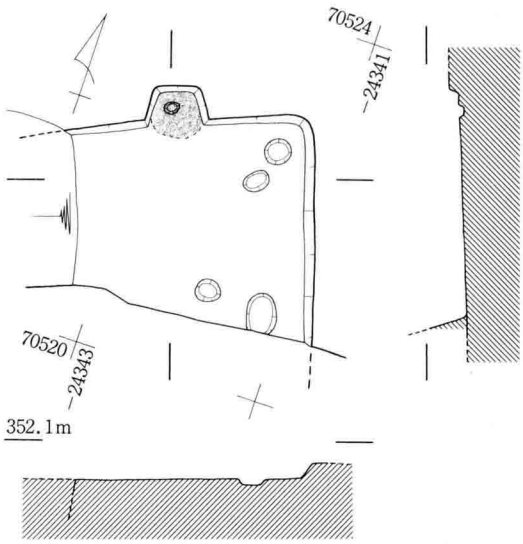


12図　7号住居址実測図

遺物(15図)　出土量は少なく、すべて破片出土である。器種には土師器坏(1)・甕(2～6)がある。2は砲弾形丸底の器形の一部と思われ、体部にタタキメ調整痕がある。4の口唇部は面取され、ヨコナデにより鈍い凹線化する。



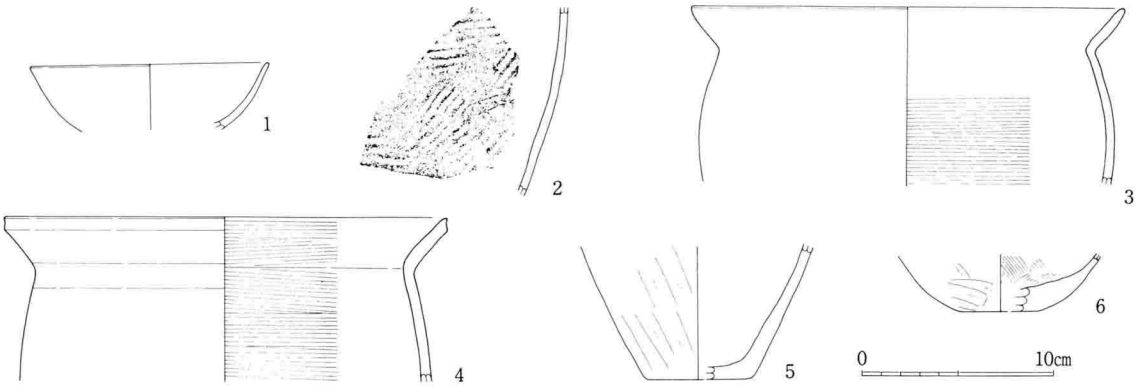
13図　12号住居址実測図



14図　19号住居址実測図

Ⅲ－5　7号住居址

Ⅲ－6　12号住居址



15図　12号住居址出土土器実測図

Ⅲ－7　19号住居址

19号住居址

遺構（14図）　C区の西側に位置する。西壁は攪乱により破壊を受け、南壁は調査区域外にあるため方形を呈する形態と推定する。東壁の壁高が15cmを測るほか規模等の詳細については不明である。主軸方向はN38°Wである。カマドは突出型で北壁に設けられ、火床に焼土および支脚石埋設小穴が認められた。規模は焚き口内法55cm・突出長40cmになる。床面は平坦で南に傾斜を有し、カマド前面から中央にかけて堅緻である。

遺物　出土遺物は少なく、図示できる大きさの土器片はない。器種には黒色土器坏、土師器甕、須恵器甕がみられる。

23号住居址

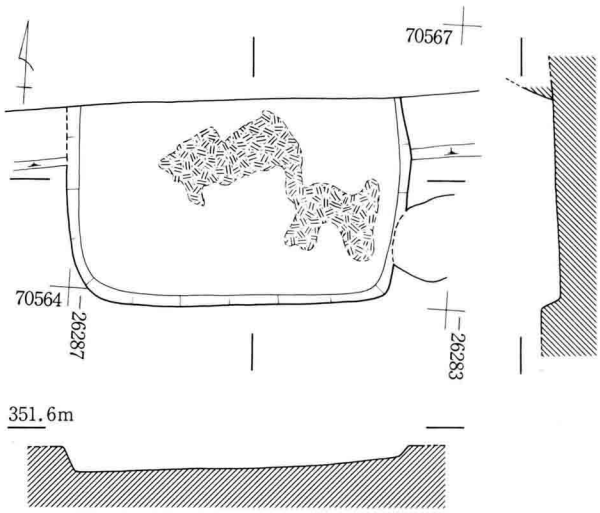
遺構（16図）　B区の東端に位置する。調査では遺構の南側半分程を露呈したにすぎず、カマドが構築されているであろう北壁側は調査区域外にある。形態は方形を呈するものと予想され、東西の規模3.6m・西壁の掘り込み25cmを測る。主軸方向はほぼ南北線上にある。床面は平坦であるが南と西方向に傾斜を有する。また、床面直上に炭化物の散布がみられ、住居址中央付近は堅緻な床面になる様相がうかがわれた。

遺物（17図）　出土量は少ない。器種には黒色土器坏（1）、須恵器高台坏（2）・甕（5）、土師器壺（3）・甕（4）がある。1の坏は丸底で古墳時代後期の様相を残す。2の高台坏の底部はロクロからの切離しをヘラ切り

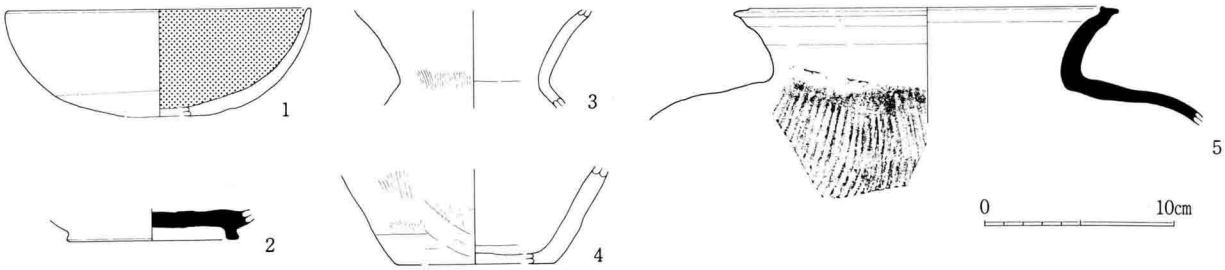
によっており糸切りの前段階の手法である。5の調整はロクロとタタキによっているが内面に青海波文がみられない。3は古墳時代前期に比定される壺であろう。

27号住居址

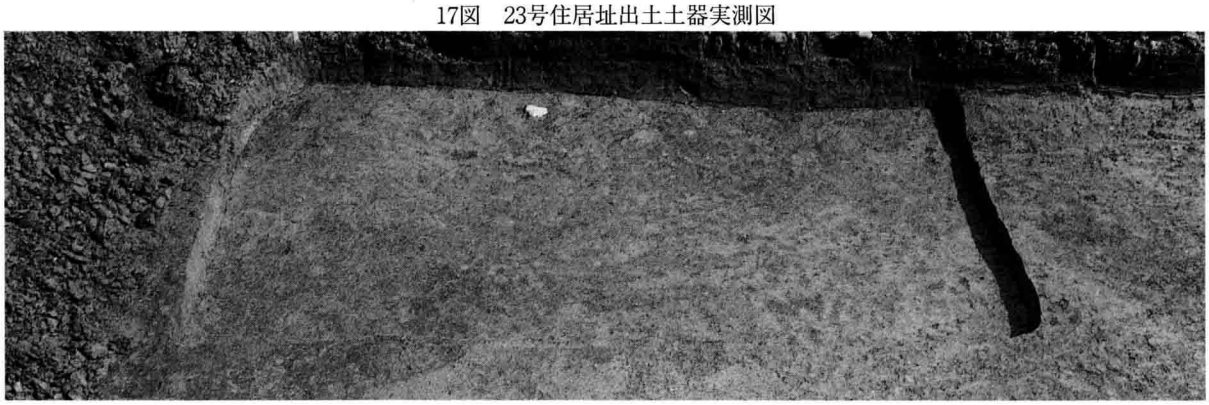
遺構（18図）　D区の西端に位置し、13号溝址と重複関係にある。遺構の大部分は調査区域外に延びており、南側の一部を検出したにすぎない。形態は隅丸方形が予想され、東西4.0m・深さ28cmの規模になる。床面は平坦で軟弱である。



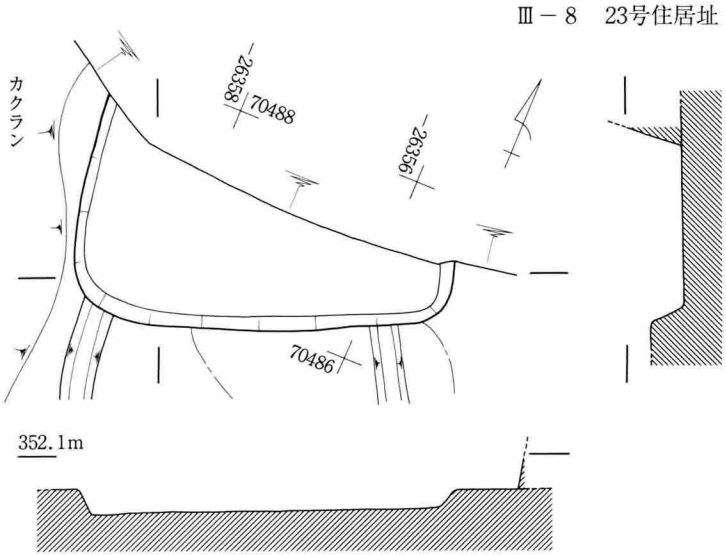
16図　23号住居址実測図



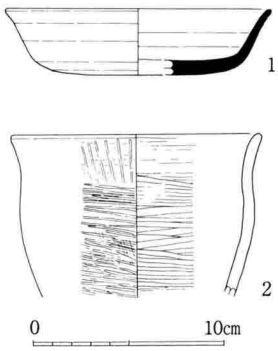
17図　23号住居址出土土器実測図



Ⅲ－8　23号住居址



18図　27号住居址実測図



19図　27号住居址
出土土器実測図

Ⅲ－9　27号住居址

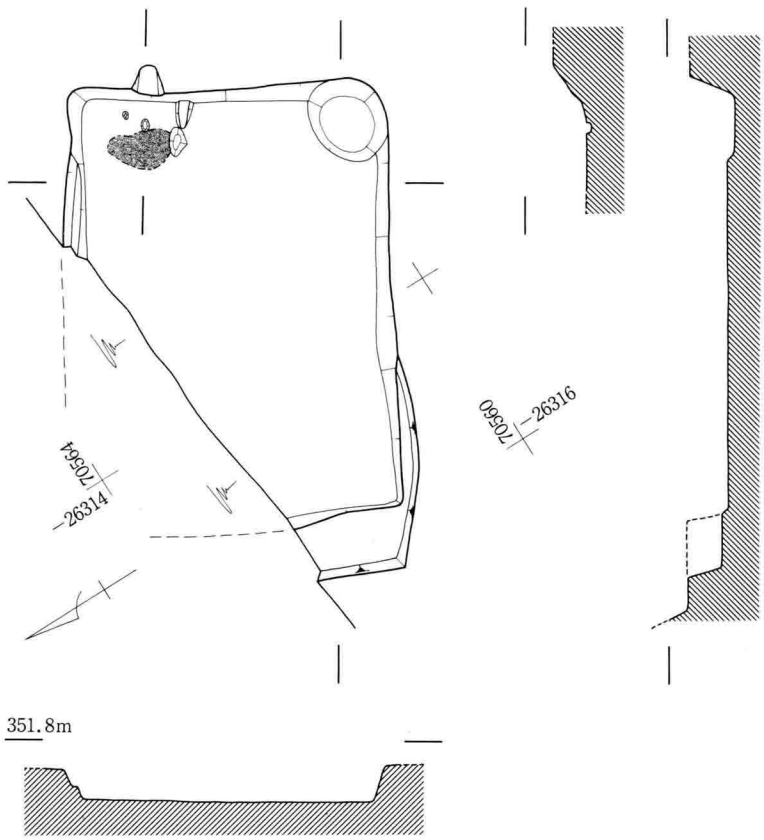
遺物（19図）　出土量は少ない。図示できる土器類は底部に回転ヘラケズリ痕を残す須恵器坏、ヘラミガキ調整の土師器鉢があるのみである。

第3節　古墳時代後期の遺構と遺物

3号住居址

遺構（20図）　B区の中央付近に位置し、該期の11号住居址と近接する。調査では北西隅部は調査区域外にあるため未検出である。また、南西隅部も後世の攪乱により破壊を受ける。形態は主軸が長い長方形を呈し、主軸4.6m・東西3.5m・深さ36cmを測る。主軸方向はN42°Wを指す。カマドは東壁左隅寄りに両袖形のものが構築されるが、調査では片袖と火床焼土・30cm程突出する煙道・支脚石埋設小穴を確認したにすぎない。床面は平坦で堅緻である。南隅に床面から10cm程掘り込んだ円形土坑がある。用途は不明である。

遺物（21図）　出土量は多くない。土器類はすべて土師器で、甑（1・2）・短頸壺（4）・甕（3・5～11）の器種がある。この他に硬砂岩自然石利用の凹石（12）が出土している。甕は口縁部が短く外反し、体部が長胴形のもので内外面共にハケナデ調整が多用される。また、8・10の体部外面に精製粘土が上塗りされ、6・8の底部外面に木葉痕がみられる等時期的な特色を示している。



20図　3号住居址実測図

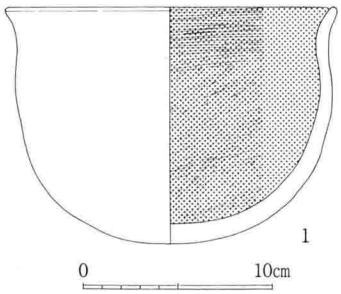
21図　3号住居址出土遺物実測図

Ⅲ－10　3号住居址

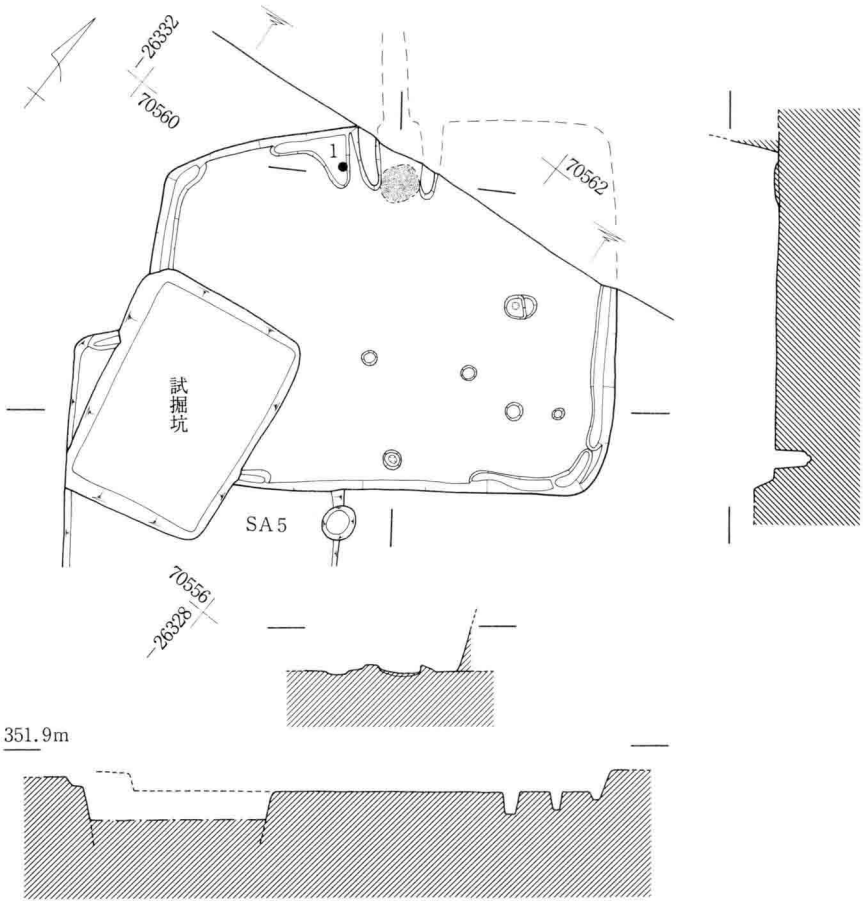
4号住居址

遺構（23図）　B区の中央付近に位置し、古墳時代前期の5号住居址と重複関係にある。南西隅はB試掘坑により破壊され、北隅は調査区域外にある。形態は主軸が短い隅丸長方形を呈し、主軸3.9m・東西4.9m・深さ25cmの規模になる。主軸方向はN38°Wである。カマドは北壁中央に構築された両袖形のものである。焚き口内法40cmの規模で、内部には厚さ4cmの焼土が充填していた。床面は東に傾斜するが平坦で堅緻である。東壁と西壁の直下には周溝状の幅15～22cm・深さ9cmの溝が掘られている。主柱穴は確認されない。

遺物（22図）　出土量は少なく、図示できる遺物は黒色土器鉢の1個体にすぎない。



22図　4号住居址出土土器実測図

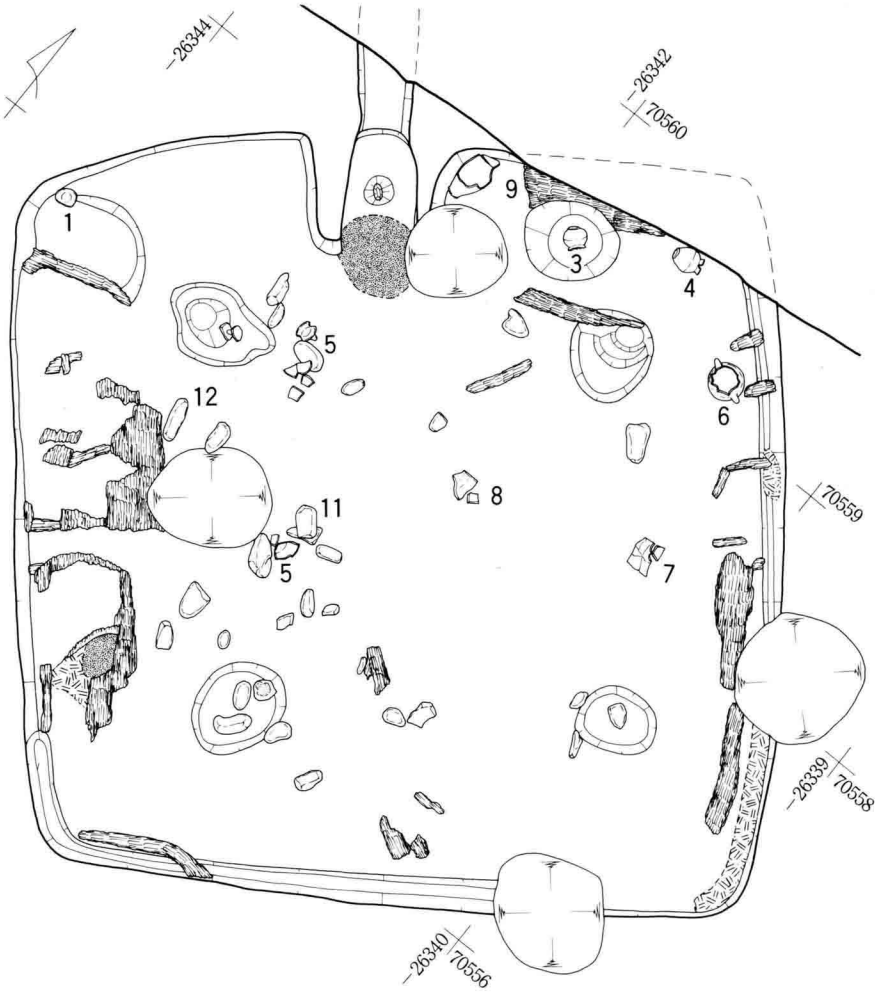


23図　4号住居址実測図

Ⅲ－11　4号住居址

6号住居址

遺構（24・25図） B区の西側に位置する。該期の2号掘立柱建物址と重複関係にあり、炭化物が柱穴に切り取られている所見からこれよりも古い時期の所産である。調査では区域外に延びる北隅と煙道を除きほぼ全容を露呈した。形態は隅丸方形を呈し、主軸4.0m・東西4.1m・深さ20cmの規模になる。主軸方向はN37°Wを指す。カマドは両袖形のもので北壁中央に構築されている。焚き口内法40cm・奥行60cm程を測り、調査では両袖部と火床焼土および支脚石埋設小穴を検出した。主柱穴は4個確認されており方形配列になる。床面は平坦で堅緻である。

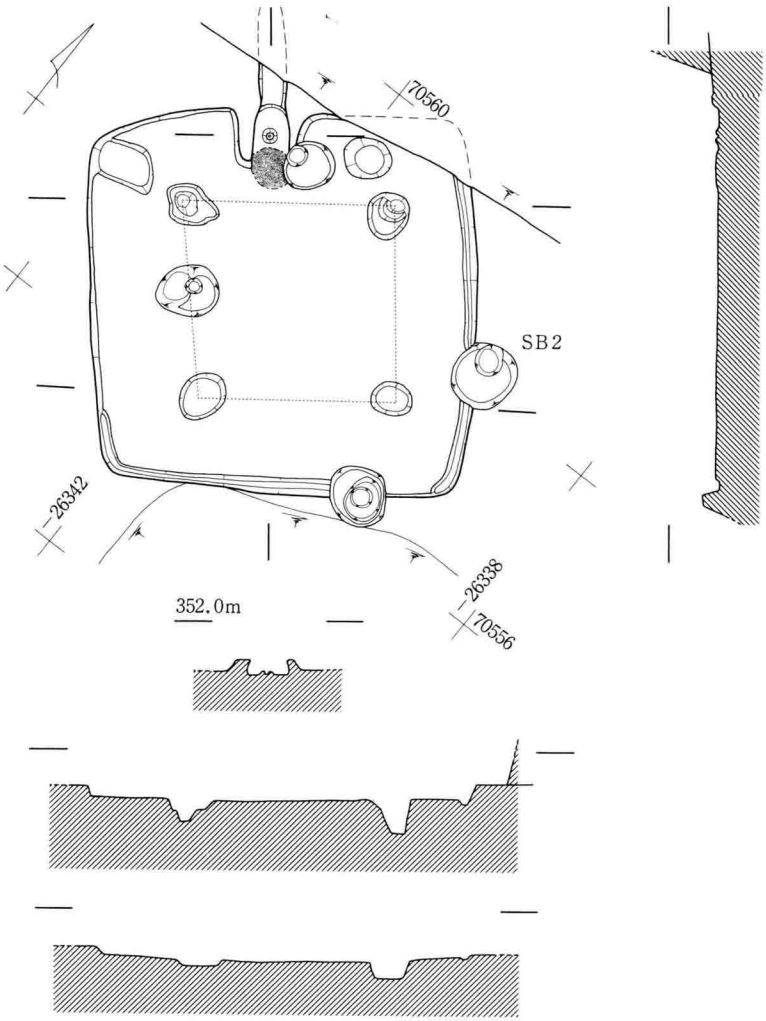


24図　6号住居址実測図（1：40）

Ⅲ－12　6号住居址

東壁と南壁直下には周溝状の小溝が認められる。床面直上には垂木材や横木材の炭化物および川原石が散在しており、焼失住居と考えられる。

遺物(26図)　焼失住居のためか土器の出土量は比較的多い。器種には黒色土器坏（1・2）・鉢（3）・高坏（5）、土師器鉢（4）・甑（6）・甕（7～9）がある。この他に土製紡錘車(10)、砥石（11)、磨石（12）が出土している。坏の底部は平底化傾向にあり、甑における把手の貼付位置が体部下方にあり、8・9の甕の頸部がなだらかに屈開する等器形の特色がある。なお、土器の出土位置につては図中に遺物番号をいれた。



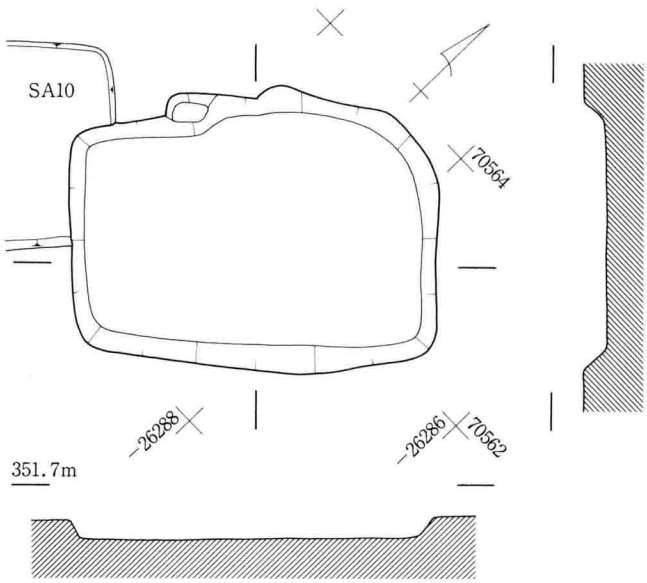
25図　6号住居址完掘実測図

Ⅲ－13　6号住居址（完掘）

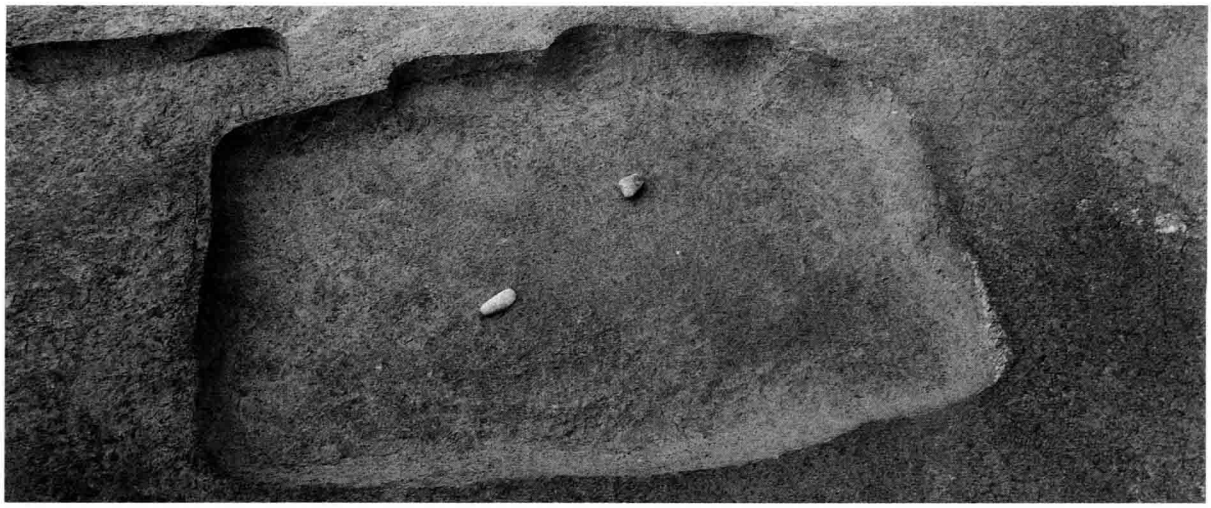
26図　6号住居址出土遺物実測図

9号住居址

遺構(27図)　B区の東側遺構群の一つで該期の10号住居址と重複関係にあるが、これよりも新しい遺構である。ただし、カマドは構築されていず、焼土も確認されないことから居住施設でない可能性がある。形態は一部隅丸の長方形を呈し、長軸3.9m・短軸2.9m・深さ18cmの規模である。長軸方向はN46°Eを指す。床面は平坦で軟弱である。



27図　9号住居址実測図



Ⅲ－14　9号住居址

遺物（28図）　出土量は少なく、すべて破片出土である。器種には黒色土器皿（1）、土師器甕（2・3・5）・器台（4）がある。5の体部には精製粘土の上塗りがみられる。器台は古墳時代前期に比定される。

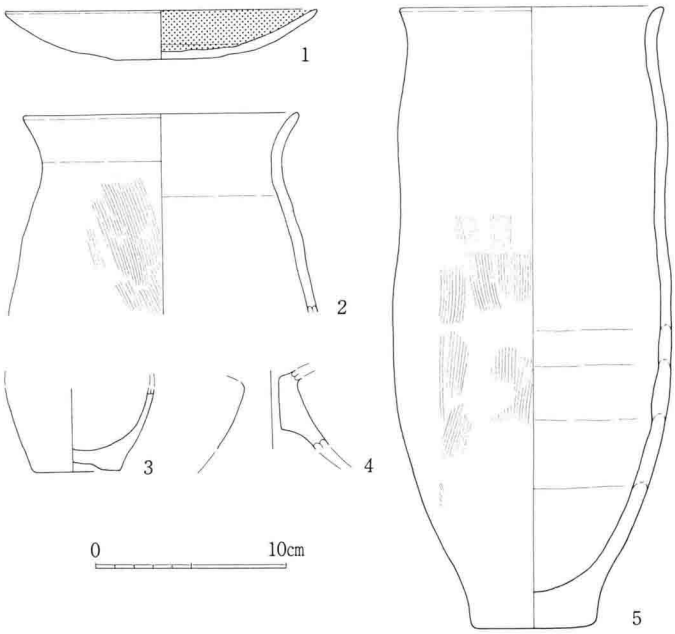
10号住居址

遺構（29図）　B区の東側に位置し、9号住居址に南東隅部が切り取られる。南西隅部は調査区域外にある。形態は主軸の短い長方形を呈する。主軸方向はN48°Wを指す。規模は主軸2.2m・長軸2.9m・深さ10cmの小型な住居址である。カマドは北壁の中央付近に設けられていたと思われ僅かな焼土と煙道とみられる突出する掘り込みがある。床面は平坦で軟弱である。規模からしても常時使用した居住施設とは考えられない。特殊な遺構とみたほうがよさそうである。

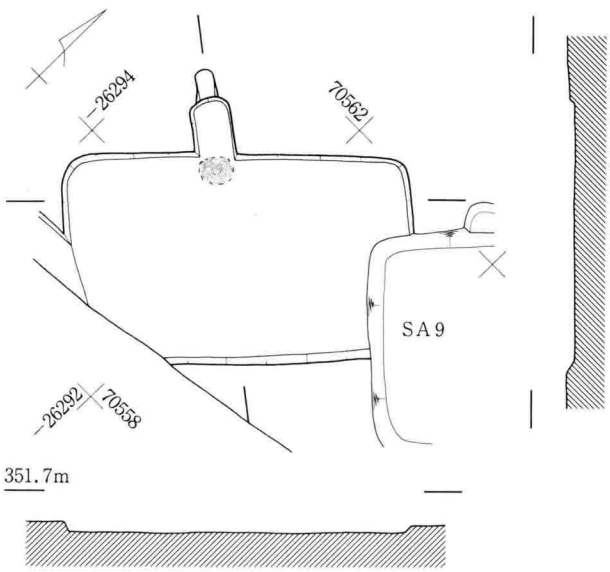
遺物　遺物の出土量は少なく、図示できるものはない。

11号住居址

遺構（31図）　B区の中央付近に位置し、該期の3号住居址と隣接する。調査では北隅部を露呈したにすぎなく、大部分は調査区域外にある。形態は隅丸方形と予想されるが規模等は不明である。掘り込みは深く50cmを測る。カマドは北壁に構築され、袖部先端に礫を配置する両袖形



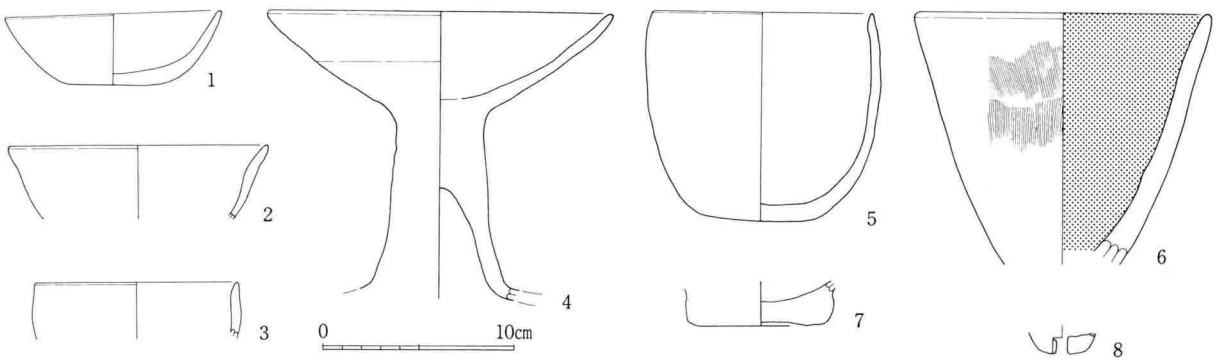
28図　9号住居址出土土器実測図



29図　10号住居址実測図

Ⅲ－15　10号住居址

Ⅲ－16　11号住居址



30図　11号住居址出土土器実測図

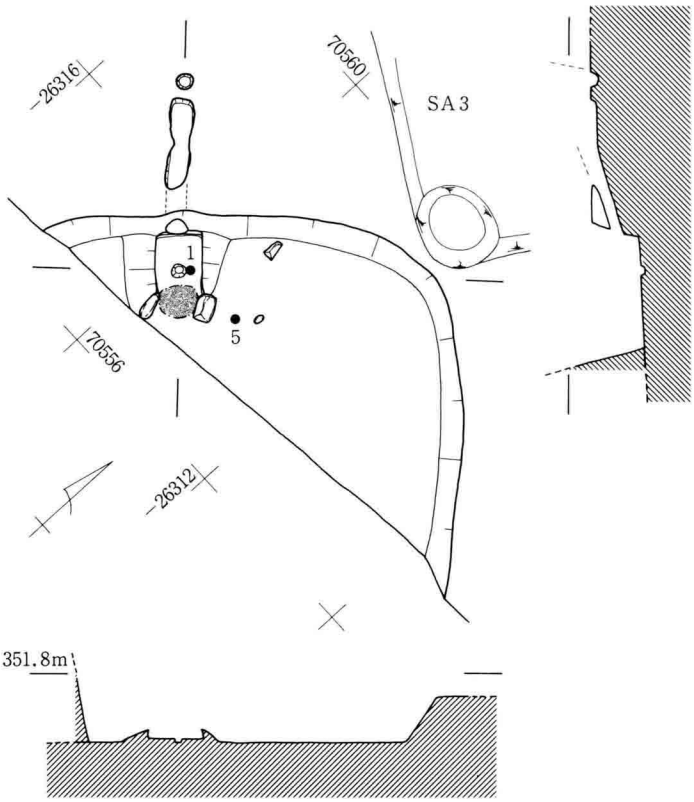
態のものである。焚き口内法45cm・奥行90cmの規模で、壁外に1.4m延びる煙道が穿たれている。内部には火床焼土・支脚石埋設小穴残存していた。カマド方向はN48°Wを指す。

遺物（30図）　出土遺物は少なく、図示できるものは土師器坏（1・2）・鉢（3・5）・甕（7）、黒色土器高坏（4）・鉢（6）があるにすぎない。全体に磨耗が著しい。

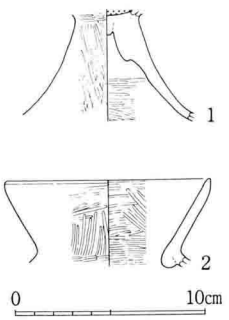
13号住居址

遺構（33図）　B区の東端に位置する遺構群の一つで、調査では南側半分程を検出した。形態は隅丸長方形で、長軸規模は不明であるが南北3.1mを測る。掘り込みは深く検出面から62cmを測る。長軸方向はN46°Wである。床面は平坦で軟弱である。焼土や柱穴が確認されないことから居住施設でない可能性がある。

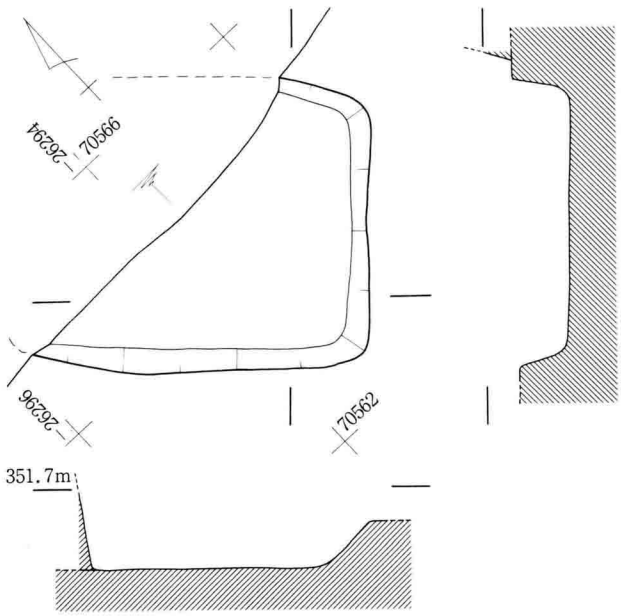
遺物（32図）　出土土器は少なく、図示できるものは土師器高坏（1）・小型甕（2）があるにすぎない。



31図　11号住居址実測図



32図　13号住居址
出土土器実測図



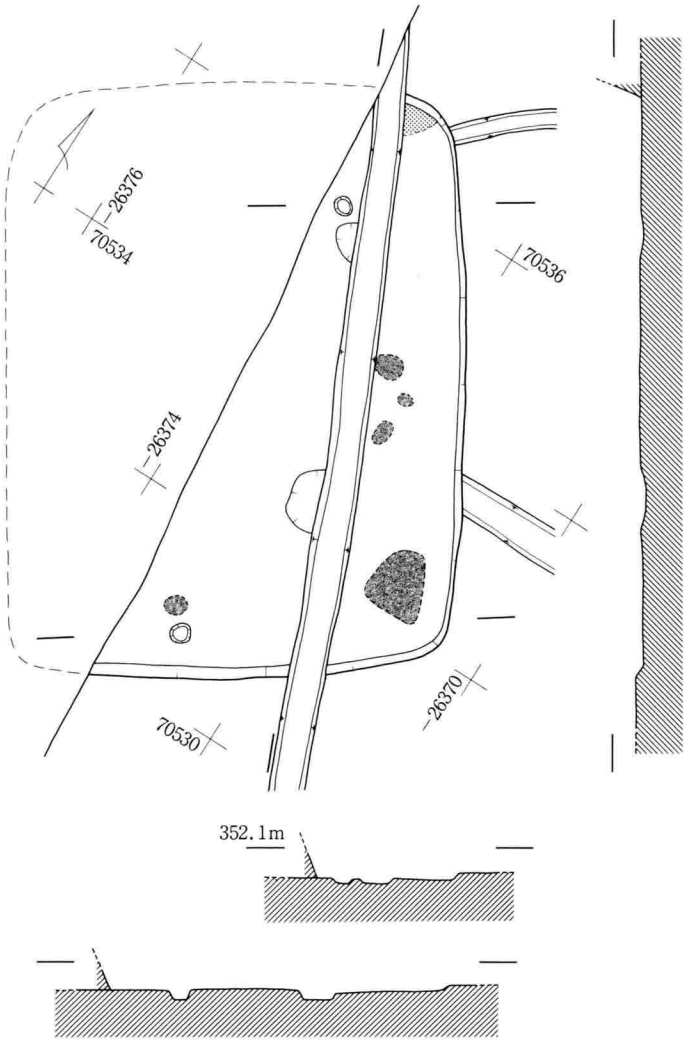
33図　13号住居址実測図

16号住居址

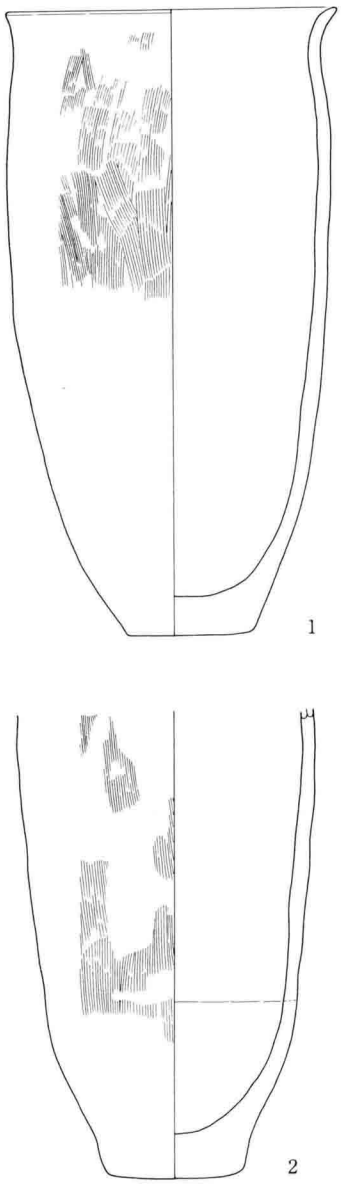
遺構（34図）　E区の中央付近に位置し、時期不明の3条の溝址と重複関係にある。調査では東壁と南壁にかけての三角形状部を検出したにすぎず、他部は調査区域外にある。形態は南壁の湾曲形状から南北軸が長い隅丸長方形を予想する。長軸方向はN33°Wを指し、6.0mの規模になる。掘り込みは浅く6cmである。カマドは未検出であるが北壁に構築されている可能性があり、北東隅に炭化物の散布が認められた。他に床面上に炉的機能を有するのか数カ所の焼土がみられる。柱穴は確認されない。床面は平坦で軟弱である。

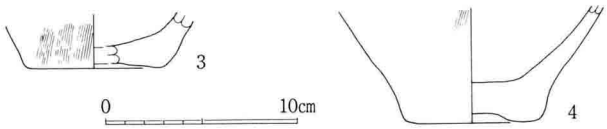
遺物（35図）　出土量は少なく、図示できる破片はすべて土師器の甕類である。長胴筒形の体部から口縁部が緩

く外開する器形で、底部が厚く作られている。体部外面は全体的に精製粘土の上塗りが施され、ところどころ剥離している。



34図　16号住居址実測図





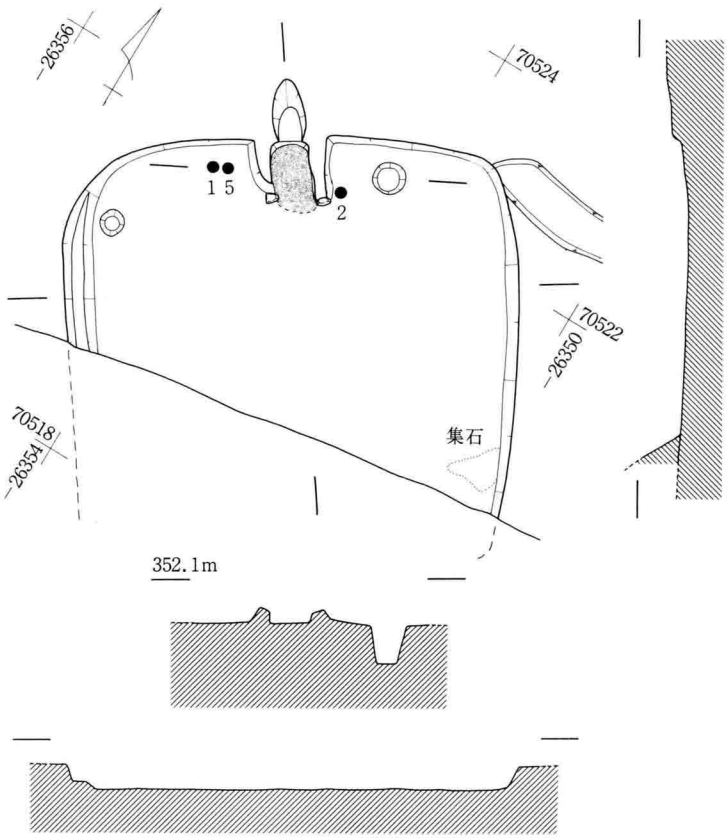
35図　16号住居址出土土器実測図

Ⅲ－17　16号住居址

Ⅲ－18　18号住居址

18号住居址

遺構（36図）　C区の西側に位置し、調査では北側半分ほどを露呈した。形態は検出形状から隅丸方形を呈するものと思われる。主軸方向はN30°Wを指す。主軸の規模は不明であるが、南北4.8mを測る。掘り込みは22cmになる。カマドは北壁中央に構築されている。形態は袖先端に礫を埋設する両袖型で、焚き口40cm・奥行60cmを測り煙道が60cm程壁外に延びる。小穴が北壁沿いに2個みられるが主柱穴配置にならない。床面は平坦で軟弱であるが、カマド前面から中央にかけて堅緻な床面を形成していた。遺物は床面直上からの出土が多く、特にカマド右から甕・左から高坏と甑が出土している。また、南東隅付近にはコモ編み石とみられる長楕円形の川原石の集石を検出した。



36図　18号住居址実測図

遺物（38図）　出土量は多くない。器種には黒色土器高坏（1）、土師器甕（2～4）・甑がある。この他に川原石利用の磨石が出土している。高坏の坏部は鉢形を呈し、内面はヘラミガキが施され黒色処理される。甕は筒状の体部から口縁部が緩く外開して頸部を形成しない。甑の角状把手は体部上半に付着されている。

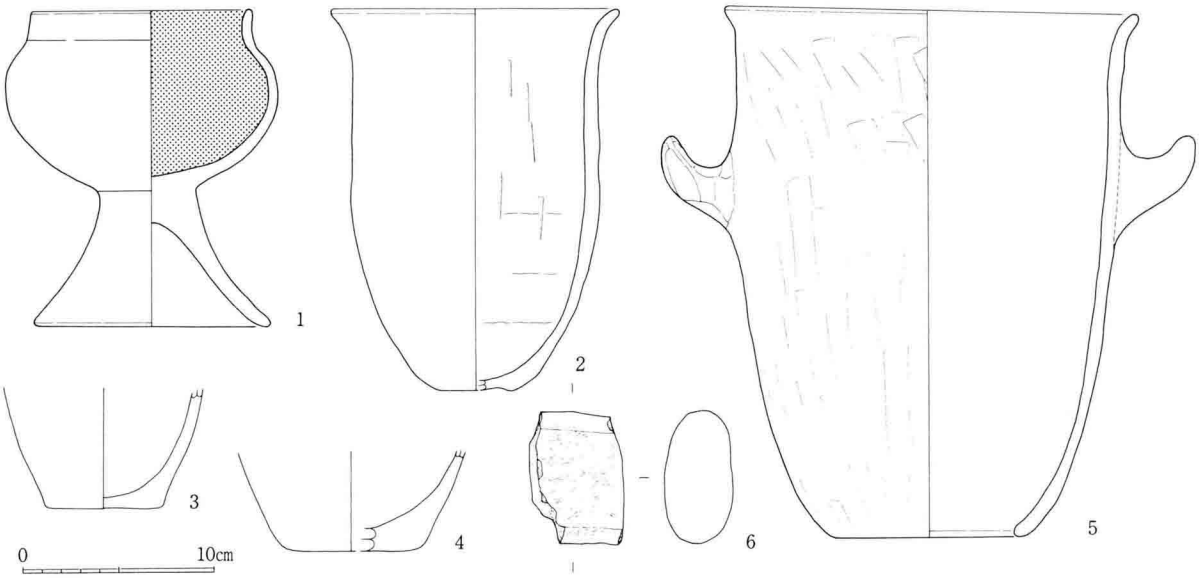
20号住居址

遺構（38図）　C区の中央に位置するも、調査では西壁と南壁にまたがる三角形状部を露呈したにすぎない。形態は方形になるものと予想され、東壁の規模は3.0m前後である。掘り込みは浅く12cmを測る。カマド・柱穴等は確認されない。床面は平坦で軟弱である。

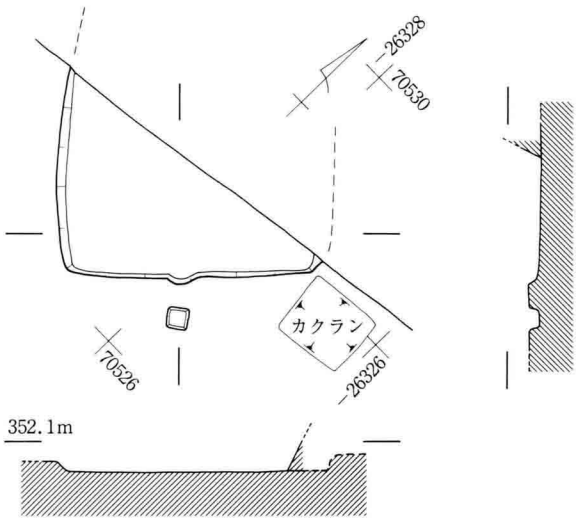
遺物（39図）　出土量は少なく、すべて破片で図示できるものは黒色土器坏（1）と土師器甕（2）があるにすぎない。坏は底部の丸味から口縁部が直線的に外反する器形で、内面の外反部に鈍い稜を形成する。甕は体部から口縁部が外開するものの、肩部を形成する器形で最大径が体部中央にある。

22号住居址

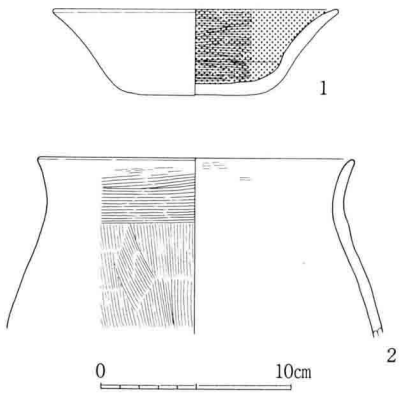
遺構（40・41図）　C区の東端に位置し、単独で検出された。南隅部が調査区域外にある他は全面露呈すること



37図　18号住居址出土遺物実測図

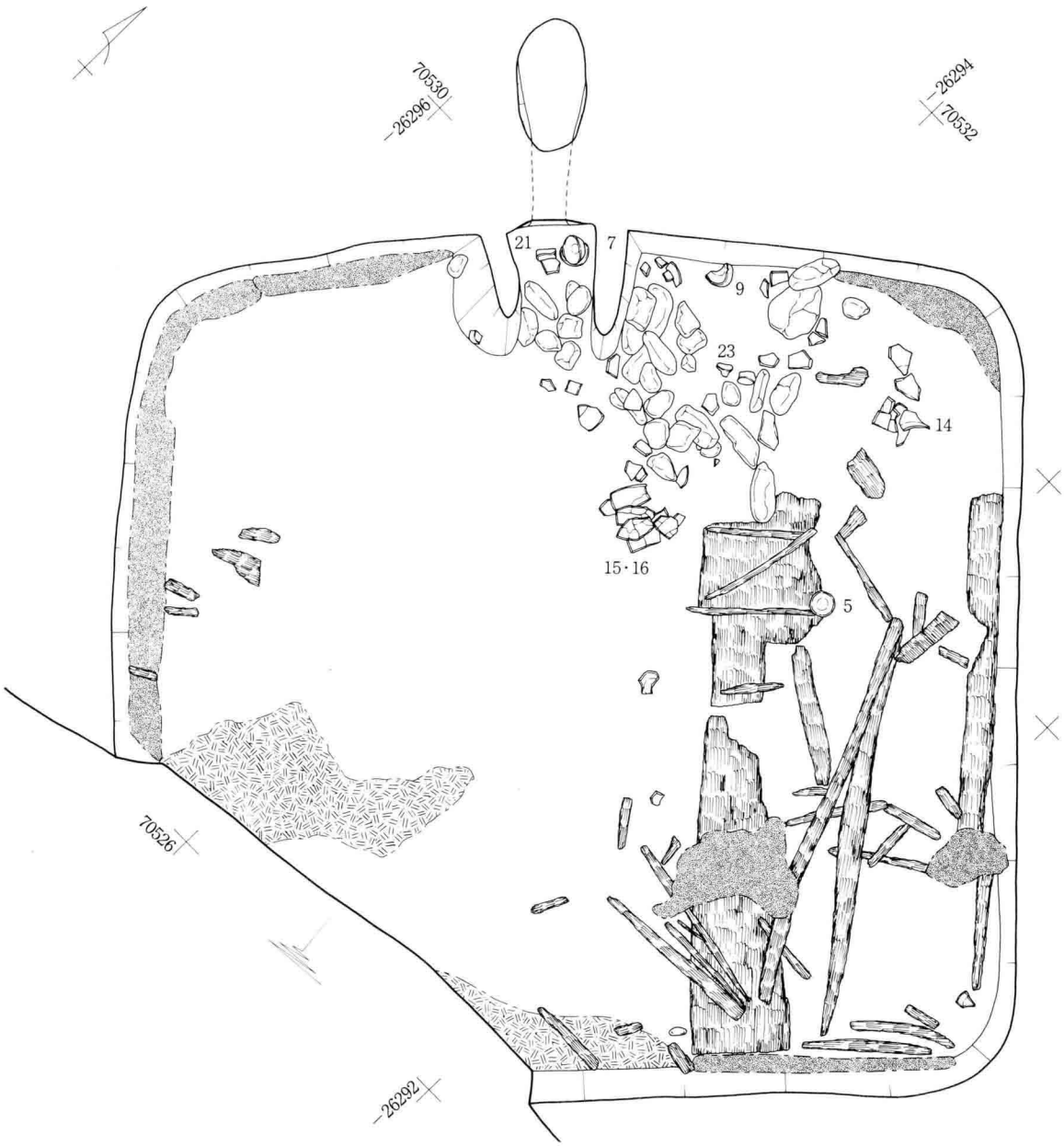


38図　20号住居址実測図



39図　20号住居址出土土器実測図

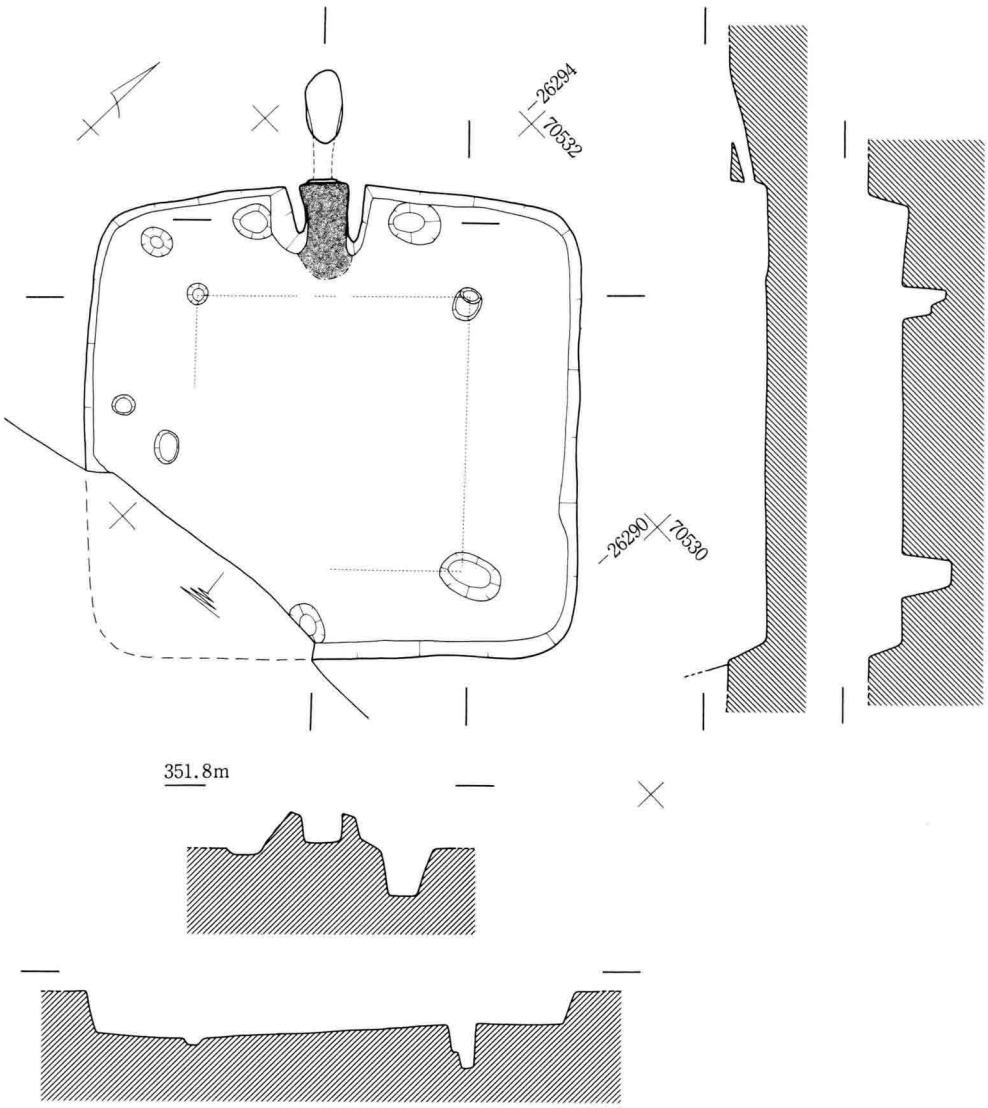
Ⅲ－19　20号住居址



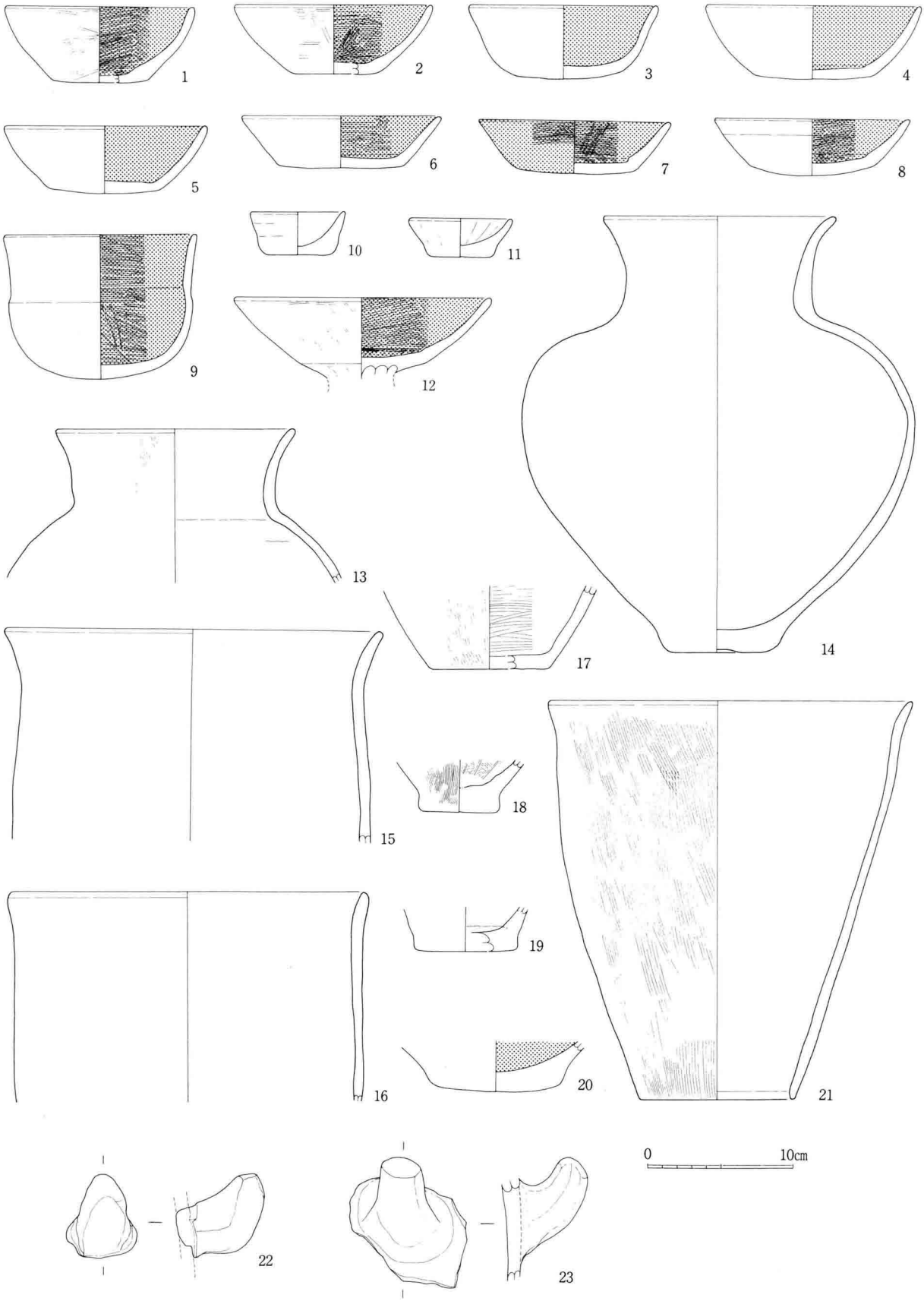
40図　22号住居址実測図（1：40）

ができた。形態は隅丸方形を呈し、主軸がN46°W方向にある。規模は主軸5.0m・東西5.1m・深さ45cmを測り、今回調査した住居址では大型の部類に入る。カマドは北壁の中央に構築されており、両袖型で残存度はよい。焚き口内法40cm・奥行70cmの規模で、壁外に長さ1.2mの煙道を穿つ。カマド内や右袖部周辺には川原石の集石をみたが意味するところは不明である。カマド廃棄に伴う祭祀儀礼の結果とも考えられる。主柱穴は4個方形配列になるものと思われる。また、カマドの左右と南壁下中央に柱穴とみられる小穴があり、小屋組に対して何らかの役割があったものと推定する。床面は平坦で全面堅緻なものである。床面状には火災を受けたと思われ、東側に垂木材・横木材・板状炭化材が残存していた。板状材の上に建築材が覆っていることから床板の可能性も捨てきれない。各壁下の炭化物の集積もこの部材の痕跡かもしれない。

遺物（42図） 焼失住居のためか土器の遺存は良い。器種には黒色土器坏（1～8）・鉢（9・20）・高坏（12）、土師器手捏（10・11）・壺（13・14）・甕（15・17～19）・甑（16・21～23）がある。坏は丸底から平底への移行期にあり、4・7・8は内面の底部と体部との境に鈍い段を形成する。調整におけるヘラミガキハ雑になりナデ様の仕上がりになる。壺形態の土器は該期では珍しい存在である。体部外面および内面口縁部はヘラミガキ調整が施される。甑には2形態があり、把手の付くもの（22・23）と無いもの（16・21）である。



41図　22号住居址完掘実測図



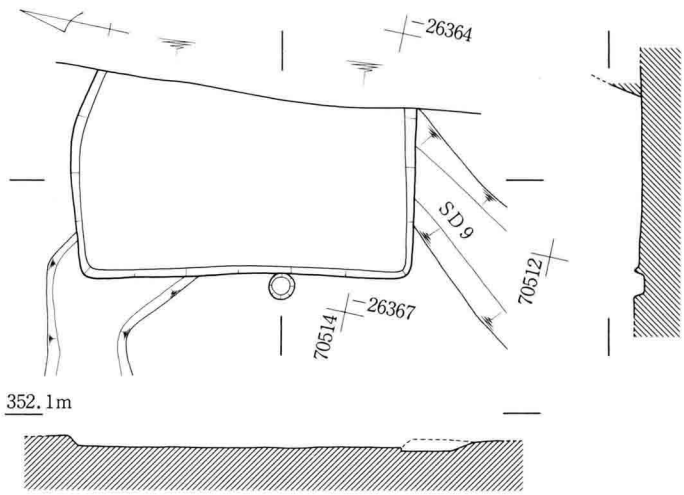
42図　22号住居址出土土器実測図

Ⅲ－20　22号住居址

24号住居址

遺構(43図)　E区とC区の交点付近に位置し、9号溝址と重複関係にある。遺構の東側半分ほどは調査区域外にある。形態は北壁が幾分内屈しているが方形を呈するものと思われる。南北3.6m・深さ10cmの規模になる。床面は平坦で軟弱である。カマドや柱穴等は確認されない。

遺物　出土量は少なく、すべて小破片である。黒色土器坏や土師器甕の器種がみられる。



43図　24号住居址実測図

26号住居址

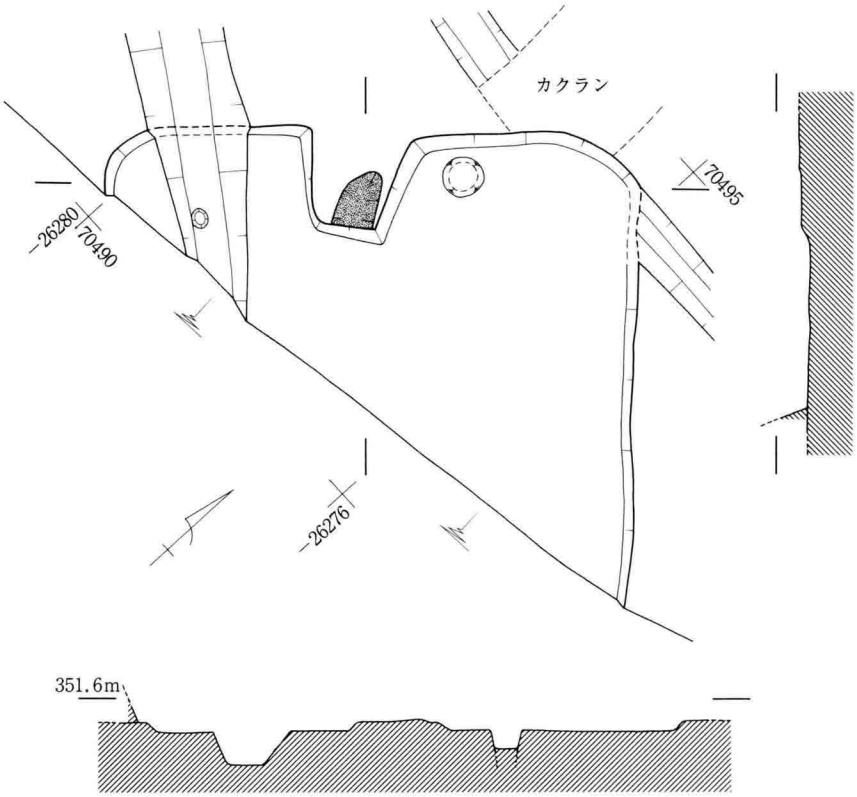
遺構(44図)　C区の東端に位置する。調査では北側3分の1程を検出したにすぎず、他は調査区域外にある。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、北壁の長さは5.6mを測る規模になる。本来カマドが構築される北壁の位置に、内側に突出する部位がみられた。上面に焼土が認められたがカマドとは認定できない。むしろ突出部はカマド構築の前段階の様相を示していると考えた方が良さそうである。床面も平坦で軟弱であり、頻繁に使用された様子は認められない。

遺物　黒色土器坏と土師器甕の小破片が数点出土しているにすぎない。

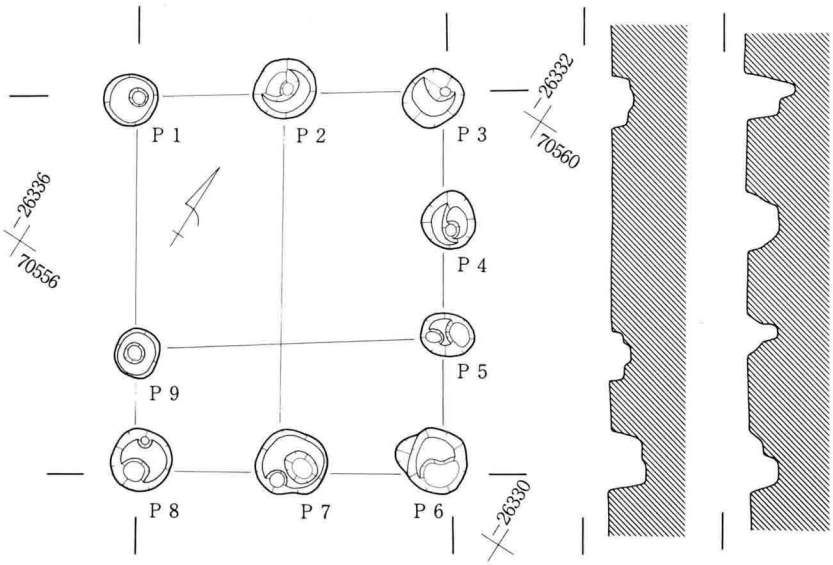
1号掘立柱建物址

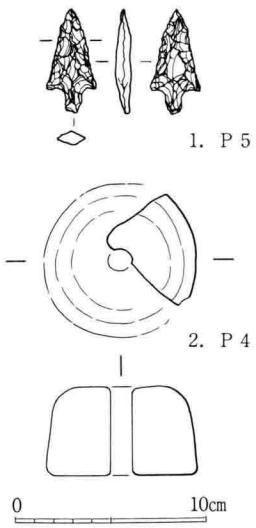
遺構(45図)　B区の中央付近に位置し、該期の4号住居址に隣接する。東西3間・南北2間の構造になるが西側の柱穴1個が欠落する。規模は東西4.0m・柱穴間1.2m、南北3.2m・柱穴間1.6mである。東西方向はN 31°Wを指す。掘り方は円または楕円形を呈し、柱穴を有する。

遺物(47図)　図示できる土器はP1の掘り方から土師器甕片が1個体出土している。内外とも磨耗が著しいが、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整で仕上げている。

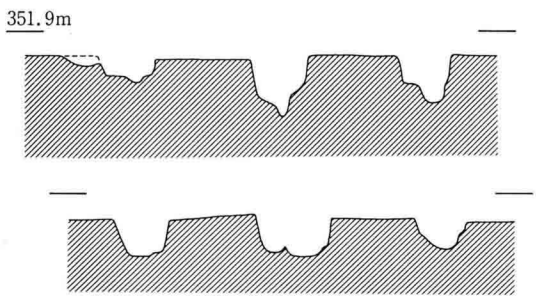


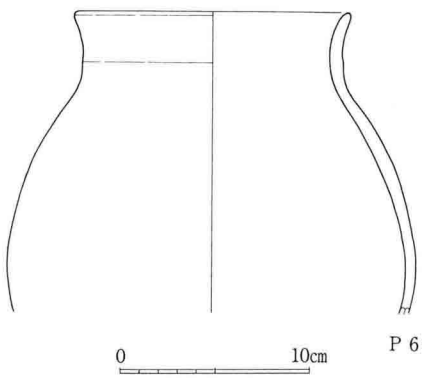
44図　26号住居址実測図





46図　2号掘立柱建物址出土遺物実測図(1：2)



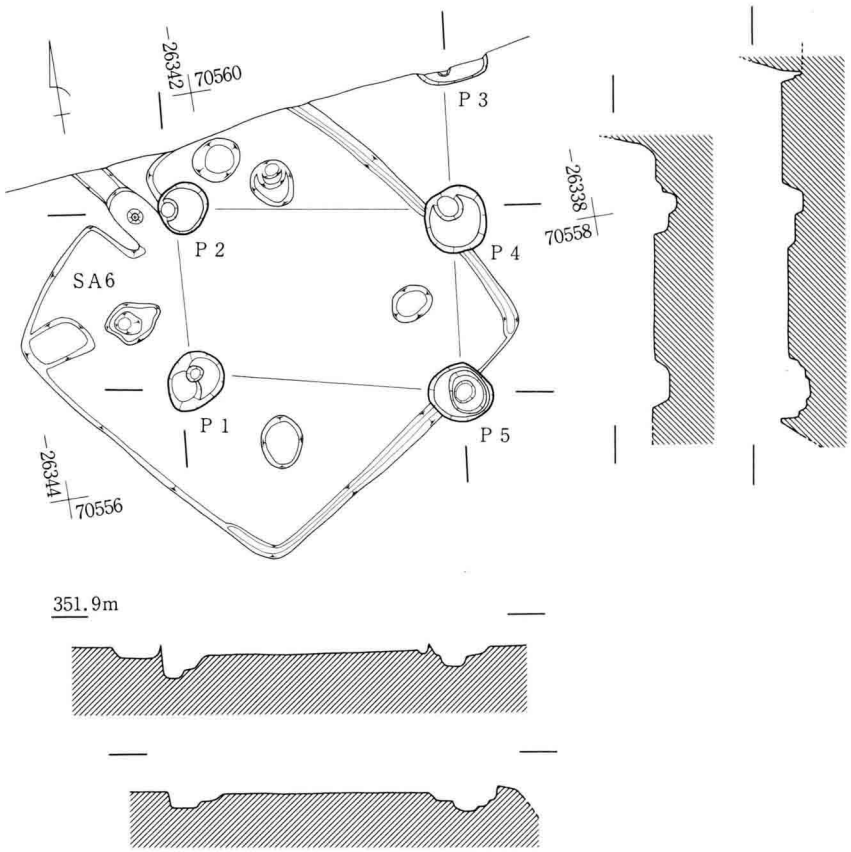


(上) 45図　1号掘立柱建物址実測図
(右) 47図　1号掘立柱建物址出土土器実測図

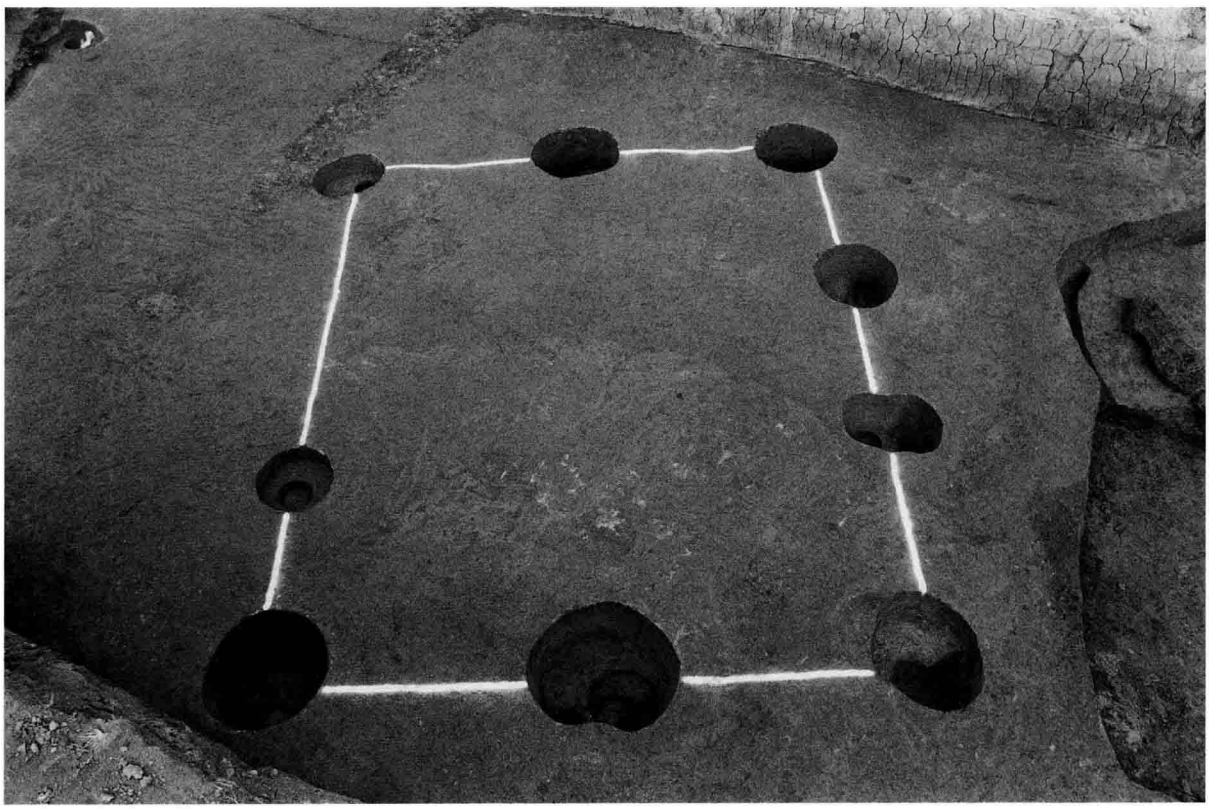
2号掘立柱建物址

遺構（48図）　B区に位置し、該期の6号住居址と重複関係にあり、これよりも新しい遺構である。調査では東西1間・南北2間の構造を確認したが、南北はさらに間数が増える可能性がある。柱穴間の規模は東西2.8m・東西2.0mを測る。長軸方向はほぼ南北を指す。時代は出土遺物等の根拠資料を欠くが、掘り方等が1号掘立柱建物址と同様であり、近接していることから古墳時代後期の遺構と認定した。

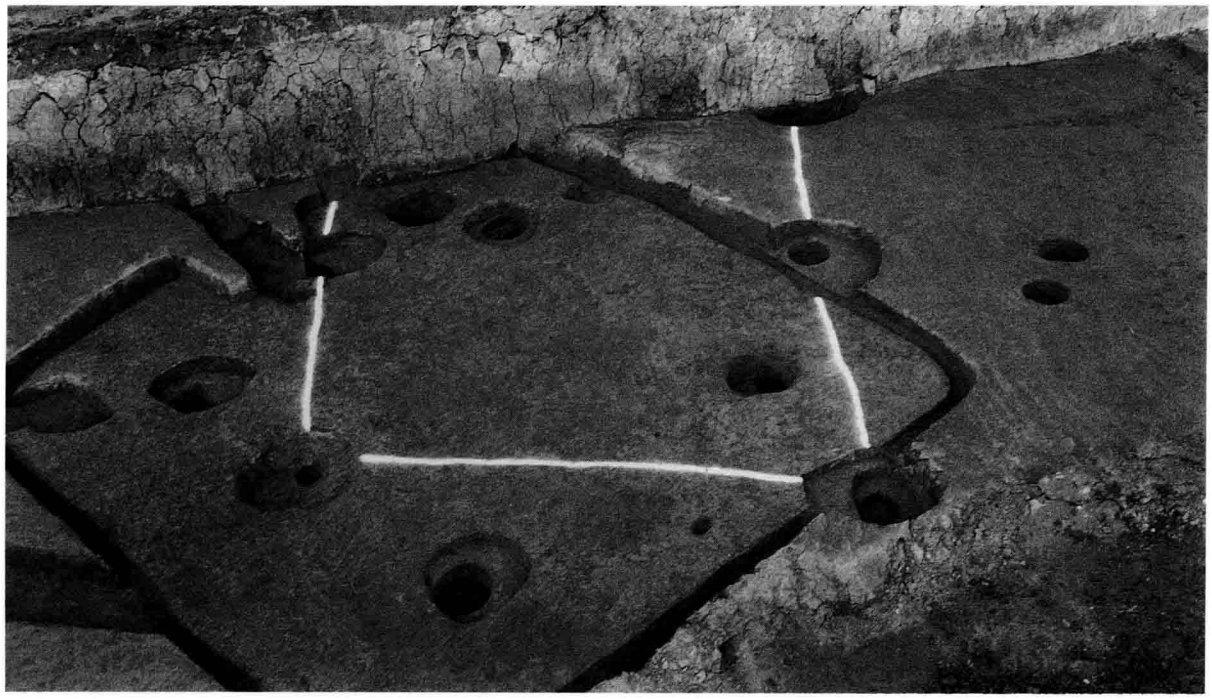
遺物(46図)　掘り方から土製紡錘車（2）と弥生時代の所産と思われる打製石鏃が出土している。



48図　2号掘立柱建物址実測図



Ⅲ－21　1号掘立柱建物址



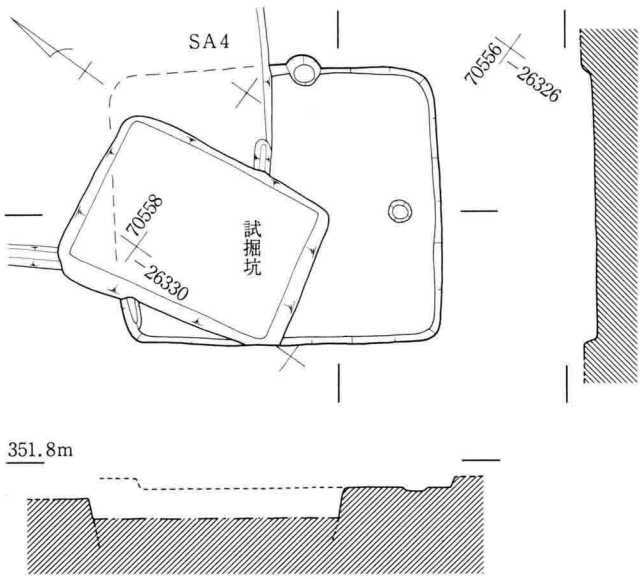
Ⅲ－22　２号掘立柱建物址

第４節　古墳時代中・前期の遺構と遺物

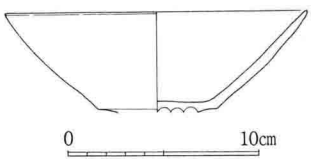
５号住居址

遺構（49図）　Ｂ区の中央に位置する。後期の４号住居址と重複関係にあり、これとＢ地点試掘坑により北側半分程が破壊を受ける。形態は長方形を呈し、東西3.4m・南北2.9m・深さ14cmの規模になる。長軸方向はN36°Wを指す。北壁と東壁添いに各１個の小穴が認められたものの、焼土等炉の痕跡は確認されない。床面は平坦で軟弱である。

遺物（50図）　出土量は少なく、すべて破片出土である。図示できるものは土師器高坏の１個体である。坏の体部は底部から直線的に器形で、内外面共に縦方向のヘラミガキが施される。



49図　５号住居址実測図



50図　５号住居址出土土器実測図

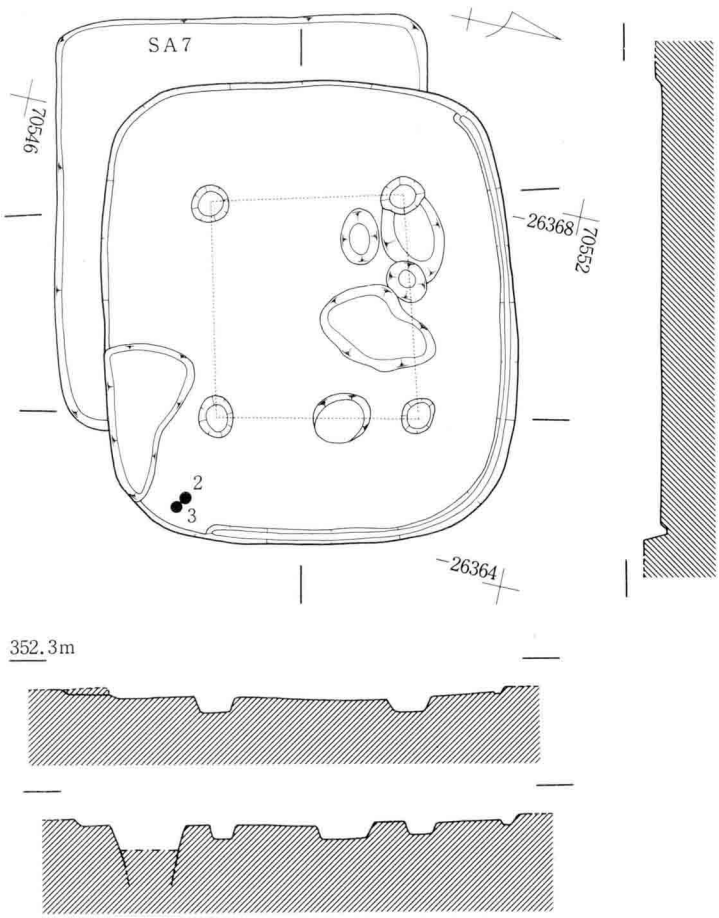
８号住居址

遺構（51図）　Ｂ区の西端に位置し、平安時代の７号住居址と重複関係にある。本住居址のほうが掘り込みが深いため全容を露呈することができた。形態は隅丸長方形を呈し、長軸4.9m・南北4.4m・深さ18cmの規模になる。炉と推定される焼土は確

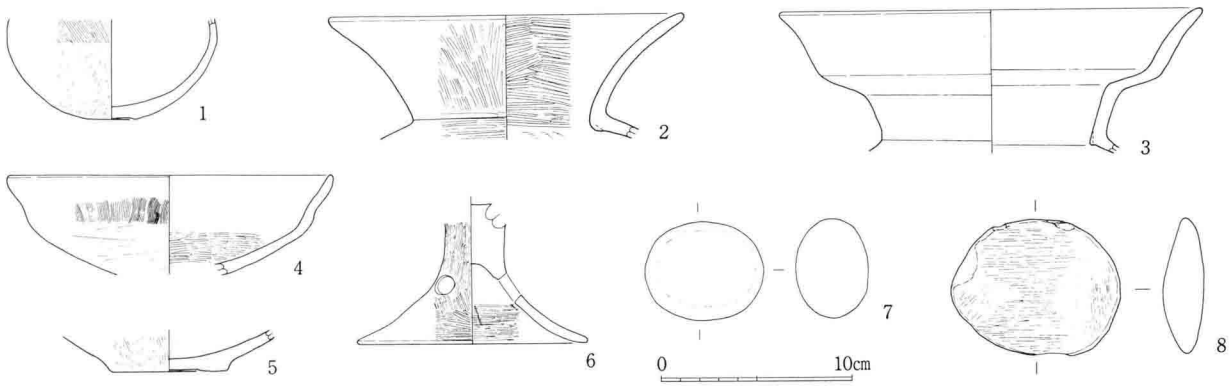
Ⅲ－24　5号住居址（右）

認されない。主柱穴は4個方形配列になる。床面は平坦で軟弱である。北側柱穴間に不整形な落ち込みがみられるが意味するところは不明である。北壁から東壁に添って周溝が半周する。南東隅から2個の壺口縁部が逆位で、北西隅から器台が共に床面から浮いた状態で出土した。

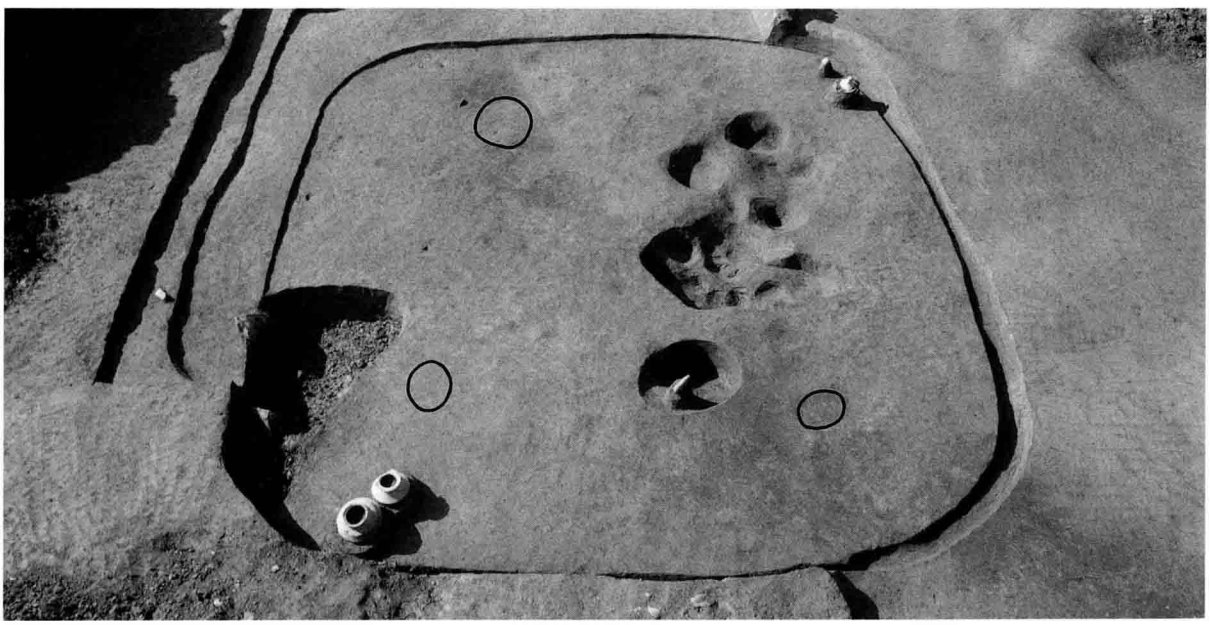
遺物(52図)　出土量は少ない。器種には鉢（1）・壺（2・3）・高坏（4）・器台（6）・甕（5）ある。土器類の調整はヘラミガキとハケナデを多用している。壺口縁部は広口形態のものと有段口縁になるものがある。高坏の体部は緩いS字形を呈する特徴があり、器台脚部のヘラミガキは内面まで及ぶ。



51図　8号住居址実測図



52図　8号住居址出土遺物実測図



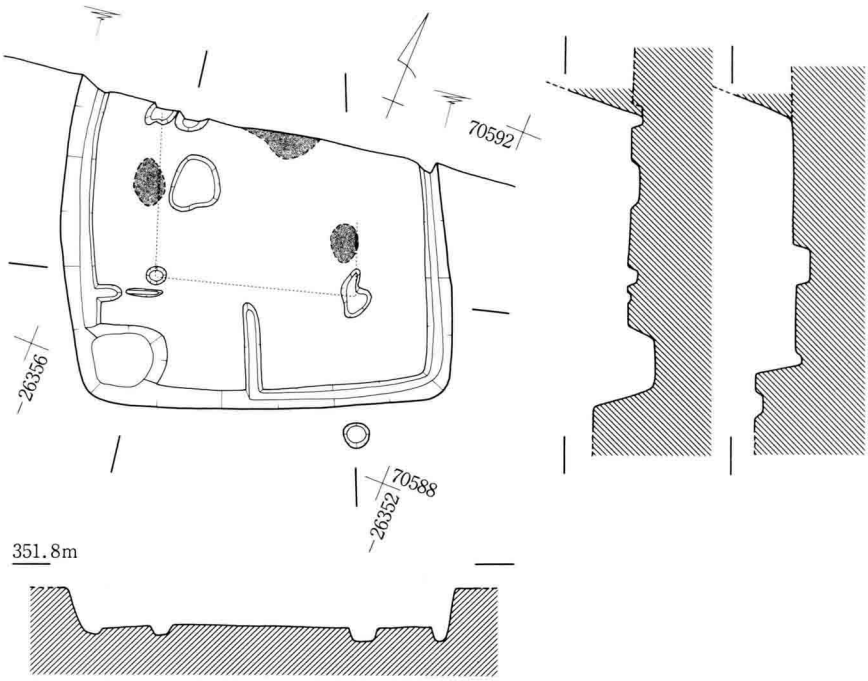
Ⅲ－25　8号住居址

Ⅲ－26　14号住居址

14号住居址

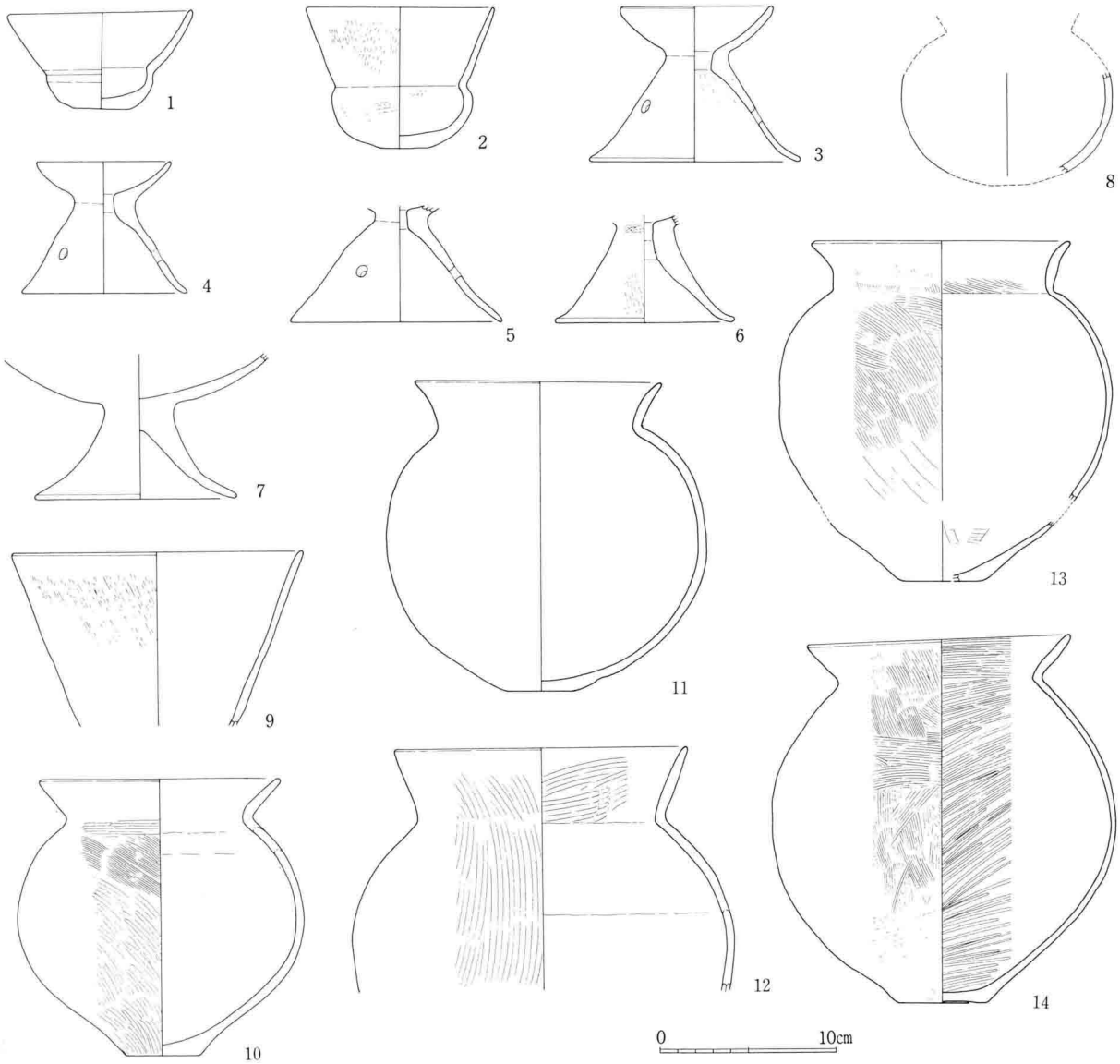
遺構（53･54図）　A区の西側に位置する。単独遺構であるが北壁側の一部は調査区域外に延びる。形態は方形を呈するものと予想され、南北の規模は不明であるが東西4.0mを測る。検出面からの掘り込みは深く40cmになる。主軸と思われる南北軸はN22°W方向を指す。住居の覆土・床面には焼失による小屋組材等の炭化物が散在していた。この炭化物を撤去したところ3か所に焼土が確認された。このうち未調査地に接する位置の焼土が炉に関与するものと思われる。柱穴は3個確認されたが調査区域外にあるものを含めて4個方形配列の主柱穴を予

53図　14号住居址実測図（1：40）

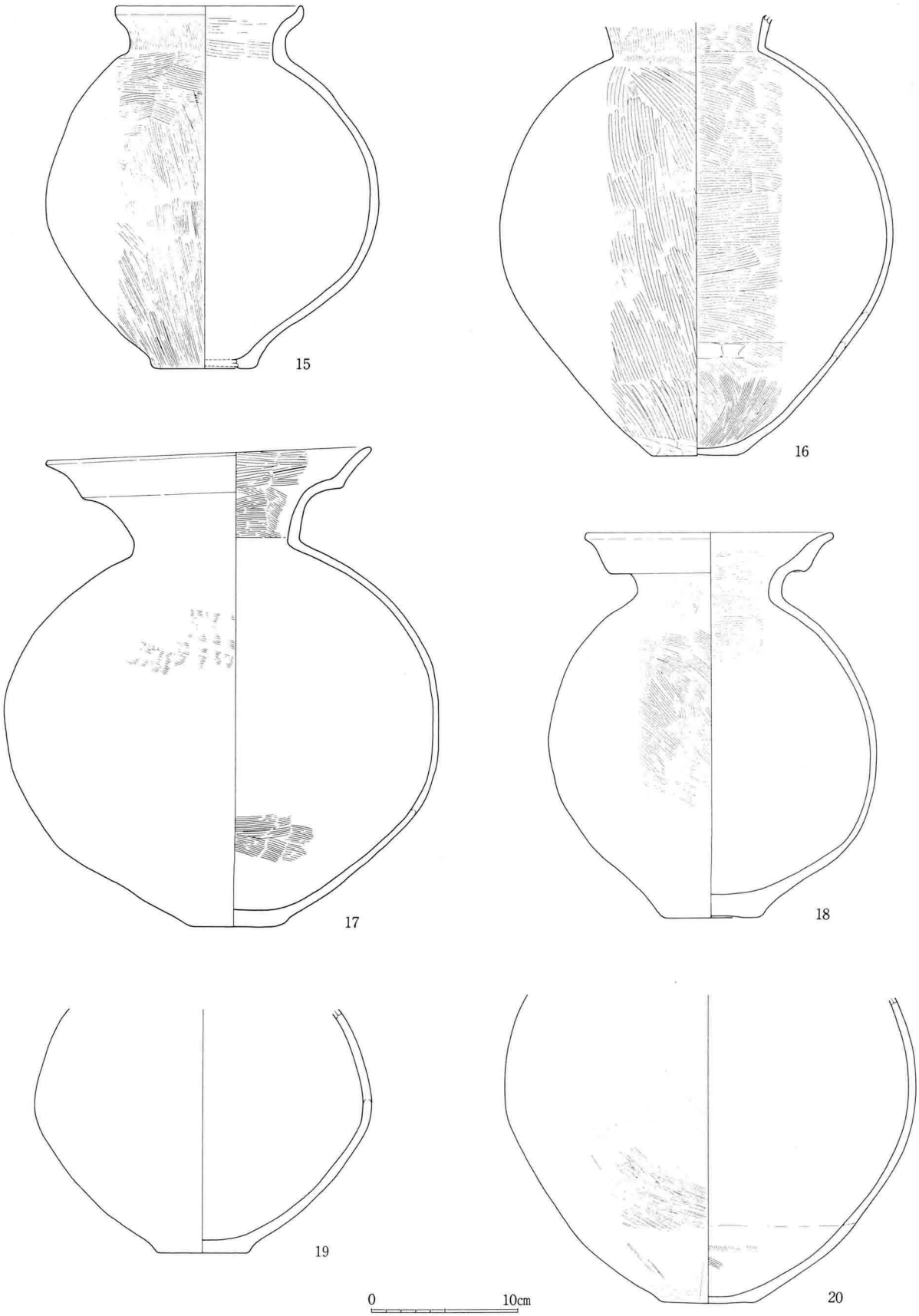


54図　14号住居址完掘実測図

Ⅲ－27　14号住居址（完掘）



55図　14号住居址出土土器実測図(1)



56図　14号住居址出土土器実測図(2)

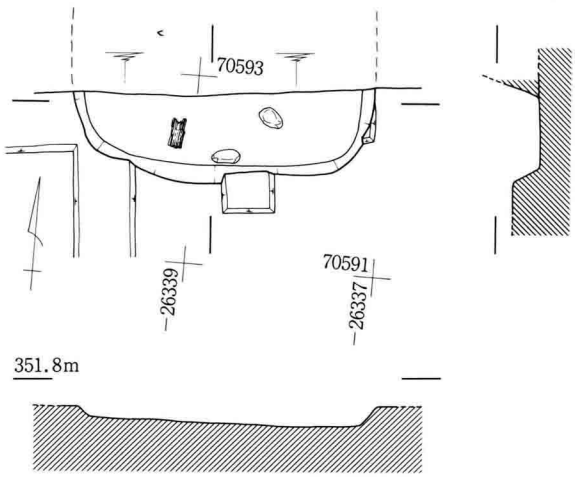
想する。北壁側の柱穴間中央に炉が設けられていよう。東壁から南壁中央にかけてと西壁に周溝状の溝が掘られている。南壁中央から内側に直交して長さ１m程の小溝がある。西壁にも同様な溝がみられることから間仕切り用の溝と考えられる。貯蔵穴であろうか南西隅に床面から20cm程掘り込んだ土坑がある。床面は平坦で堅緻である。遺物は南西部を中心に潰れた状態で出土している。

遺物（55･56図） 焼失住居のためか今回調査した住居址の中で一番多くの出土量をみた。器種には小型丸底鉢（１・２）・器台（３～６）・坩（８）・高坏（７）・甕（10～14）・壺（15～20）がある。鉢・器台・高坏は古墳時代前期を象徴する祭祀供献土器類であるが、これらとセットなす小型丸底坩がみられない。これらはヘラミガキ調整の精製土器であるが包含土壌ためか器面のアレ・剥離が著しい。小型丸底鉢は小さな椀形体部から口縁部が体部高以上に大きく外開する兜形の器形になり、器台とセットをなす。器台の坏部は皿形を呈し、脚部は直線的に外開して裾部が僅かに外反する。３～５の脚部には３個の円孔が穿たれる。高坏の坏部は大盃状に丸味をもって立ち上がり、裾部は大きく外開する。壺の口縁部形態には２種類あり、有段（17・18）のものと端部が小さく立ち上がり袋状を呈するもの（15）である。体部の器形は球形を呈し、最大径が中位または下部にある。また、体部下位はいくぶん直線的で、痩ける特色がある。体部外面の調整はハケナデを基調に、下部にはヘラナデ様のミガキが施される。甕には大小２形態あり、大形のものは内外共にハケナデ調整が多用され、口縁部が頸部から「く」の字形に外開することからハケ調整くの字甕と呼ばれている。小形のものはこれにヘラミガキ調整が加味され、丁寧に仕上げられる。

15号住居址

遺構（57図） Ａ区の東側遺構群の一つであるが、大部分が調査対象区域外にあり、調査では南壁側の一部を検出したにすぎない。形態は隅丸方形が予想され、東西の規模は3.2m前後の小型のもので、検出面から床面までの深さ30cmを測る。南壁の方向はほぼ東西軸線上にある。床面は東に傾斜し軟弱である。焼土・柱穴等は確認されない。床面には川原石や炭化材が認められ焼失住居の可能性がある。

遺物 出土量は少ない。土師器高坏・甕片がみられるが、図上復元が可能なものはない。



57図 15号住居址実測図

Ⅲ－28 15号住居址

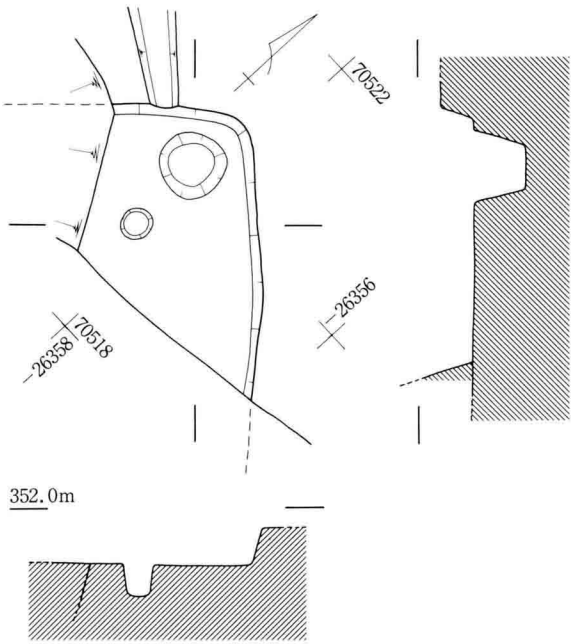
17号住居址

遺構（58図）　C区の西端に位置する。南側の大部分が調査区域外にあり、西側は攪乱により破壊を受け北東の一部を検出したにすぎない。規模は不明であるが、掘り込みが30cmを測る方形の形態になるものと思われる。柱穴は2個みられ、内側の小穴は主柱穴の可能性がある。床面は平坦で軟弱である。炉と思われる焼土は確認されない。

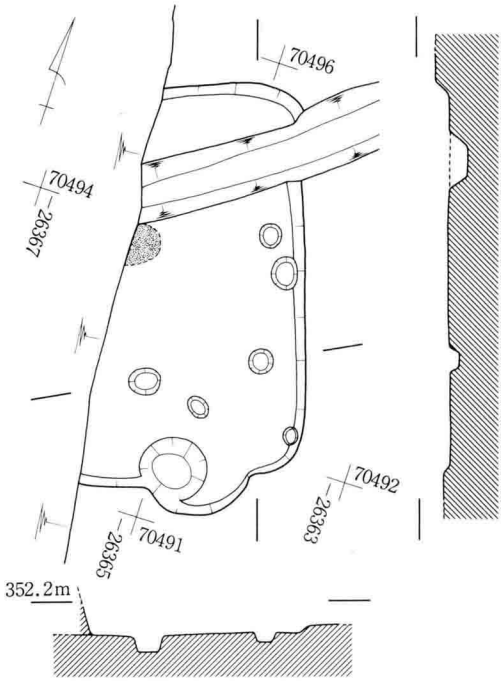
遺物　出土量は少なく、器台脚部の破片がある。

25号住居址

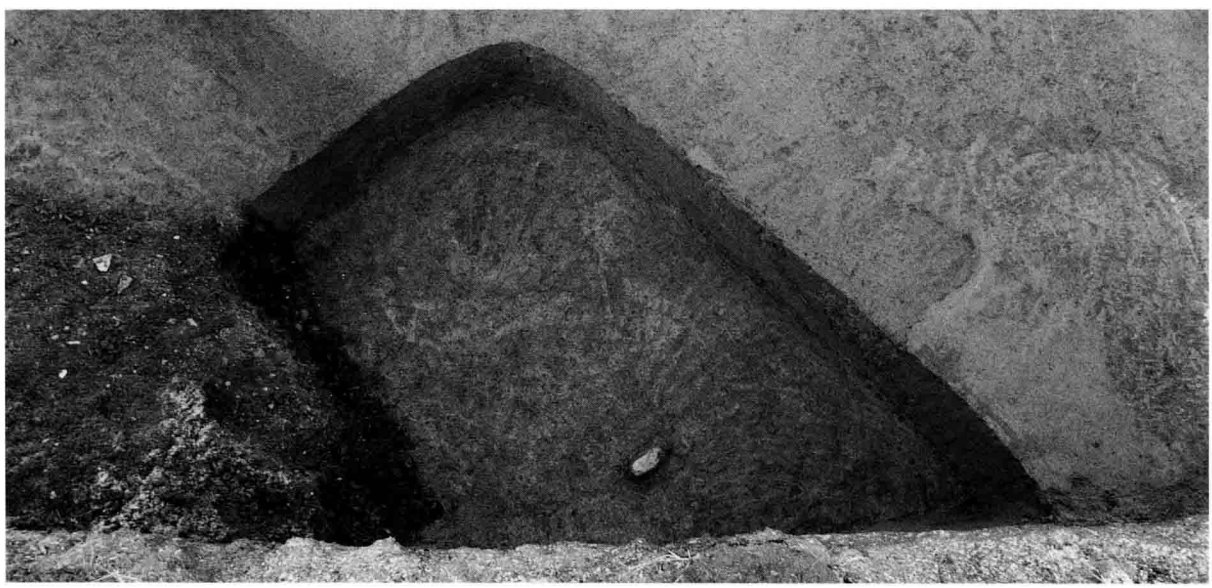
遺構（59図）　E区の南側に位置する。調査では東側半分程を検出したにすぎず、他は調査区域外にある。また、10号溝址と重複関係にあり、これに切られる。基本形態は隅丸方形になるものと思われる。南北の規模は4.1m



58図　17号住居址実測図



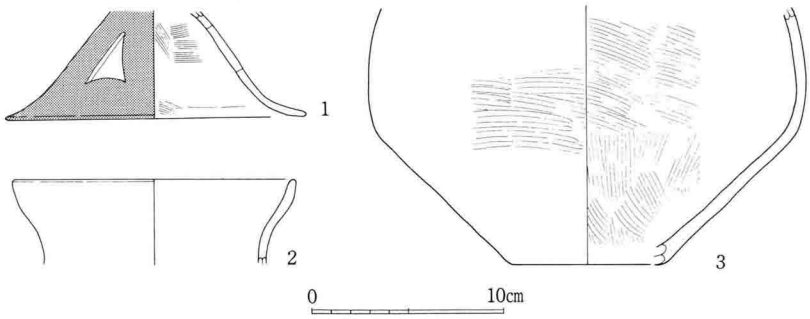
59図　25号住居址実測図



Ⅲ－29　17号住居址

Ⅲ－30　25号住居址

で、深さ12cmを測る。南北軸はN 18°W方向を指す。焼土が北壁寄りの調査区境に確認され、この位置に炉が設けられた可能性が高い。小穴が6個みられ、東壁沿いの南のものが主柱穴になるものと思われる。床面は平坦で軟弱である。



60図　25号住居址出土土器実測図

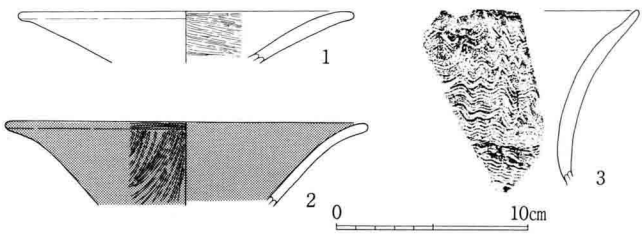
遺物(60図)　出土量は少ない。器種には土師器高坏（1）・甕（2）・壺（3）がある。いずれも弥生時代の系譜を引くようである。高坏の外面は赤色塗彩が施され、壺の体部下半の屈曲する器形、甕の口縁部が受口状になる等の特色がある。

第5節　弥生時代の遺構と遺物

6号溝址

遺構（6図）　E区の中央に位置し、東西に掘られた溝である。幅1,0～1.6m・深さ50cm程のU字溝である。弥生時代後期土器以外に他時期の遺物は出土していない。

遺物（61図）　出土量は少なく、図示できる個体は壺（1・2）・甕（3）片があるにすぎない。



61図　6号溝址出土土器実測図

遺物観察表(1)

図番号	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備　考
				口径	底径	器高			
1号住居址									
8	1	黒色	坏	18.0	7.3	6.2	3/4	ロクロ，内ヘラミガキ・黒色，糸切り	
	2	須恵	蓋	17.5	－	4.0	1/4	灰色，ロクロ，天井部回転ヘラケズリ	
	3	〃	〃	17.5	－		1/6	〃，〃，〃	
	4	〃	坏	13.4	6.1	4.3	1/3	灰白色・軟質，ロクロ，糸切り	
	5	〃	〃	13.0	6.9	3.7	1/5	赤褐色，ロクロ，糸切り	
	6	〃	〃	11.1			3/4	灰色，ロクロ，焼成後穿孔	
	7	〃	高台坏	14.7	10.6	4.1	完	〃，〃，底回転ヘラケズリ	紡錘車？
	8	〃	〃	10.3			1/5	灰黒色，ロクロ，底糸切り・回転ヘラケズリ	
	9	土師	甕	18.6			1/5	ロクロ，内ヨコナデ・粘土紐成形痕	
	10	〃	〃	24.2			1/5	〃，外体部ヘラケズリ，内ハケナデ	カマド
	11	〃	〃	22.6			1/6	〃，外磨耗，内カキメ	〃
	12	〃	〃	23.4			1/4	〃，外カキメ･体部中位下ヘラケズリ,内カキメ	〃
	13	〃	〃	29.4			1/8	〃，外体部中位下ヘラケズリ，内ハケナデ	〃
	14	〃	鉢	27.0			1/6	〃，〃，内カキメ	
2号住居址									
9	1	須恵	高台坏	15.2	10.4	3.6	1/2	灰色，ロクロ，底手持ヘラケズリ	
	2	土師	甕	14.0	6.4	(13.5)	1/5	ロクロ，体部下端ヘラケズリ	
	3	〃	〃	24.0			1/8	ロクロ，内カキメ	カマド
	4	〃	〃	24.8			1/6	〃，外体部中位下ヘラケズリ，内カキメ	〃
	5	〃	〃		10.0		1/5	内外ナデ，底木葉痕	古墳？
	6	石	凹石					安山岩，長軸6.1cm・短軸5.4cm	
3号住居址									
21	1	土師	甑	23.8			1/2	外ヘラナデ・ナデ，内ナデ	南隅土坑
	2	〃	〃	21.0			1/3	〃・〃，〃	
	3	〃	甕				1/4	外ヘラケズリ・ナデ，内ナデ	カマド
	4	〃	短頸壺	11.0			1/6	内外磨耗	
	5	〃	甕	15.0			1/4	外ヨコナデ・ハケナデ，内ヨコナデ・ハケナデ	
	6	〃	〃		7.2		3/4	内外ナデ，底木葉痕	カマド
	7	〃	鉢	17.0			1/4	外ハケナデ，内ヘラミガキ	〃
	8	〃	甕		7.4		1/3	外ハケナデ・粘土上塗，内ハケナデ・ナデ，木葉痕	〃
	9	〃	〃	21.4			1/4	内外ナデ	〃
	10	〃	〃	21.4			1/4	外ハケナデ・粘土上塗，内ナデ	〃
	11	〃	〃	21.5	8.8	13.6	完	〃・ヘラケズリ，内ハケナデ・形成痕	〃
	12	石	凹石					硬砂岩，長軸9.5cm	
4号住居址									
22	1	黒色	鉢	17.5	丸	12.5	完	外ナデ，内ヘラミガキ・黒色	
5号住居址									
50	1	土師	高坏	16.0			1/8	内外タテヘラミガキ	

遺物観察表(2)

図番号	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備　考
				口径	底径	器高			
6号住居址									
26	1	黒色	坏	13.1	丸	4.3	3/4	外ヘラミガキ，内ヘラミガキ・黒色	床直上
	2	〃	〃	13.6	丸	4.1	1/3	〃　，　〃　・〃	
	3	〃	鉢	9.5	7.0	11.1	完	内外ナデ・磨耗，内黒色	Pit内
	4	土師	〃	11.6	6.8	12.7	完	内外ヘラミガキ・磨耗	床　面
	5	黒色	高坏	12.9	14.4	10.9	3/4	坏内外ヘラミガキ，内黒色，脚外ヘラミガキ	〃
	6	土師	甑	22.0			ママ	内外ハケナデ・ナデ，把手1対	床面逆置
	7	〃	甕	16.0			1/3	内外磨耗，内ハケナデ	床直上
	8	〃	〃	17.6			1/3	外ハケナデ・ナデ，内ナデ	床　面
	9	〃	〃	16.3	30.0	7.0	1/2	〃　，〃	カマド左
	10	土	紡錘車				3/4	直径4.1cm・厚2.5cm・円孔0.6cm	
	11	石	砥石				ママ	凝灰岩・1面，置砥石	床直上
	12	〃	磨石				ママ	硬砂岩・1面，長軸22.0cm	床　面
7号住居址									
11	1	須恵	把手付坏	10.0			1/7	灰黒色，ロクロ，棒状把手1対	
	2	〃	坏	11.6			1/4	〃　，〃　，内ナデ	
	3	黒色	〃	13.5	6.6	6.5	1/2	ロクロ，内ヘラミガキ・黒色，底回転ヘラケズリ	
	4	土師	甕	11.0			1/3	〃	
	5	須恵	四耳壺				1/8	外タタキメ・灰白色自然釉，内ナデ	
	6	土師	甕	21.0			1/8	ロクロ，外カキメ，内口縁カキメ・体部ナデ	
	7	〃	〃	21.2			1/6	〃　，外体部中位下ヘラケズリ，内ナデ	
	8	〃	〃	24.4			1/5	〃　，内外カキメ	
	9	〃	〃	22.2			1/10	〃　，外体部中位下ヘラケズリ，内ハケナデ	
8号住居址									
52	1	土師	鉢		2.4		3/5	外ハケナデ・ヘラミガキ，内ナデ	
	2	〃	壺	18.8			ママ	内外ヘラミガキ，内ヘラナデ	床　面
	3	〃	〃	22.4			ママ	内外磨耗・ヘラミガキ，有段口縁	〃
	4	〃	高坏	17.4			1/5	外ヨコナデ，ハケナデ・ヘラミガキ，内ヘラミガキ	
	5	〃	甕？		6.4		3/4	外ハケナデ，内ナデ，上底	
	6	〃	器台		12.2		3/4	内外ヘラミガキ，3円孔	
	7	石	磨石				ママ	安山岩，長軸6.2cm	
	8	〃	〃				ママ	〃　，〃 8.0cm	
9号住居址									
28	1	黒色	皿	16.5	5.5	2.6	1/3	内外磨耗，内黒色	
	2	土師	甕	14.6			1/4	外ハケナデ・ナデ，内ナデ	
	3	〃	〃		4.7		1/4	内外ナデ・磨耗	
	4	〃	器台				ママ	内外ヘラミガキ・磨耗	古墳前期
	5	〃	甕	24.0	6.5	33.0	1/3	外ハケナデ・粘土上塗，内ナデ・成形痕	
11号住居址									
30	1	土師	坏	11.5	6.2	3.8	1/3	内外磨耗	カマド

遺物観察表(3)

図番号	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備　考
				口径	底径	器高			
	2	土師	坏	13.8			1/8	内外磨耗	
	3	〃	鉢	10.8			1/8	〃　，外ハケナデ	
	4	黒色	高坏	16.3			1/4	〃　，ヘラミガキ？	
	5	土師	鉢	11.8	7.3	11.1	1/3	内外磨耗・ナデ	床　面
	6	黒色	〃	16.0			1/4	〃　，外ハケナデ・内ナデ・黒色	〃
	7	土師	甕		7.5		ママ	内外ナデ	
12号住居址									
15	1	土師	坏	12.8			1/4	ロクロ	カマド
	2	〃	甕				ママ	体部タタキメ	
	3	〃	〃	23.0			1/10	ロクロ，内カキメ	カマド
	4	〃	〃	23.6			1/3	〃　，　〃　，口唇部面取り・凹線	〃
	5	〃	〃		5.6		1/5	外ヘラケズリ，内磨耗	〃
	6	〃	〃		4.4		1/2	〃　，内ハケナデ	〃
13号住居址									
32	1	土師	甕	11.0			1/4	内外ヘラミガキ	
	2	〃	高坏				3/5	〃　，坏内黒色	
14号住居址									
55	1	土師	鉢	10.7	3.2	5.7	1/2	内外器面アレ・ヘラミガキ？，底外無調整	床　面
	2	〃	〃	10.8	2.8	8.1	1/6	外ハケナデ・ヘラミガキ，内ヘラミガキ	フク土
	3	〃	器台	8.7	12.1	8.9	2/3	内外ヘラミガキ，脚３円孔	床　面
	4	〃	〃	7.8	9.6	7.5	1/3	内外器面アレ・ヘラミガキ？，脚３円孔	〃
	5	〃	〃		12.1		ママ	外ヘラミガキ，内ナデ，脚３円孔	〃
	6	〃	〃		10.3		1/10	〃　，〃	〃
	7	〃	高坏		11.6		1/10	内外器面アレ・ヘラミガキ？	
	8	〃	坩				1/4	〃　・　〃	
	9	〃	甑		16.8		1/8	外ハケナデ・ヘラナデ，内ヘラナデ	
	10	〃	甕	14.0	4.3	15.8	1/2	〃　・ヘラミガキ・内ナデ	床直上
	11	〃	〃	14.2	4.0	17.7	完	内外器面アレ・ヘラミガキ？	床　面
	12	〃	〃	16.8			1/3	外ハケナデ，内ハケナデ・ナデ	
	13	〃	〃	14.9	4.7	(19.1)	1/3	〃　・ヘラケズリ，内ハケナデ・ナデ	床　面
	14	〃	〃	15.1	5.8	20.8	5/6	〃　・　〃　，内ヘラナデ・〃	床直上
56	15	〃	壺	13.0	7.2	25.1	3/4	〃　・ヘラミガキ，内ヘラナデ・ナデ	床　面
	16	〃	〃		8.0		3/4	〃　・　〃　，　〃	〃
	17	〃	〃	22.4	6.4	32.9	5/6	〃　・　〃　，　〃　・ナデ	〃
	18	〃	〃	17.2	7.2	26.7	3/4	〃　・　〃　，　〃　・ナデ	床直上
	19	〃	〃		5.6			内外器面アレ・ヘラミガキ？	床　面
	20	〃	〃		6.6		3/4	外ハケナデ・ヘラミガキ，内ハケナデ・ナデ	フク土
16号住居址									
35	1	土師	甕	17.6	6.6	33.0	3/4	外ハケナデ・粘土上塗，内磨耗・ナデ	
	2	〃	〃		7.0		1/2	〃　・　〃　，　〃　・〃	

遺物観察表(4)

図番号	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備　考
				口径	底径	器高			
	3	土師	甕		7.2		ママ	外ハケナデ・粘土上塗，内ナデ	
	4	〃	〃		7.4		ママ	〃　・　〃　，内ハケナデ	
18号住居址									
38	1	黒色	高坏	11.4	12.0	16.7	完	外ヘラミガキ，坏内ヘラミガキ・黒色	カマド左
	2	土師	甕	15.0	4.0	20.1	3/5	内外ヘラナデ・ナデ	カマド右
	3	〃	〃		6.2		1/3	内外磨耗，外ハケナデ	
	4	〃	〃		7.2		3/5	外ヘラナデ，内ナデ	
	5	〃	甑	21.6	10.0	28.0	完	外ヘラケズリ・ナデ，内ナデ，把手１対	
	6	〃	磨石					硬砂岩・１面	
19号住居址									
	1	黒色	坏	16.2	丸	5.6	4/5	ロクロ，内ヘラミガキ・黒色	
	2	須恵	高台坏		9.1			赤褐色，ロクロ，底ヘラ切り未調整	
	3	土師	壺				1/4	外ハケナデ・ナデ，内ヨコナデ	古墳前期
	4	〃	甕		8.3		1/3	外〃・ヘラケズリ，内ナデ	
	5	須恵	〃	20.4			1/4	ロクロ，外体部タタキメ，内ナデ	
20号住居址									
39	1	黒色	坏	15.2	丸	5.6	1/3	内外ヘラミガキ，内黒色	
	2	土師	甕	16.8			1/5	外ハケナデ，内ナデ	
22号住居址									
42	1	黒色	坏	13.2	6.8	5.3	1/3	内外ヘラミガキ，内黒色	
	2	〃	〃	13.6	6.4	4.8	1/3	〃　，〃	
	3	〃	〃	12.8	7.5	5.1	完	〃　，〃，底ヘラナデ	
	4	〃	〃	14.7	8.4	5.1	3/5	〃　，〃，〃	
	5	〃	〃	14.0	8.0	4.7	完	〃　，〃，〃	
	6	〃	〃	13.7	8.8	3.6	1/2	〃　，〃，〃	
	7	〃	〃	13.2	8.2	3.7	完	〃　・黒色，内有段，底ヘラナデ	カマド
	8	〃	〃	13.4	8.7	4.0	3/5	〃　，内黒色・有段，底ヘラナデ	
	9	〃	鉢	13.2	8.8	10.1	3/5	〃　，〃	
	10	土師	手捏	6.4	4.4	3.0	1/4	内外ナデ，ミニチュア	
	11	〃	〃	6.8	4.4	2.7	1/3	〃　，〃	
	12	黒色	高坏	17.8			3/4	内外ヘラミガキ，内黒色	
	13	土師	壺	16.4			3/4	内外磨耗，内ナデ・成形痕	
	14	〃	〃	15.9	8.4	30.4	完	外ヘラミガキ，内ヘラミガキ・ナデ	
	15	〃	甕	26.0			1/4	内外磨耗，内ナデ	
	16	〃	甑	24.6			1/3	〃　，〃	
	17	〃	甕		8.2		1/3	内外ナデ	
	18	〃	〃		5.4		1/4	内外ハケナデ	
	19	〃	〃		7.0		1/2	内外ナデ	
	20	黒色	鉢？		8.6		3/4	内外ヘラミガキ，内黒色	
	21	土師	甑	25.0	10.8	27.9	3/5	外ハケナデ，内ナデ	カマド

遺物観察表(5)

図番号	番号	種別	器種	法量（cm）			遺存	成形・調整等	備　考
				口径	底径	器高			
	22	土師	甑				ママ	角状把手	
	23	〃	〃				ママ	〃	
23号住居址									
17	1	黒色	坏	12.6	丸	5.6	4/5	外ヘラナデ，内ヘラミガキ・黒色	床直上
	2	須恵	高台坏		9.1		ママ	赤褐色，ロクロ，ヘラ切り未調整	〃
	3	土師	壺				1/4	外ハケナデ・ナデ，内ナデ	古墳前期
	4	〃	甕				1/4	外ハケナデ・ヘラケズリ，内ナデ	
	5	須恵	〃	20.4			1/4	ロクロ，外タタキメ，内ナデ	床直上
25号住居址									
	1	土師	高坏	16.0			ママ	外ヘラミガキ・赤彩，内ハケナデ	
	2	〃	甕	15.0			1/4	内外磨耗・ナデ，3三角孔	
	3	〃	壺		8.4		1/4	外ヘラミガキ・ヘラナデ，内ハケナデ	
27号住居址									
19	1	須恵	坏	14.2	9.2	3.5	1/6	ロクロ，底回転ヘラケズリ	
	2	土師	鉢	13.4			1/2	外ハケナデ，ヘラミガキ，内ヘラミガキ	
1号掘立柱建物址									
47	1	土師	甕	14.6			1/4	内外磨耗，外ヘラミガキ，内ナデ	
6号溝址									
	1	弥生	壺	17.8			1/10	内外ヘラミガキ	
	2	〃	〃	19.2			1/6	〃　・赤彩	
	3	〃	甕				ママ	外波状文，内ヘラミガキ	

Ⅲ－31　12号溝址

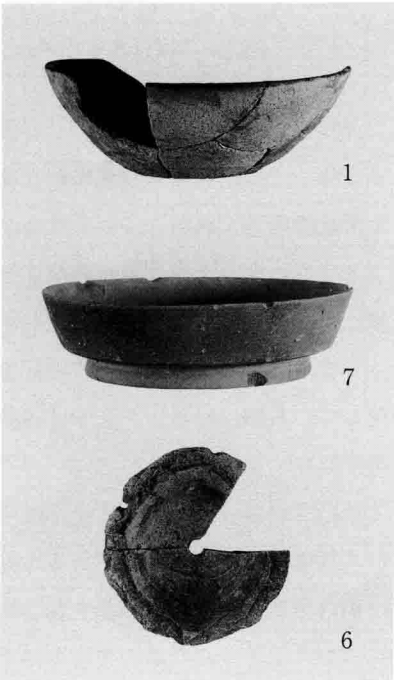
第Ⅳ章　結　　語

八幡田沖遺跡は裾花川扇状地に展開し、旧裾花川流路（南俣大堰・主要地方道長野菅平線）を北に対峙して西方遺跡が存在している。西方遺跡は主要地方道栗田屋島線高田道路改良や上高田第一土地区画整理事業に伴う発掘調査、東に位置する寺村遺跡・南向塚古墳の存在などから扇状地形に添った帯状微高地に展開していることが推測されるようになってきた。これに対し八幡田沖遺跡は信越郵政研修所地点と今回の宅地造成地地点の調査例があるだけで、遺跡の範囲を確定することは困難である。また、西方遺跡同様に帯状に展開している可能性もあるが、今回実施した発掘調査での遺構の分布状況（６図）から西に若干延びるものの遺跡の主体部は当該調査地内にある様相をみせている。すなわち、居住遺構はＢ区とＣ区に集中して展開しているのに対し、Ｆ区では確認できず、その他区では散在的な在り方を示し、信越郵政研修所地点でも住居址は存在しない。

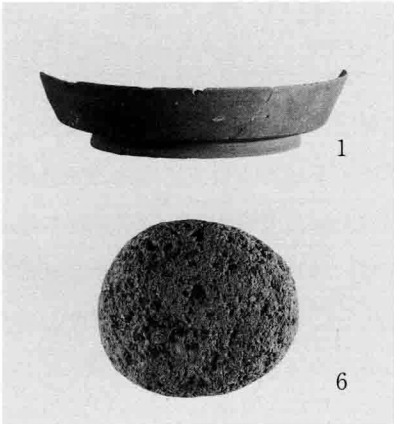
八幡田沖遺跡に人的行為が認められるのは弥生時代後期の土器が出土した２条の溝があるが、数点の土器破片をもって時期比定をしている。居住施設と関係が不明である点から疑問符が付く遺構で、後世の所産である可能性も高い。ちなみに当遺跡で一番古い遺物は12号溝址から出土した弥生時代中期の壺体部破片と２号掘立柱建物址からの打製石鏃があげられる。古墳時代に入ると前・中期の遺構が散在的にみられるようになる。遺物の出土量が少ないので時間的推移を追うことは困難である。ただ、14号住居址は焼失遺構で、小屋組炭化材等に混じって一括土器資料を検出することができた。兜形の小型丸底鉢・小型器台・高坏の祭祀供献土器、有段口縁壺・ハケ調整くの字甕等の器種があり、古墳時代前期後葉の土器セットとしても裾花川扇状地開拓史を物語る一級の資料である。古墳時代後期後半には再び集落が形成されるが、その規模は小さなもので母村に対して枝村的存在が予想される。住居址規模も他の遺跡に比べても小型で、遺物の出土量も少ない。中でも６号住居址は一辺４ｍ代、22号住居址も一辺５ｍ規模の遺構であるが、共に焼失住居であり、廃棄時の生活什器類が残されている可能性が高い。器種には黒色土器坏・高坏、土師器甕・壺・鉢・甑等がある。坏の底部が平底化の傾向があり、甕の口縁部の外反度が弱く長胴化するという特色がある。また、３号・９号・16号住居址出土の甕にみられる熱保持ためか体部に精製粘土の上塗り行為がみられ、この時期の特色の一つとしてみいだすことができる。これらの遺構にたいする首長墓を少し遠いが安茂里古墳群に求める。奈良・平安時代の住居址はＢ区とＣ区から検出されているが密集化しない。小規模な集落であろう。奈良時代のものは須恵器坏の底部調整が回転ヘラケズリであることから27号住居址を抽出する。他の住居址は須恵器台付坏の存在や突出型カマドの構築等から平安時代初期の遺構に比定する。

以上のように八幡田沖遺跡は弥生時代後期に人影をみせ、古墳時代前期後葉に小集落が営まれ、一時断絶後の後期後半至り再び人々の生活の場として選定され、平安時代初頭まで居住地として利用されたといえよう。生活の背景からうかがえば、扇状地故の各種条件により稲作や畑作に適した生産可耕地が少なく大規模集落への道を歩めなかったのであろう。

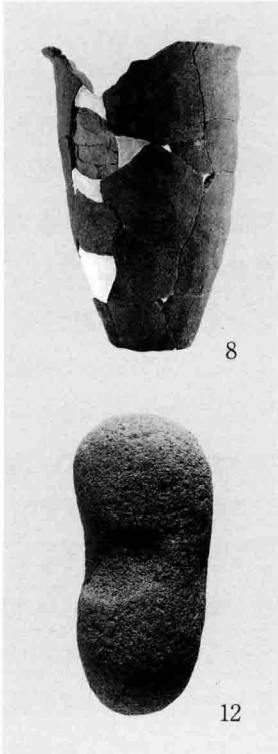
SA1



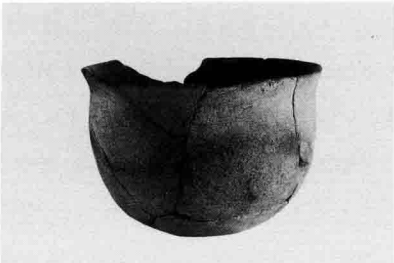
SA2



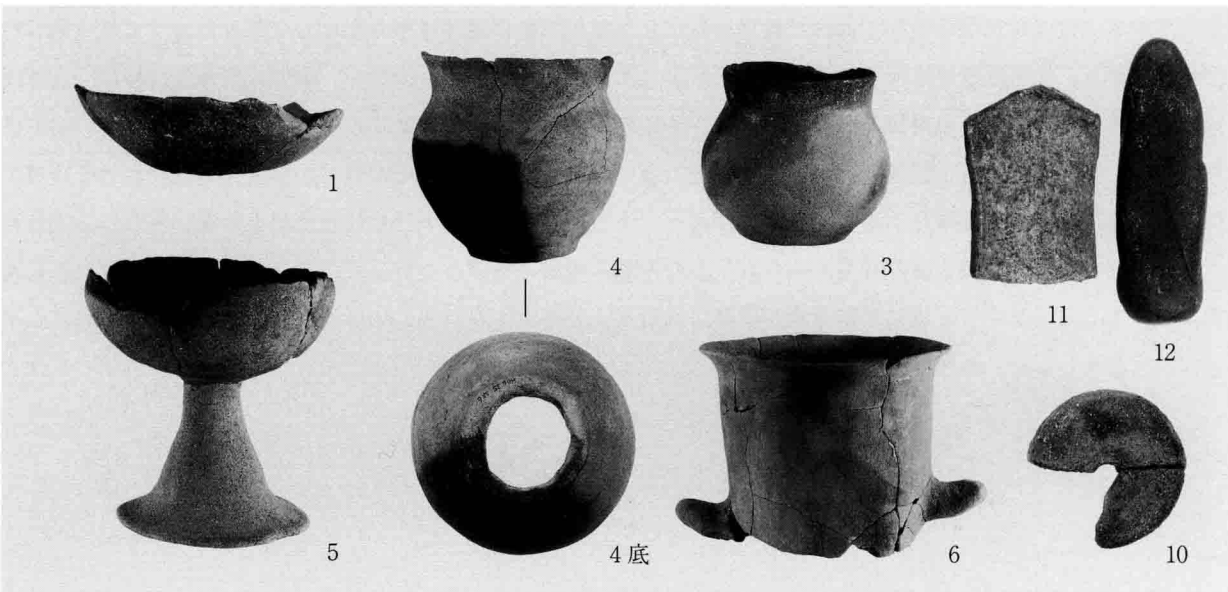
SA3



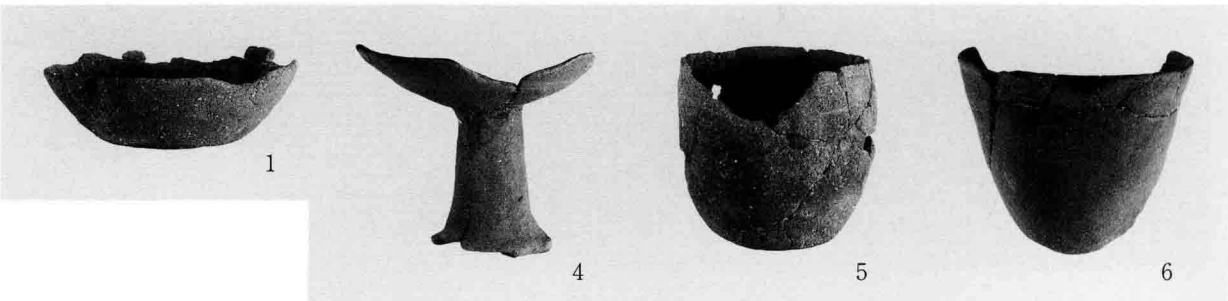
SA4



SA6

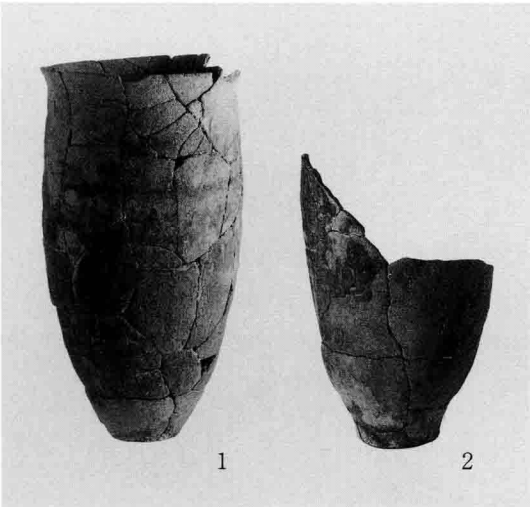


SA11

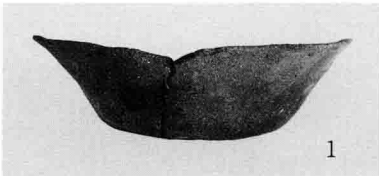


S A 9

S A16

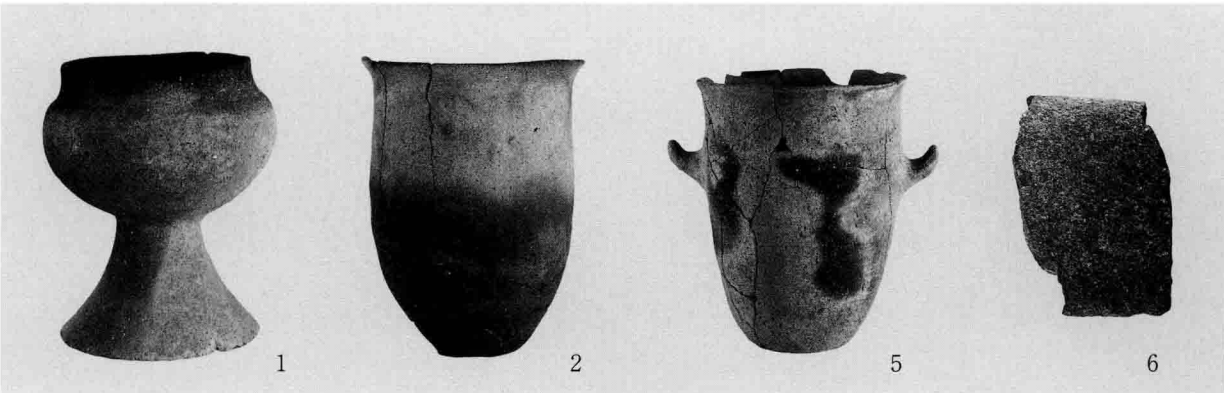


S A20

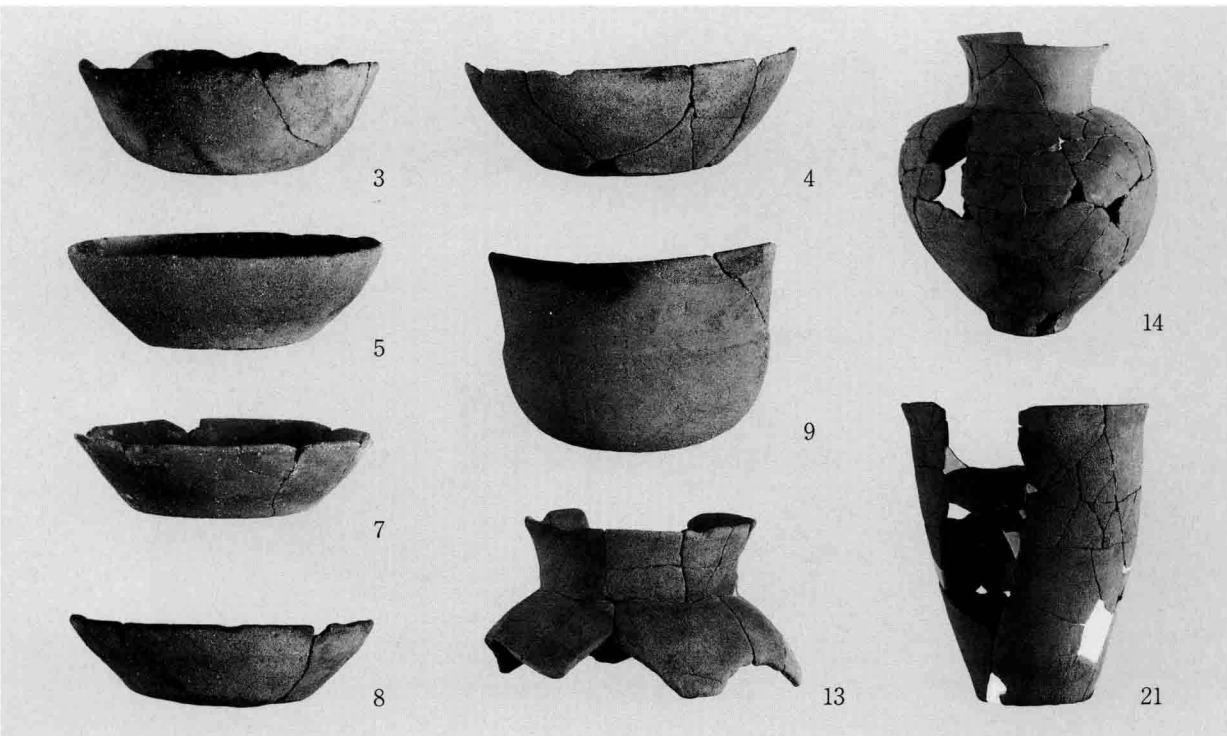


S B 2 − P 5

S A18

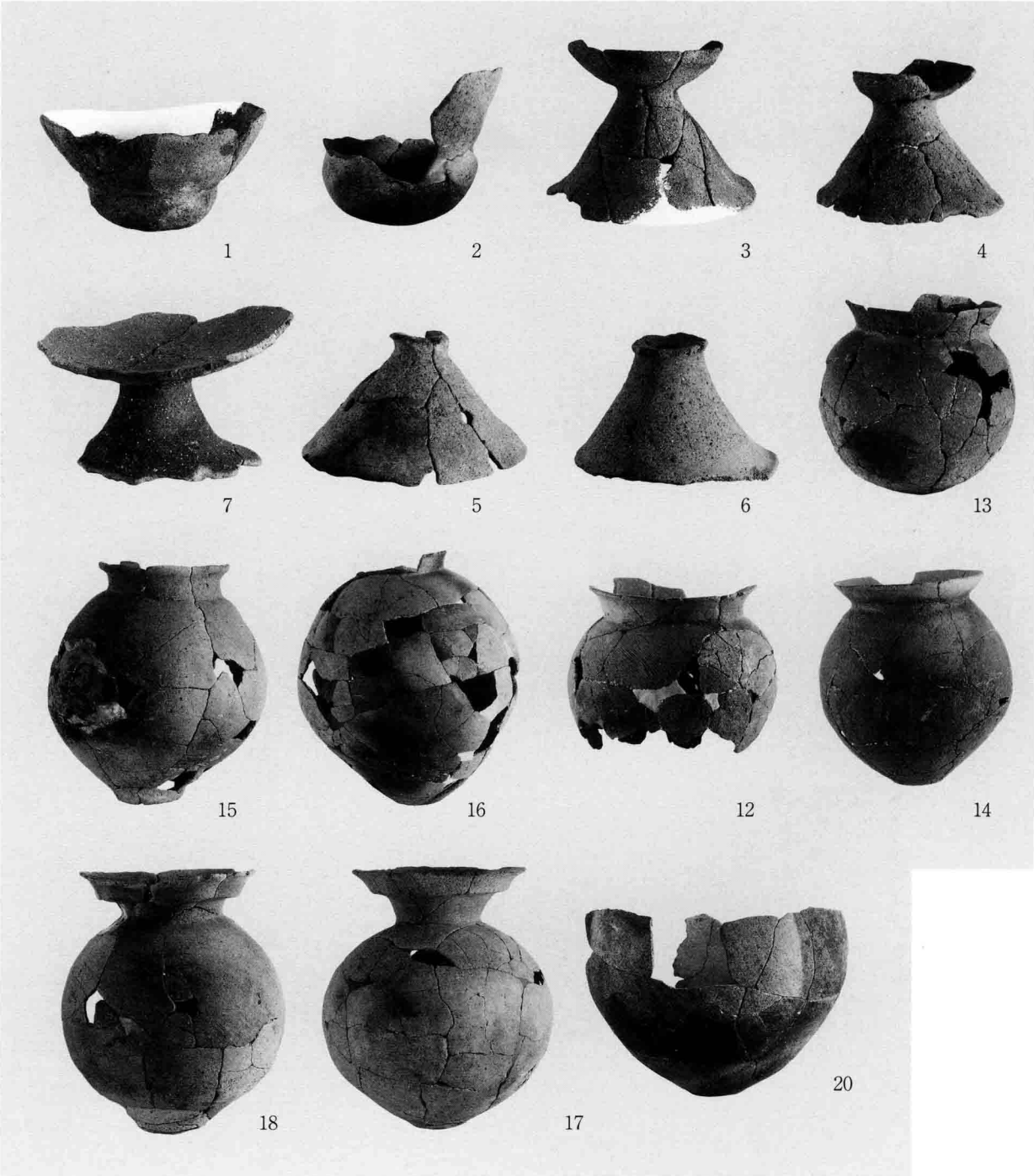


S A22



S A 8

S A 14



報告書抄録

ふ り が な	はちまんでんおきいせき
書　　名	八幡田沖遺跡
ふ り が な	いなばみなみまたじゅうたくちぞうせいじぎょうちてん
副　書　名	稲葉南俣住宅地造成事業地点
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第70集
編 著 者 名	矢口忠良・飯島哲也
編 集 機 関	長野市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026－284－0004　FAX 026－284－0106
発行年月日	1995（平成７）年３月31日
印 刷 業 者	ほおずき書籍株式会社

ふりがな 所収遺跡	ふ り が な 所　在　地	コ　ー　ド 市町村	 遺　跡	座標（第Ⅷ系） X＝　70540m Y＝－26350m 経　緯　度 北緯 36°38′07″ 東経138°12′20″	調査期間	調査面積	調査原因
はちまんでんおきいせき 八幡田沖遺跡	ながのけんながのしいなば 長野県長野市稲葉2419番地３他	20201	B－015		19931108 ～ 19940218	3,900m²	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主 な 遺 構	主　な　遺　物	特記事項
八幡田沖遺跡	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居址７軒	土師器・須恵器・黒色土器・磨石	扇状地内の小規模集落
		古墳時代後期	竪穴住居址12軒（内１軒焼失住居址）・掘立柱建物址２棟	土師器・黒色土器	〃
		古墳時代中・前期	竪穴住居址６軒（内１軒焼失住居址）	土師器	〃・焼失住居址から土器セット資料
		弥生時代後期	溝址１条	弥生土器	

長野市の埋蔵文化財　発掘調査報告書一覧

1968年　第１集　『信濃長原古墳群』
1976年　第２集　『浅川西条』
1978年　第３集　『中村遺跡』
　　第４集　『塩崎遺跡群』
1979年　第５集　『塩崎遺跡群(2)』
1980年　第６集　『三輪遺跡　－付水内坐一元神社遺跡』
　　第７集　『田中沖遺跡』
　　第８集　『篠ノ井遺跡群』
　　第９集　『四ツ屋遺跡（第１～３次）・
　　徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
1981年　第10集　『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
　　第11集　『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
1982年　第12集　『浅川扇状地遺跡群　－牟礼バイパスＡ・Ｅ地点』
1983年　第13集　『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・
　　川田条里的遺構・石川条里的遺構』
1984年　第14集　『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
　　第15集　『箱清水遺跡(2)』
1985年　第16集　『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
1986年　第17集　『浅川扇状地遺跡群　－牟礼バイパスＢ･Ｃ･Ｄ地点』
　　第18集　『塩崎遺跡群Ⅳ　市道松節－小田井神社地点遺跡』
1987年　第19集　『土口将軍塚古墳　－重要遺跡確認緊急調査－』
　　第20集　『三輪遺跡(2)』
　　第21集　『芹田小学校遺跡』
　　第22集　『長野吉田高校グランド遺跡』
1988年　第23集　『横田遺跡群　富士宮遺跡』
　　第24集　『塩崎遺跡群Ⅴ　殿屋敷遺跡』
　　第25集　『小島柳原遺跡群　南川向遺跡』
　　第26集　『東番場遺跡』
　　第27集　『小柴見城跡』
　　第28集　『宮崎遺跡』
　　第29集　『浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡』
　　第30集　『地附山古墳群』
　　第31集　『町川田遺跡』
1989年　第32集　『中条遺跡』
　　第33集　『鶴前遺跡』
　　第34集　『石川条里遺跡(4)』
　　第35集　『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
1990年　第36集　『屋地遺跡Ⅱ』
　　第37集　『篠ノ井遺跡群Ⅲ』
1991年　第38集　『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』
　　第39集　『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
　　第40集　『松原遺跡』
　　第41集　『小島柳原遺跡群　中俣遺跡・
　　浅川扇状地遺跡群　押鐘遺跡・檀田遺跡』
1992年　第42集　『田中沖遺跡Ⅱ』
　　第43集　『南宮遺跡』
　　第44集　『塩崎遺跡群(7)』
　　第45集　『石川条里遺跡(6)』
　　第46集　『篠ノ井遺跡群(4)』
　　第47集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・
　　本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』（第１分冊）
　　第47集　『浅川扇状地遺跡群　二ツ宮遺跡・
　　本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』（第２分冊）
　　第48集　『小島柳原遺跡群　中俣遺跡Ⅱ』
1993年　第49集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡(4)』
　　第50集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』
　　第51集　『松原遺跡Ⅱ』
　　第52集　『田牧居帰遺跡』
　　第53集　『岩崎遺跡』
　　第54集　『古町遺跡流人塚』
　　第55集　『浅川扇状地遺跡群　駒沢新町遺跡Ⅱ』
　　第56集　『上見林遺跡』
　　第57集　『石川条里遺跡(7)』
　　第58集　『松原遺跡Ⅲ』
　　第59集　『史跡松代藩主真田家墓所』
1994年　第60集　『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』
　　第61集　『栗田城跡(2)』
　　第62集　『浅川扇状地遺跡群　三輪遺跡(5)・
　　小島柳原遺跡群　上中島遺跡』
　　第63集　『松原遺跡Ⅳ』
　　第64集　『小島柳原遺跡群　宮西遺跡』
　　第65集　『浅川扇状地遺跡群　牟礼バイパスＢ地点遺跡(2)』
　　第66集　『石川条里遺跡(8)』
1995年　第67集　『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡Ⅱ』
　　第68集　『栗田城跡(3)』
　　第69集　『浅川扇状地遺跡群　徳間本堂原遺跡』
　　第70集　『八幡田沖遺跡』

長野市の埋蔵文化財第70集
八幡田沖遺跡

平成７年３月24日　印刷
平成７年３月30日　発行

編　集　長野市教育委員会
発　行　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　ほおずき書籍株式会社